

自娛老錄

昭和七年三月上浣起筆

三

特別

14

1919

439



自娛老七録

昭和七年三月上游起筆

○前年寅舟の干支入常より廿年春吾日印刷令祀の
 社名職又二一坊の訓示演説を多し此時此市を論じ此
 ことがある。市は猛獸として悲んではゐるが、實に腰刀の
 動搖がある。人を怖るから、咄みつくのがある。故に無分
 別に怒ると我れを忘る。廿二年の暴徒、怒河の勇
 と、市心の無分別を云ふの如く、怒りも任かして、あはれ用
 り河に溺ることを知らずい。是る勇氣論す、是るな
 い。漫罵怒るといのが、真勇がある。何事をも怒んまへ
 ら怒らういひある。と云ふやうなことを云ふも、母謀る示



寺隆法 良奈 (置安殿夢) 薩菩音世觀

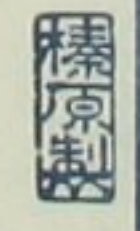
威(運動)をやつた日終(能)業をやつたことを晴々示しめられ
とがある。帝が果して隠病があるに否やハ、實ハ科学的に
讀んで見れば譯がどうもこれ。頃日東使の小品文を讀み、端
ろく帝の腰痛症を發見した。その左の如くである。

東使ハ其才の子由から、虎ハ此れを懼んやるといふを怖
と聞き、思ふにんまんを理があるか、おんか、如何
せん、その入を定地ニ試みることに出来た。係し自分
が嘗てやへた話に、忠為宮あるに帝が多くと
る。嘗て一婦人が二兒を連れ、二兒を沙上に置き、婦人
ハ河に衣類の洗濯をしてゐると、突如帝ハ山上より馳
せて来れり、婦人ハ倉皇あり沈んで之を避けたが、
小兒等ハ沙上ニ就ん帝が近づいたと一面向平氣な

標原製

つに、帝ハ較久しく二兒を見れば、遂に首を
延して兒等ニ觸れ見れば、兒等ハ癡
て其の怖るべきを知り、自らとてあつたが、帝
も遂にそのことを主とせしめ、之を依つて未だ
ハ帝の人を食らふの、先ハ威を以つておどし、之を
懼んハ食ひ、懼んハ白から懼んを避くるその
か。どうもふふことだが、虎ハ醉人を食はると、醉
倒のところがあつた、帝ハ是れを之を守りつて其の
醒あつてを俟つと云ふ、之亦其の懼ることを待つた
の、その人も意外に、ゆくり来り、門を蹲り
居つたのを、見れば、猪狗の類と見し、杖で之を撃つ
てハ、其物逃げ去る。後々月明の照して見れば、

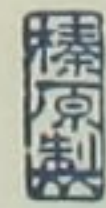
此の如く竹の席をうしと、是れ其人をうしとある
に、無き儀多し其氣の席を座しなす也、こ
の由で見え、人の席を懼るる嬰兒と碎人の
かくらんハ虎ハ却つて之を畏る、怪しむる也
の如く、吾ん子由の説を信せんとも
誇るる知ぬハ佛と嬰兒や碎人や其の悲すべきを
かく、席をせんハ其勇はかく可なりと為す、席の
ハ嬰兒の癢又信するものあり、彼人の怯を又七合
席ハ勇あるものあり、人事に於ても席を敷する
もの多し、感する不あるをある、三月一日
○予多く印を採す、印匡二十枚餘を数ふ。紙依合
常て今も貯らん若干の金を以て、予拍色し



全部の印匡を納め、支那家の柵を購ふ、亦七
七八幅五尺許、全部漆を以て塗る、扉二枚、米
の書時、螺細を以て填む、米苜の待書、藉、漢
の帖の如く見せ、書架にすること知るべし、吾ん此
架を得て、始め印の散佚、身を防ぎ、常（此以の）
を、前巻偶々石の事と録し、印を思ひ、赤柵を
思ひ、後未氣つがこと、（真）氣あつき、他
し、此の印柵、米苜の書ある、（真）越んお論らむ、米
苜、石を見せ、種する人、此人の石を、米苜酒色
も甚し、予、表在り、此の柵を獲る、其日、而
して、思はん、顔の表、義も、石を斬る、人前
を、毫も揮ふ、こん、印石を、呵護する、最也、
（此）

この書は、これを携へて他三、四の地へ行くものあり、
余も其の一人にして之れを記す。 三月一日

○近來頻りにプロシズムを視くものがある。プロシズ
ムは、現在の政治組織を誰と云ふものがある。こんきんり
民権主義自由主義の民主政治が最もよく政治組織
と信じてゐる。封建政治や官僚の専制政治より交動し
て以上の政治組織が可と云ふものも無理に無い、志がし
今、漸やく其契を成くさんとしてゐる。民主政治は多
数民衆の意思を反映して行はんとするものがある。
随つて多数を制する政黨が多数の民意を代表する
もの、如くあるが、事實上の決してそうである。政黨の
ハ民衆の中心である。黨は自身の私争である。彼等ハ



自黨の勢を伸さんとす。其の目七定らば、其の争ひの爲め
又四利氏福を抛りしあつてある。彼等ハ法選挙を以て
全部の地方官を改め、其の甚きに選挙監察も取り換へ
て、地方官を選挙の具に供せしめる。コンヤ市ハ地方
政治が本つてあるが、彼等ハ政權を得て肝腎の政務
を抛りて黨利を圖つてのみ汲み取りしめてゐる。彼等ハ議會
の戦ふこととをのみ大切なる業として、其を大の任論がな
い。任論が有りて之れを行ふの時間が無い。一黨が相
互の大概二年持つて、其の弊を断つ。斯の短期は、何れの任論
が行施設せんや。何れの黨も大資本家の機械を通さぬ
之れは皆いつの日か、其のことが出来ぬ。政黨ハ民意を代
表するもの、其の、次々資本家の利益を代表するものがある。

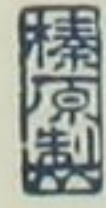
或と平均二年目前に依り選挙が行はれ、其の都府費す
所ハ一億圓を重人とするものがある。斯く團身市價の何と
まこと云へ凡の政治がある。折角多數を擁し、まこと自
ら崩潰する政黨すらある。政黨政治ハ濫費政治である。
権威と鉄く腰掛け政治である。多數を名とする少数政治
である。或階級を犧牲として或階級を専らと偏
頗政治がある。此斯きもの如何人を回利民福を企圖し得ん
や、民主政治ハ何んを回るにせむ其の鉄蹄を暴露し、今ハ
回民を飽かん厭ひ、而して日本亦其の跡を分ち漏んが、フワ
スレガムの説の描頭、来るハ偶然の事か、此の及動ハ恰
も官僚專制政治の及動として民主政治の起るやと曰
い、フワスレガムは民主主義を否定するものがある。



よ、專制ハ主義の復帰せんとするものがある。自由主義
を制限見するものがある。此の主義を起す横暴
を制するものがある。獨裁主義がある。此の階級
を起すハ回利民福を増進するが為め、純正の目的を出
る獨裁である。民主主義の鉄蹄ハ衆愚政治である。権略
主義ハ政治の鉄蹄、鉄く散漫政治である。未だ
三義四政治がある。真の回利民福を回るとするものハ純
正の獨裁主義を以て相當の期間権力を擁し、
階級的利己心を抑へる為め、自由を制限し、現在の如
く、未來の為め、経倫を行ふの落つきか、無んハるもの
階級的利己心を制するものハ自由を制限することにも正
を得る。其の外形ハ專制政治である。其の内容ハ

彼の既述に於て多く暴君を出し、専制政治と其内容
を甚に異らしむるものがある。此の政治組織の中央集権に
あつたゆゑに、干渉の下に、経済を管理せしめ、
其の政治も或る制限を加ふること、已むを得ぬ要
するに於て、強力を以て、政治を以て、國を料理すること
が、フラスリズムの特色である。

フラスリズムは強力を以て、一黨が且つて、政權を獨占して、
種族虐殺の、回利民福を圖るの、比から、愛國者の団体の
上、主たるものとする。其の政治の衝、又、あるもの、公正
無私であらうとする。全体政治は、多數のやうに、ハ
少數のやうな方がよい。一時暫且の政治を行ふことも、長
久の経綸を行ふ方がよい。唯此の政權が、少數の手に、左

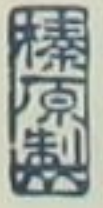


るとして、私曲に流るゝ、憂があらうけれども、多數政治
も亦多數を頼む、同じ弊に陥るから、同じこと
ある。力強き愛國団体が起つて、公正の道を踏む
時、於て、寡頭政治が許さう、回利民福増進の爲め
に、天許、自由を制限することがある、それも、許さう
である。ナレヨナリズムに、進んで、ほんし、を此の道程を踏
ぬる。

フラスリズムは、實に、試みて、成印し、伊太利がある。ムリニ
は、其の衝、常つて、から、既、十年、垂んと、して、ある。その、
治、後、回防、も、行、通、し、ゆ、る、見、る、心、き、よ、め、が、ある。伊太利の、全、
ク、ラスリズムが、更生、し、れ、と、う、く、得、る。ムリニ、云、く、現、状、を、維、持
する、ゆ、へ、の、止、する、政治、の、善、悪、の、政治、がある。良、き、政治

をこの次の時代に残すに、ヨリ良き國家を以てすることを
意味するの比と、ムリニ九年間理想を行ひしめぬの亦
未來の事への期待を云々せしめ、この事、フラスレムは特有
である。亦、憲政の政權を把つて、いふから起るのこともある。徒ら
に政權の爭奪をうみ、事として、室論撰撰、日月を費す
吾が政黨の如く、一七、九、人、が、政、法、の、改、善、を、望、む、こ
と、の、為、に、未、づ、こ、う、を、

世界大戦以來の國際的壓迫が甚しく、經濟的人種的政法的
闘争の猛烈ともなり、何れの國も脅威を多うけ、苟く不安
を感ずるもの。此等、對して祖國を守らば、聖國を守る
政權を要する。民主主義の國家の重きを、双肩に擔つて
危機を故少く、保つて、急務である。フラスレムは、以



懇からるん、一種英雄政法がある。伊大利、ムソリニ、も、英
雄的風格を有してゐる。然るに、英雄出づれば、フ
ラスレムは、起す得るの事、必らず、也、然るに、其、回
民、の、多、數、を、回、入、し、フラスレムを、是、認、す、る、は、於、此
ハ、其、の、支、持、を、依、り、英、雄、政、法、外、行、か、ん、得、る、の、事、也。今日
本、に、於、て、も、糾、つ、安、政、室、政、法、に、不、満、が、起、り、を、有、す。其、回、向
政黨、を、先、進、的、の、事、計、畫、を、な、す、る、が、先、に、先、進、的、の、事、計、畫、を、
フラスレムを口とせぬ、保、つ、る、に、事、實、に、於、て、フラス
レムを、証、歌、す、る、の、事、也。日本七列産此の政治體
を、其、の、下、に、更、生、を、圖、ら、ば、可、い、也。
與、る、の、事、は、フラスレムのある形、起、る、こ、と、を、否、定、し、の、心
を、以、て、此、の、政、法、體、に、決、して、萬、世、一、系、の、天、子、を、戴、く、

日本の國體を侵害するものがある。封建が勃然として立ちあがり、未
 だ起るべき、維新の如く、諸藩の傑士が私心を去つて、國體を
 護るに、鋭意の改良を遂げ、この相違はあつては、其趣
 は似たり、あるが、決して、決して、怒り、是の、新法の、もの、か、はる、の。
 日、ルク、不、主義の、無、産、堂、と、い、の、寧ろ、四、海、を、及、す。彼、等、
 ハ、フ、ア、ス、レ、ズ、ム、を、見、せ、ブル、ジョ、ア、の、御、用、堂、と、い、い、
 誣、誣、する、もの、也。此の、復、讐、の、生、殺、其、奪、の、權、を、資本、家、の
 上に、存、する、もの、也。あ、つ、て、不、平均、の、任、満、合、配、階、級、の、偏
 頗、的、横、暴、を、法的、に、制、せん、と、する、もの、也。ある、から、彼、等、の
 云、ふ、こと、も、資本、主義、の、偏、倚、す、る、もの、也。無、い。日本、の、無、産
 堂、の、如、き、ハ、内、江、を、こ、ん、事、と、い、醜、態、見、る、もの、也。何、れ、
 也。他、日、美、許、進、入、の、もの、也。優、位、を、買、ふ、べき、もの、也。吳、



國、の、音、節、堂、に、見、る、も、御、今、に、才、一、堂、に、あ、つ、て、何、等、の、任
 給、の、見、る、べき、もの、が、無、い。獨、己、の、社、民、堂、也。亦、然、り、
 こと、を、考、へ、る、と、思、は、れ、ば、
 月、三、日、記、

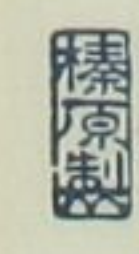
○頃、日、痛、致、の、提、造、(表、代、四、の、一、身)美術、学、校、に、あ、る、彫、刻、の
 多、の、造、詣、を、平、支、那、の、為、め、造、詣、を、刻、意、と、も、果、こ、す、
 ハ、何、れ、と、い、ふ、に、余、某、に、傳、へ、あ、つ、つ、
 二、三、を、贈、つ、て、あ、る。此、れ、法、体、を、刻、つ、つ、
 ハ、羅、漢、を、模、刻、し、つ、つ、
 顔、刻、者、に、似、た、く、佛、像、を、置、き、
 の、三、點、一、は、未、一、マ、一、面、像、形、大、き、
 の、為、め、心、り、な、す、もの、也。面、像、佛、の、侍、者、二、体、の、面、姿、

良に流心は日撰令しきもの皆整ゆるに惜あらく
ハ侍者一体の頭部を換す。捷送毎月余の宅に未
ると例とす。今ハ聖人を認ぶもの此道也あるは
か。春秋市をよむ。死ハ最ハ悲し。好し終るは
也。

（任軒と号す）

三月三日

○原市に進外府如謀の士。度立京都。在り時帝御
の左右に侍して。輔翼す。原ハ刺死。後
度立ハ盲目とす。と傳ふるも。蓋し輔翼す
き。若くハ意の如き。ゆきと云ふ也。原嘗て四防の
由建派を為す。其相川路聖謨の家。在り。聖謨
の家。吉子の御草と共に。推く来り。其の。無罪
は。氏七枚。認め。と云ふ。原任。任と云ふ。市



と進の。此人の。原。時。殺。ま。る。は。三十八。年
の時。と。云。ふ。此の。四防。建派。の。多。分。三。十。年。以。て。
任。花。と。唱。く。や。い。ま。頃。う。ん。侍。や。人。名。都。其。の
任。花。の。稱。あ。る。と。云。ふ。と。無。き。と。云。ふ。也。然。る。と。云。ふ。
跡。無。物。存。也。其。の。建派。の。故。長。ハ。外。四。船。の。海。未
して。跡。存。も。測。量。と。云。ふ。は。情。慨。し。敬。意。あ
る。事。あり。此。を。外。表。の。輕。侮。と。云。ふ。け。め。あ。る。こ
と。あ。ん。か。測。ら。れ。ら。し。と。數。々。伯。法。を。論。し。る。也。
家。を。花。未。に。此。人。の。手。書。も。し。知。購。あ。り。其。針。架
中。の。書。と。云。ふ。

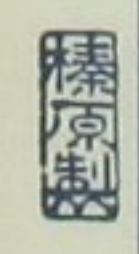
三月三日

○白樂天の詩云く
古人唱歌也唱情、今人唱歌只唱歌

今の歌を唄ふも情を唄ふも果しと家月かある。
多くは都を唄ふ者、必、偶に唱曲の歌元小
三郎の義子予に座右銀をとり、則ち書かす
世不。

三重三

○伊能忠敬の北海道測量著し、忘る可き人ひある。先
年忠敬と仰土を同し、五十嵐敏止も、北海道測量の
凡例と江戸湾附近の測量著し、今世一巻を定め
せんとし、ある。其後伊能の所記、前後北海道測量を行
へば、各地方の天文方位標至時、必、右側川か伊能に定む
北測を得也。測量の平例ひあるから、こゝろ其中
又、北の起し、今も是は花しとおふ。湯と、後、右の録、
勝り、字も、未だ、海、田、共、海、今、難、志、を、え、る、に、



伊能が漢波を測量し、此の事、一番、く、ぬめし、ある。目今
ハ之れを元し、始めて伊能が、死、命、の、人、を、伴、つ、れ、か、幕、府、の、伊、能、
が、あ、る、未、だ、ハ、ト、ン、サ、ハ、あ、つ、れ、か、漢、波、其、他、四、國、の、積、算、が、
い、ん、ち、待、遇、を、あ、つ、れ、か、漢、波、地、け、の、測、量、に、い、ん、ち、あ、つ、れ、日
子、を、あ、つ、れ、か、四、等、と、知、つ、れ、こ、と、を、得、れ、尚、ほ、伊、能、の、四、定、ハ、
今、現、れ、る、多、分、物、作、る、所、に、在、れ、し、め、て、伊、能、自、筆、の、北、海
道、測、量、の、始、め、の、測量、著、作、回、が、も、在、れ、し、め、る、こ、と、を、併、せ
知、つ、れ、即、ち、極、自、共、海、今、も、ぬ、め、し、ある。漢、波、測、量、の、一
冊、ハ、ま、じ、り、伊、能、家、に、在、り、し、文、書、ハ、據、つ、れ、し、の、ひ、あ
る、から、愛、す、其、の、全文、を、ぬ、め、し、お、く、

○上海の戦争も漸やく行つ、ま、此、折、柄、セ、ネ、ウ、の、縣、知、事、
今、度、の、開、合、が、迫、り、日、本、へ、ハ、恰、も、聯、軍、外、の、油、を、

委員が着いた。此時、當つて、聯軍の停戦の勅令が
 出たが、日支のこの日表を唱ひたが、撤兵の前後の
 就之、撤兵の起る、日本は支那の撤兵をせよと云ふを
 れ、めしと撤兵せよと云ふは、先南面倒れ、北
 北の、支那の撤兵が持たせ、日本は支那の死命
 を制する大勝を博した。我軍は南翔を占領し、真其如
 徳と占領し、河北一帯を占領し、終に吳淞砲臺を占
 領する利つた。敵は全く廿キ口の変を、支那人と掃蕩さ
 れた。我軍は、二十キ口以内の支那兵を、四、五、
 上海の安全を保つ所以、あるが、在つたが、我
 が威力、支那の之れを現すことを得た。撤兵の前後
 支那の最早問題、支那の全く、支那の降服

藤原製

伊能忠敬の讚岐測量

調査部主事 岡田唯吉稿

【緒言】

伊能忠敬が日本全国の測量を完成したと云ふことは有名
 な事で誰も之を知らないものはありません。然し、その忠
 敬が我讚岐の測量を如何にしたかと云ふことは餘り研究さ
 れてないやうであるから、杜撰ながらも其大要を述べるこ
 と、致します。私は伊能忠敬の舊宅が現に千葉縣佐原町に存
 して居ることを久しい以前から耳にして居ましたので、大
 正十年六月香取宮参拜の歸途少時を利用して車を馳せ大急
 ぎで舊宅の状態や、沿海日記や、各種測量器や作圖等の一
 部を見ました時偶然にも當高松家中久米榮左衛門との關係
 あることを忠敬自筆戊辰沿海日誌中に發見して歸り、更ら
 に翌々十二年三月上京の際、再び佐原の伊能三郎右衛門氏
 (忠敬の曾孫で、佐原町の資産家なり。徳望家なる所から嘗ては
 同町長に推されたけれど、之を固辭し今では町の修養會長をし
 て居ると云ふ)宅を訪ねて、緩々忠敬の遺品及戊辰沿海日誌
 の讚岐に關する部分を調査したのであります。又其後
 久米榮左衛門手記類中に忠敬讚岐測量に關する取調報告や
 手記等を發見しましたので、之等を参照して、此稿を草し
 たのであります。

【伊能忠敬に對する幕府の待遇】

忠敬が寛政享和年間に本邦東半部の測量をした時には、
 幕府の天文方高橋至時の一門弟として、官府後援の下に事
 を創めたのであります。が、愈々其手腕を認められて、文
 化元年(二四四年光)天文方出役勤務となり、尋で幕府よ
 り西國筋一圓海邊測量の命を受けたのであります。から今後
 東海道、近畿、中國、四國、九州等の測量は幕府直隸の官
 吏として、公然幕府の要務を行ふのであります。故に測量
 班員には忠敬自身の門弟の外新に天文方下役二名等を加へ
 て、其組織を一變しました。
 又實測に要する人馬、旅費、其他、巡測沿道諸侯に對す
 る通牒の如きものも、中々厳正でありました。文化二年二
 月二十四日觸書は次の通り。
 一、人足一人、馬二疋
 一、馬一疋宛 伊能勘解由
 右の外測量持運 高橋善助 下役二人
 一、人足六人
 一、馬一疋
 一、長持一棹持人
 右者此度、東海道、其外、西國、並中國筋、海邊浦々、測量
 爲御用差遣に付、書面の通無賃の人馬、被下間宿々村
 々に於て其旨相心得、往返共、無滞可差出者也。

(出張手當)

旅扶持、五人扶持一俵(但し一人扶持は一日五合) 雑用金一ヶ月に付 金三兩二分宛 忠 敬 宿代一ヶ月に付 銀一枚づゝ(三枚は四十)

別段手當一日に付 銀十四匁宛

内弟子 手當一ヶ月金二兩三分宛

其他筆、墨紙、蠟燭代等迄逐一支給せられた。

【四國地方諸侯の忠敬待遇】

一般諸侯は、忠敬の業務を重要視し特に四國の諸侯は忠敬の待遇向が頗る厚く、測量準備として、多勢の工夫を使つて沿海道路の改修若しくは新設をした箇所も少なくはなかつた、且つ、各藩共に普通の測量手傳員徳島藩などは十餘名の外別に、一定の家士數名を出して、其領域内を通じて、測量隊に附隨して諸用を辨せしめ、其他或は家臣を出して測量見習として忠敬に同行させました。

之は諸侯が能く幕府の命を尊重した事を表はすと、共に又其業務に對し大に警戒を加へたと云ふことが分る、そこで忠敬は一面非常の便宜を得たと共に、一面に於て間斷なく其業務を監視せらるゝ如き、状態にあつたものであります。

【忠敬一行測量班の組織及江戸出發後の往路】

文化五年二四六八年齊將軍 光格天皇松平頼儀京極高中 正月二十五日 忠敬は四國

二十九日、伊能、坂部、柴山、病氣、他の者は多喜濱附近を測量して歸る、此時讃州高松家中久米榮左衛門が菓子箱持參で伊能を訪問した。

一、同晦日、他の者は前日に續き測量しつゝ新居濱に向ひ出立、伊能、坂部、柴山は矢張病氣の爲測量を休み、直ちに西條出立乗船新居濱浦へ越し止宿、高松領政所(高松領に西條出立乗船新居濱浦へ越し止宿、高松領政所(高松領を政所といふ由)松田孫三郎、上野瀬平、伊能を訪問した。此度御用案内庄屋)

一、九月朔日伊能、坂部、柴山、文助は病氣の爲、新居濱から直ちに垣生村へ行つて止宿、着後讃州多度津領、白方村庄屋久兵衛、神田村庄屋小傳治が訪問した。(兩人添津領付)

一、九月二日時行風邪(忠敬は痰咳が痲疾で既に五月土佐高知島でも發病したこともあり閏六月宇和島でも發病したことがある)

一、九月四日丸龜領讃州豊田郡木之郷村庄屋團藏、三野郡寺家村庄屋仁助を訪ねた。

一、同九日曇天朝六ツ半川ノ江出立測量しつゝ四ツ半頃和田濱村に着(此日より伊能は病氣癒えたるか)

丸龜侯より御手代辻順左衛門を以て贈物があつた。

伊能、木綿七反、秀藏、木綿四反、佐左衛門、文助、木綿三反宛、庄作、佐助、谷八、木綿二反宛、藤吉、鼻紙

地方の沿海を測定し且つ往返の途次、二三の街道を實測すべき命を受けて江戸を出發しました、其測量班の組織は次の通り

(下 役) 坂部貞兵衛、芝山傳左衛門正弼、下河邊政五郎、青木勝次郎勝雄

(内弟子) 伊能秀藏、植田文助、久保木佐右衛門

(供 侍) 神保庄作 (忠敬の甥)

(卒 取) 佐助、善八

其他從僕を合して全員十六人

右の一行は途中遠州氣賀街道山城の山科伏見路を測量し二月二十四日大阪着、滞在數日の後、舞子濱に出て、淡路岩屋に渡航した。三月五日岩屋から淡路沿海の實測を始め、東海岸を下りし洲本由良を経て南海岸福良に着し、三月十六日阿波撫養に渡り之から四國沿海の測量を開始したのであります。

そこで先づ阿波沿海の測量をすませ、それから土佐、伊豫の沿海を測量して我が讃岐に入つて來たのであります。

【讃岐測量の経過】

現今伊能家に藏されて居る、戊辰沿海日誌の記事によつて我讃岐測量の状況を述べる事と致します。

一、文化五年戊辰八月二十七日より二十九日まで伊豫西條城下、本町掛屋亮平方止宿。

三 東

一、同十四日豊田郡大濱に至り其翌日の月食觀測の準備をしたけれど、當日は暴雨の爲、目的を達しなかつた。

一、同二十日、丸龜止宿、小豆島肥土山村庄屋勘左衛門が訪ねた七ツ頃より雨夜は大曇高松領岸本九郎太郎久米榮左衛門が訪ねて來たが、夜が更けて居たので遇はなかつた。

一、同二十一日丸龜出立、金毘羅に行き、伊豫屋半左衛門方止宿。

一、同二十二日、朝飯後金毘羅參詣、直に金光院に立寄り座敷一覽。小豆島肥土山村庄屋勘左衛門、高松家中久米榮左衛門が來た。

一、同二十三日鹽飽本島泊浦に着、織田、豊臣、徳川諸氏より同島に下げられて居る朱印狀を見て、一々之を日誌中に寫しとつて居る。

一、十月初日、日食があるから、其數日前より、鹽飽本島泊浦に滞在して、測食準備をしたが當日は天氣晴朗で快測を遂げた。

一、十月七日、七ツ頃高松城下へ着、本陣東濱町、鳥屋仁左衛門、別宿新湊町堺屋清藏(本陣とは伊能の宿所)領主より贈物を持參した。 伊能鱒子一籠、秀藏、杉原一束五帖、佐左衛門、文助、

委員が着いた。此時、やむを得ず、聯名の停止の勅令が

杉原一東宛、庄作、佐助、谷八、藤吉、刻煙草一包宛、坂部、柴山、下河邊、青木、杉原二東宛、僕四人刻煙草一包宛。

一、同八日昨夜の贈物賣拂

伊能鱒子一籠代金三分、秀藏、杉原代金一分二朱、佐右衛門、文助、杉原代金一分宛、庄作、佐助、谷八刻煙草代金一貫文宛、藤吉煙草代金七百文、坂部、柴山、下河邊、青木、杉原代金二歩宛、小物四人、煙草代七百文宛渡る。

一、同九日より二十二日まで、直島、豊島、小豆島等の島嶼を測量して再び高松に引返し之から東讃沿海を測量しつゝ。

一、十一月四日、迄を經過して、同五日より再び阿波に入り、同八日撫養に着し茲に四國全圖の實測を完結し同十一日淡路福良に航し、淡路の殘部を測量して兵庫に航しました。尙ほ忠敬が我讃岐測量中の宿泊所を掲げて實測の經過を見るの参考に供することゝ致します。

【忠敬讃岐測量當時宿泊所一覽】

Table with columns: 月日 (Month/Day), 宿泊地 (Accommodation Place), 本陣 (Main Camp), 別宿 (Branch Camp), 備考 (Remarks). Entry for 九月九日 和田濱村 藤村甚太郎 出來屋兵輔 贈物アリ

Table with columns: 日 (Day), 宿泊地 (Accommodation Place), 備考 (Remarks). Entries from 十二日 觀音寺村 横山治右衛門 伊豫屋清七 to 十四日 小豆島庄屋村 庄屋三郎 左衛門 庄屋分家武大夫

五枚中一枚小一枚を作つて、之を幕府に上りました。外に風景圖十一卷を作つて、之を幕府に上りました。

【忠敬に對する高松藩の待遇】

高松藩では、忠敬一行の待遇に付て、周到なる注意を拂つたもので既に文化三年忠敬來讃に於て藩領沿海と往還街道との實測をした所の記録に残つて居る又久米榮左衛門古高松村正上野瀬平、鶴打村松田孫三郎を選んで、同測量班に對する各種設備上の準備や、接伴案内役を命じました、そこで榮左衛門は彼忠敬が伊豫西條城下に止宿中(文化五年九月)敬意を表するのと兼て測量方準備をする爲、訪問し、尋で九月二十日には丸龜、同二十日は琴平止宿中の忠敬を訪問してゐます尙榮左衛門は忠敬一行の測量班に對し、四國の他藩に於て如何なる取扱待遇をして居るかを参考の爲調べて居る手記が残されて居ます(現に鎌田共濟會郷土博物館に皆陳列)此中には種々詳細の事を記してありますが、次に其一部分の要を摘んで述べることに致します。

○丸龜より鶴足郡土器村へ御引移り以來測量始め一手先の桿通じ人夫積及船積覺り舟測の時ばかり

一、梵天持八人、唐繩引成者人足六人一銀臺持人足一人一、半圓臺持人夫一人以上合十六人、一、御召船八挺艘朝夕止宿より又止一艘一、梵天持船一艘に水二艘一、繩引宿まで送船の積り

【地圖製作】

忠敬は歸府後、直に隨行の下役、門弟等と共に測圖の製作に従事し、翌文化六年七月二十五日、三種の地圖(大四國十枚其他七枚)

Table with columns: 日 (Day), 宿泊地 (Accommodation Place), 備考 (Remarks). Entries from 十五日 小豆島 兵衛半十郎 上下同宿 to 五日 阿波杉野村 遠藤吉郎 兵衛寺 上下同宿

手紙が着いた。此時のやうな、聯名を以て停戦の勅令が...

委員が着いた。此時のやうな、聯軍の停戦の勦失が

船一艘に水一艘、一繩懸り見繕船七十石積舟の天摩一艘に隨
夫四人乗、測量方御役人中 猪牙船家頼 召舟一艘、步行板
梯子積船 召船に付添臨時 以上、以上測量御用船合八艘、
水夫二十二名

○土州、宇和島、松山、今治、西條、諸藩に於て、忠敬一
行に對する贈物、宿泊料理、測量用小屋船、人足、馬匹
等の數までも細々としてあり、就中宇和島藩に就て
の取調へ録には、御國境假小屋、御小休幕串圍天幕張、
假雪隠御夜具、葛籠に入御名札付、蚊帳並裕衣、同、刻限延引の
時は甚だ御立腹の由朝七ツ時四時迄に人足萬々手都合仕
り相待居る様仕る可き事、御本陣の片脇へ、目印建のこ
と、初て止宿並御他領へ御移りの節は、御酒差出し御宿
及御間割(宿一軒にては六間入用手狹相應の家なき處は)御朱
印臺(伊能様一間)御厨子三方御菓子入用 膳碗上下無差別
御泊り御料理御書御料理のこと。

○伊能様御召船五十一艘、御領主様御紋付麻幕内へ紫幕御菓子殿
坂部様御召船同草履ワラジ積廻一船二艘、御召船御茶方船三
艘、御召船二付添家形野風呂御座 道具積廻し船二艘(以下略)
候ても土瓶にて數六つ許り

鎌田共濟會決算及豫算

昭和六年度經費收支決算

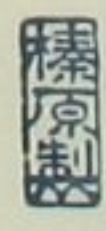
收入之部	支出之部
一金參萬六百四拾八圓四拾四錢也	一金參萬六百四拾八圓四拾四錢也
支出之部	
圖書館費	育英費
社會教育館費	調查部及博物館費
公益事業援助金	慈善費其他
本會費	特別準備金
決算利餘金	

昭和七年度經費收支豫算

收入之部
一金參萬參千參百拾壹圓五拾六錢也

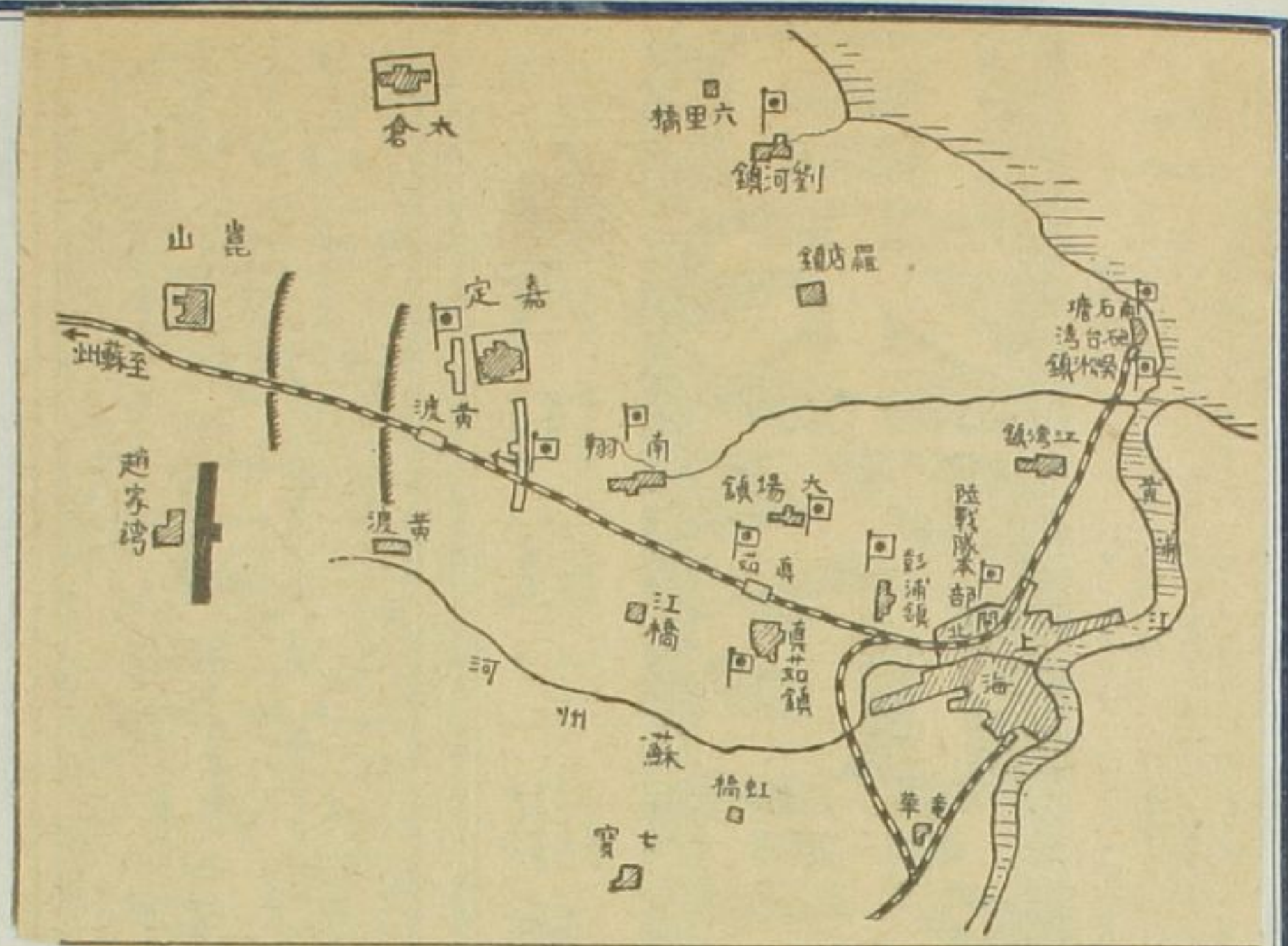
に在る。此の由我軍有令、其の停戦の令を告げしに、其の
二校、其を得て、其の停戦の令を告げしに、其の
る。各をよめて見ると、其の所以と云ふは、彼等
の戦術もまた、其の戦術もまた、其の戦術もまた、
不慮と彼等の信し、其の無理なるを、其の無理なるを、
其の事をも、其の事をも、其の事をも、其の事をも、
得攻らざる、不利の事である。吾軍が力戦を、
死地に陥り、其の事をも、其の事をも、其の事をも、
して日本共、其の事をも、其の事をも、其の事をも、
ら、其の事をも、其の事をも、其の事をも、其の事をも、
の恩恵を、其の事をも、其の事をも、其の事をも、
●抱え、其の事をも、其の事をも、其の事をも、其の事をも、

一聯隊全滅の報も時以列すを兄たり。斯の体念に停戦
しつとすんば、彼人の恐るる日本敵し得ざる故に如斯し
と悪宣傳をうつすや免せり。最重大切の時機に於て、彼人の
根拠地を陥れ、或人と對抗不能の状態に彼人を陥れ、
其の海陸両将士の努力に實に多しとする。此の如斯し
て後の停戦は、彼人の死命を制する。是の、今、南北一帯
日軍放銃し、日本を詔歌する。有り、亦、支
那人、慮、思、う、る、其、も、日本、の、利益、に、就、し、難、き、こと、を、知
ると共に、支那軍閥の利益に就し、難きこととを
知り、る、人、元、末、上海、の、こと、を、四、海、都、市、の、附、近、に
柵、營、を、甲、の、根、拠、地、に、ある、最、大、の、恐、る、る、人、を、
列、國、の、注意、に、上、ら、せ、る、こと、を、う、め、其、の、所以、を、知、る、



とせん、今回の事実は之を証す。位置を伴うて、英米
佛支那と紛争を生ずる事、ある、必、然、と、す、日本、の、
利益、を、守、り、若、し、其、を、感、ず、る、事、は、日、本、が、占、め、る、列、國、の、為、の、事、也、此、上、の、事、は、休、戦、今、夜
ハ、北、洋、の、地、に、然、る、支、那、の、軍、備、を、置、く、こと、を、禁、止、す、
し、然、る、事、は、軍、閥、の、い、つ、ら、も、世界、の、累、を、為、せ、ん、
幸、に、調査、を、受、け、る、戦、術、を、一、覽、を、為、す、思、半、心、
過、く、る、事、も、ある、ん、
日本は其の領土欲を止むる事、唯此權益の防禦
の爲めは、亦、其、犠、牲、を、拂、ひ、し、其、權益、を、保、護、
す、い、つ、た、他、列、國、の、權益、を、保、護、す、る、事、は、日、本
の、支、那、を、遣、り、東、洋、の、平和、を、保、つ、る、理、也、列、強、

の如く紛争に乗して漁夫の利を得るものありとあるが、英獨
 佛三四が往年日支の紛争に干渉して各々の
 利を各々みんとすこと今尚ほ誰かの記憶も鮮からざるを
 ふじんの野心を推して日本を猜する莫ん。然るに
 此の如き著利を下せんとするに、決して樂觀を許
 さずとも、美まの今後こそ屬す、差あり一快を感ず
 満蒙に新國家の起ることを、是れ非ず
 虚政を換りし満蒙事件の物也。吾満蒙の權
 益を維持すべし。日本の飽むべし之れも援助せざ
 り可ざる。之れを援助すべし。支那を更生し、前途く
 所以也。日本は私心あるや、満蒙の新國家を助く
 り七亦支那を救んとするに在り耳。 三月四日記



といふ物なり。毎日の胞が上海の血を流してある。

の所が北の散葉中、午後の
 時か来たことも、流して、さか
 元敵手演を呼んで、物は何
 せんかやと、くら、市節、血の
 無い、魚、限ると、ソニエー
 せると、龍、七、年、魚、た、あ、
 演、た、あ、解、も、あ、貝、の、類
 は、甚、か、ろ、く、七、食、い、ん、ま、い、類
 の、よ、ま、ん、解、刺、身、ま、い、海、心
 る、を、解、ん、た、偶、に、解、の、解、解
 じ、塩、辛、を、心、つ、れ、の、か、あ、つ、れ、か、ら

その等ハ秘帳を兄のこゝろに就來する、豈又血取ることの由を
不物とす、忍んや、無血の由物、平和の氣あふを世に
こと、自から先人の如く酒をこゝろにのみ、
舞ひこゝろに未比、亦上海の流血かと思ふと、三井の如く
古國場、魔が亮漢の、ヒストリに、總命一ル橋市、報
とんれり、同くも亦流血沙汰を聴き、折角の采
和氣分も忽ち奪ひ去らん

三月六日記

國ハ自今も二回過つた人のあつ、漫原勢、互に敵の無
い人とす、バ、あんな人であらう。最早七十五号の友人
のあつ。誰ん、あの人か、亮手、敵死のやうと想像す
る、あつ、井上、前、花相が、暗殺せん、河も、い、出、木
こと、あつ。亮漢ハ廿一、界の、ち、年、井上を、殺、さ、

東京

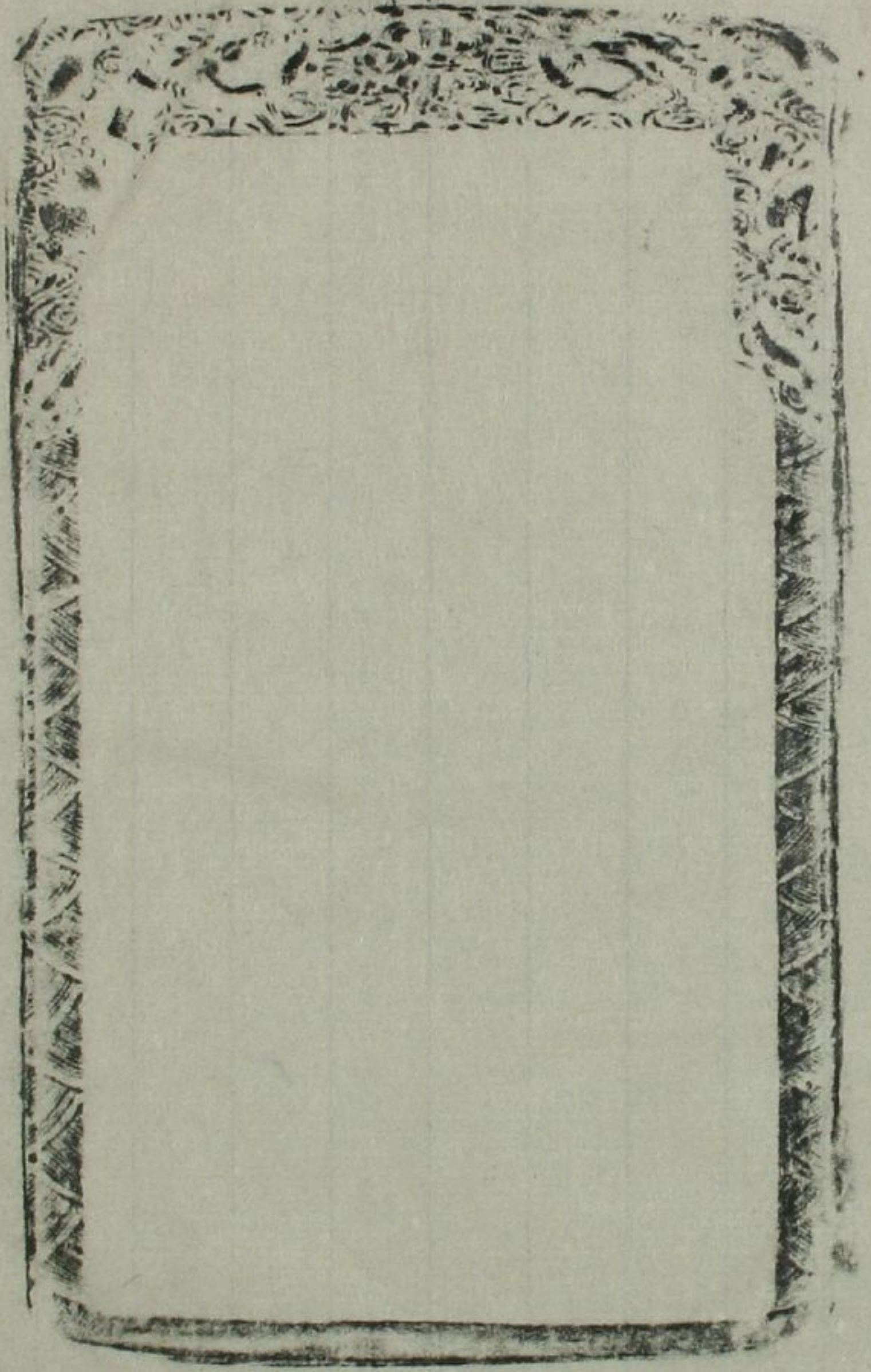
ハ亮漢と一味のよみあつ、ことが知んれ。賊界ハ巨額
ハ斯の、厄、過、ふ、の、ハ、何、の、存、因、も、あ、ら、う、か、若、者、共
ハ、賊、界、を、理、解、す、る、の、能、力、を、有、り、と、是、の、由、の、
言、ふ、不、何、の、あ、つ、も、先、ハ、ナ、ン、セ、ン、ス、也、英、作、氣、取
痛、の、所、考、と、す、す、外、ハ、あ、つ、さ、う、ハ、保、ハ、賊、網、を、懸
あ、の、空、氣、ハ、追、つ、清、原、の、う、つ、つ、あ、つ、ハ、事、は、美、地、
彼、等、と、し、ハ、亮、手、の、如、く、出、て、ハ、あ、つ、ハ、世、相、を、知、
く、ハ、あ、つ、せ、め、と、云、ハ、あ、つ、ハ、さ、う、さ、う、の、
ハ、利、店、暗、殺、を、防、
ハ、こ、こ、の、ハ、不、可、決、ハ、あ、つ、ハ、え、ん、を、絶、滅、ハ、ら、う、と、す、
ハ、悪、く、と、世、を、善、く、す、る、外、ハ、道、ハ、あ、つ、ハ、任、世、家、ハ、大
所、ハ、着、眼、セ、ね、ハ、ら、う、の、

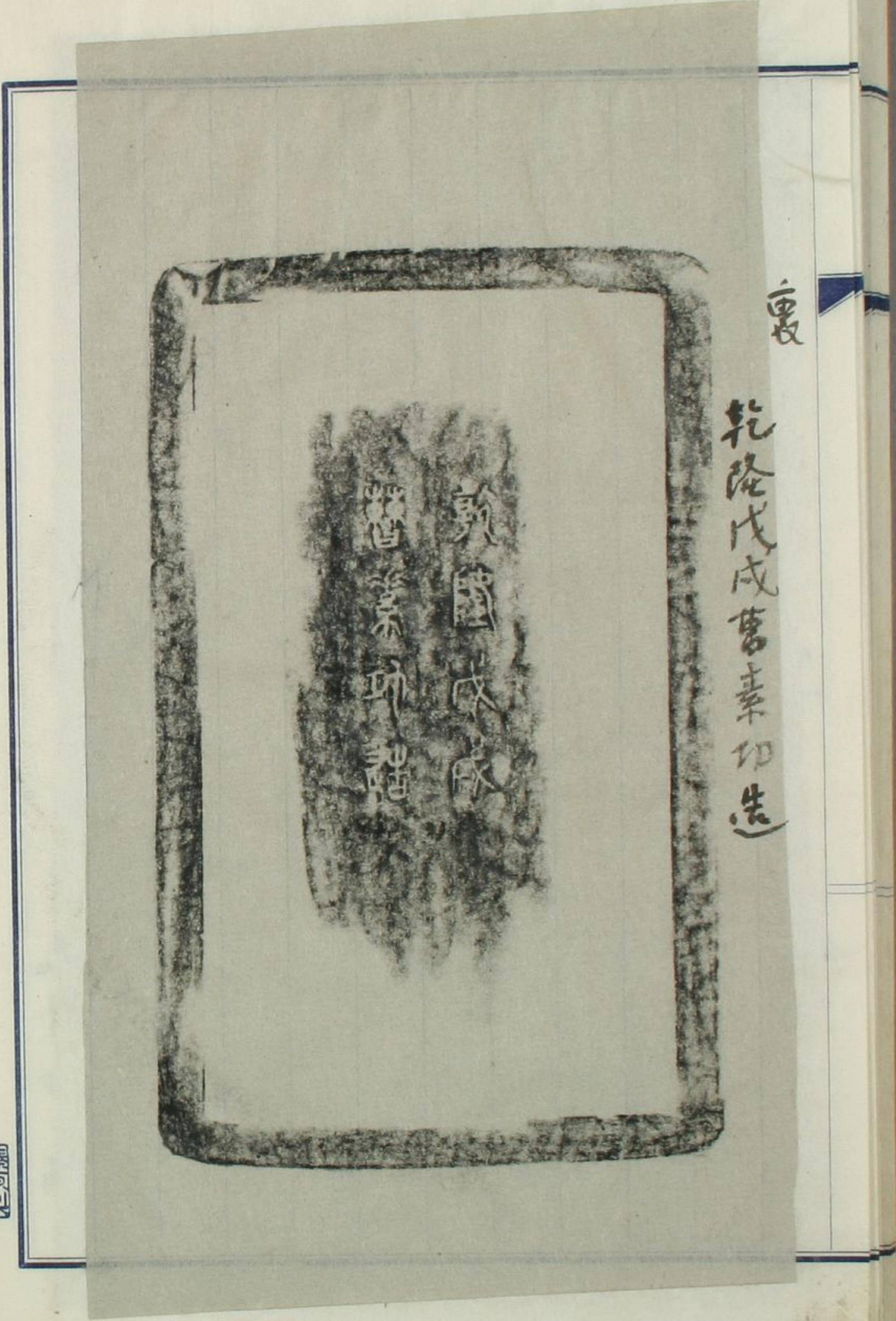
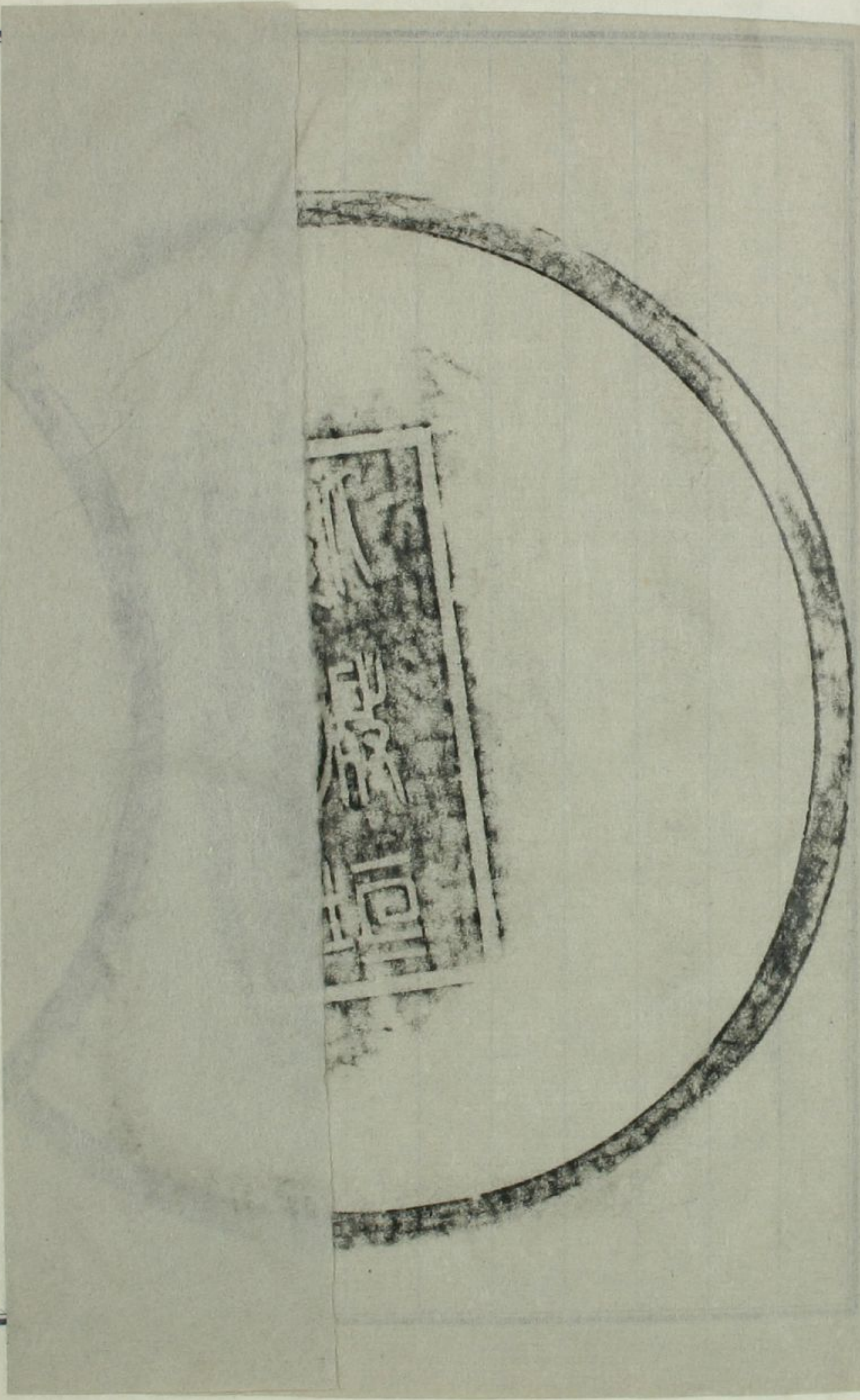
○余往年墨を蒐めれことがあつ。乾隆帝御家の大墨ハ

二三あり、方子魯の紫墨七あり、南都古板を
 朱の墨七数並あり、何れも在墨、一場しく磨
 して自用とする、思ひず、唯此玩弄するのみ。多
 西日程表房の紫墨を得んと、此が遂に獲り、
 此より、多偶に程氏の墨を譲りし来り、
 終に悔み入る、夫大初め、有志を充すを得
 此。願みん、往年、花の、在墨、今、
 又在り、唯、南都の古墨、数筋を、
 の、由つて、乾隆帝の、一墨を、保せ、
 硯形を、考す、上頭、硯製、の、金、
 匣の、新、更、を、醫、す、こ、と、を、得、ん、
 三月六日記



法製衣
 二
 拓出スル
 能ハス
 金二子也



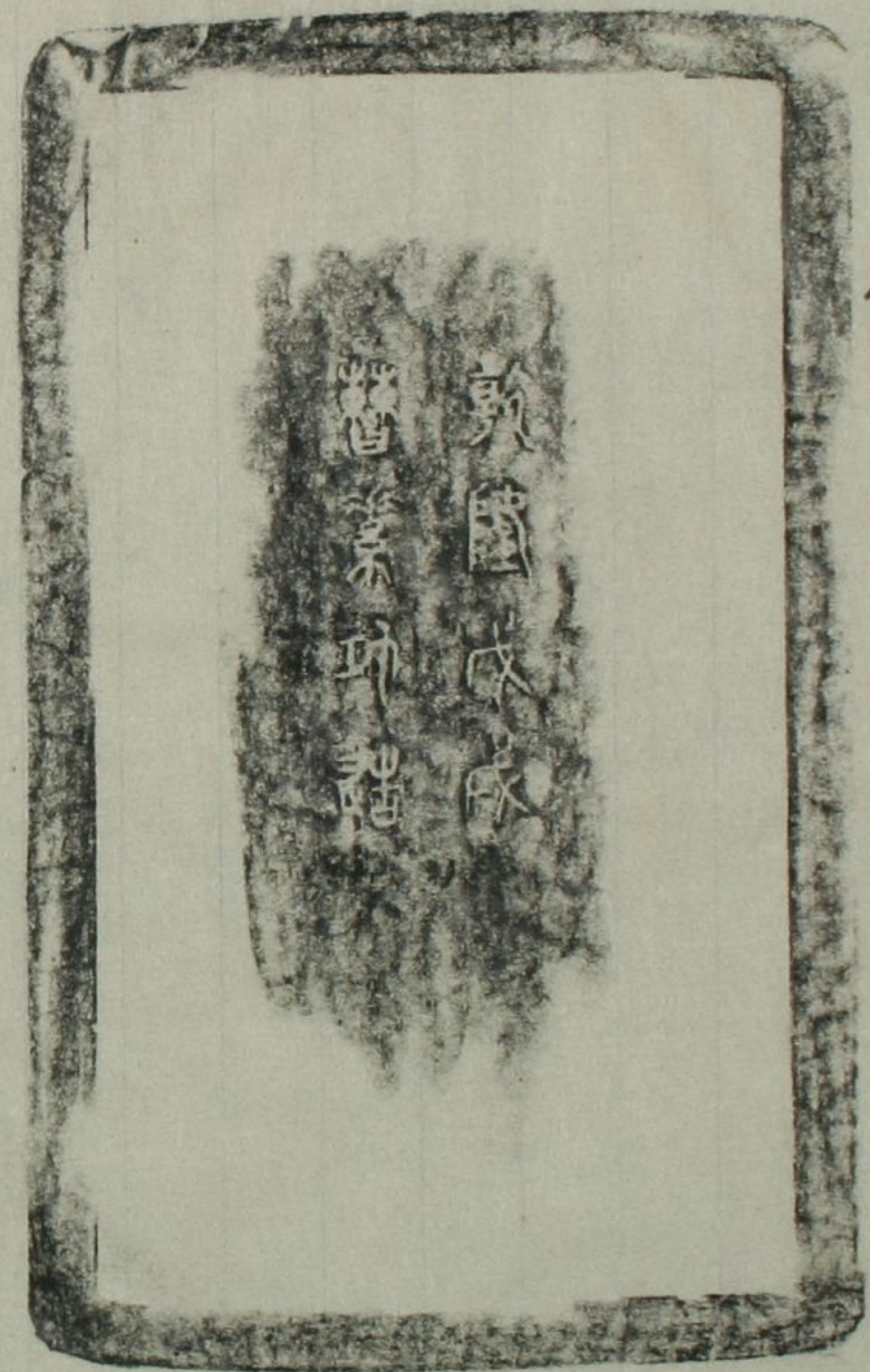
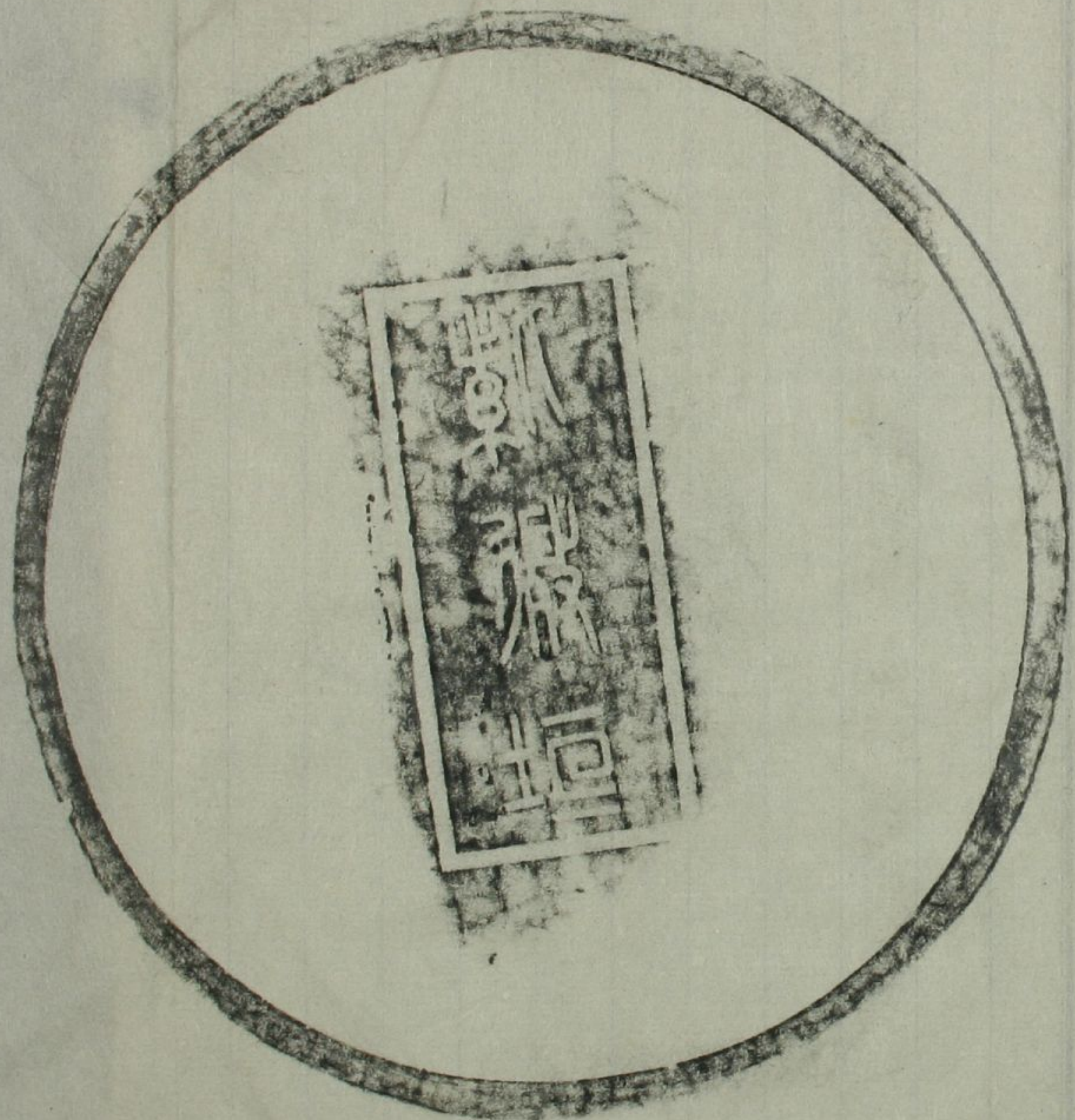


裏

乾隆戊戌葛素切造

敦國戊戌
習業切造

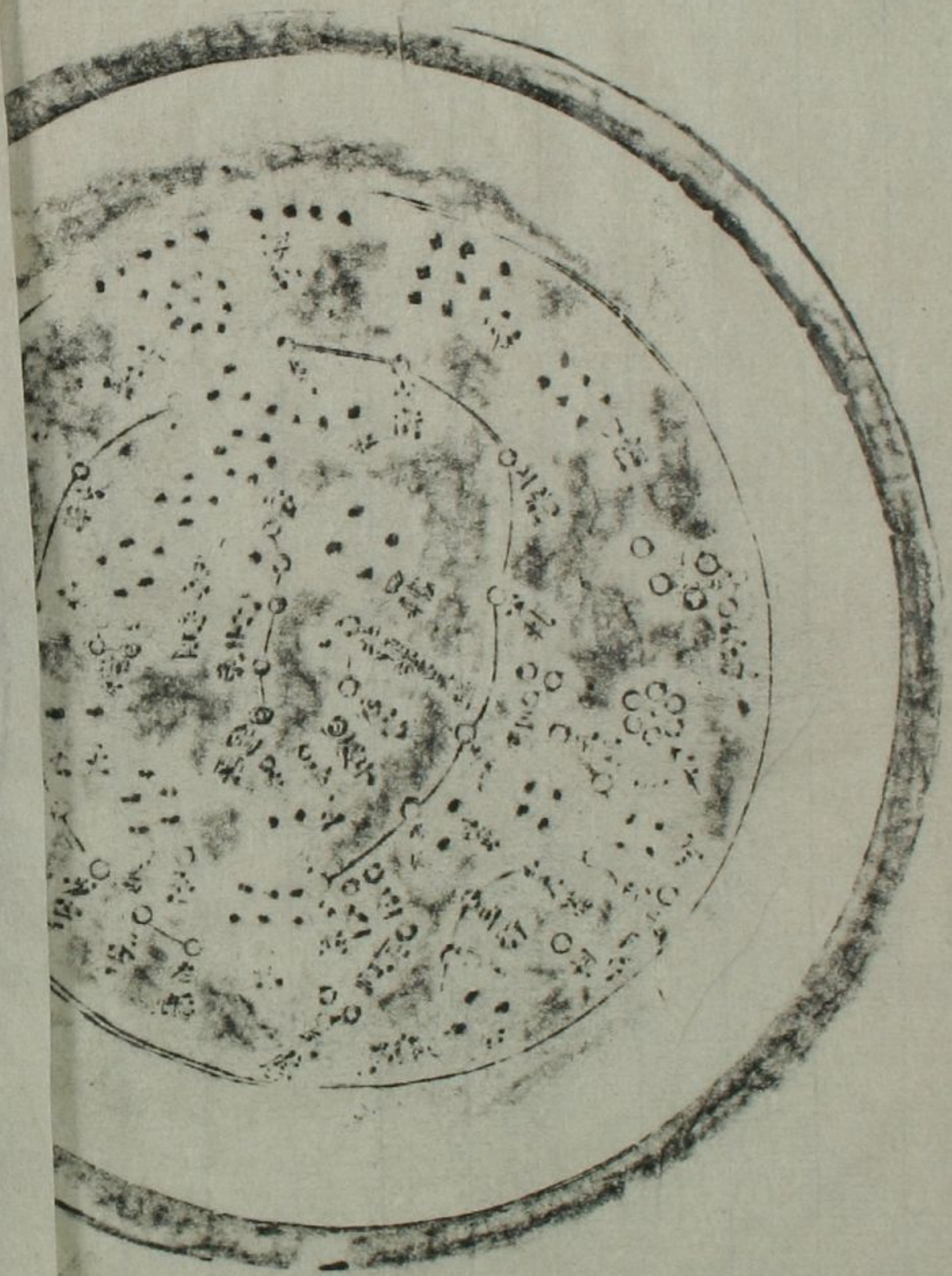
標原製



裏

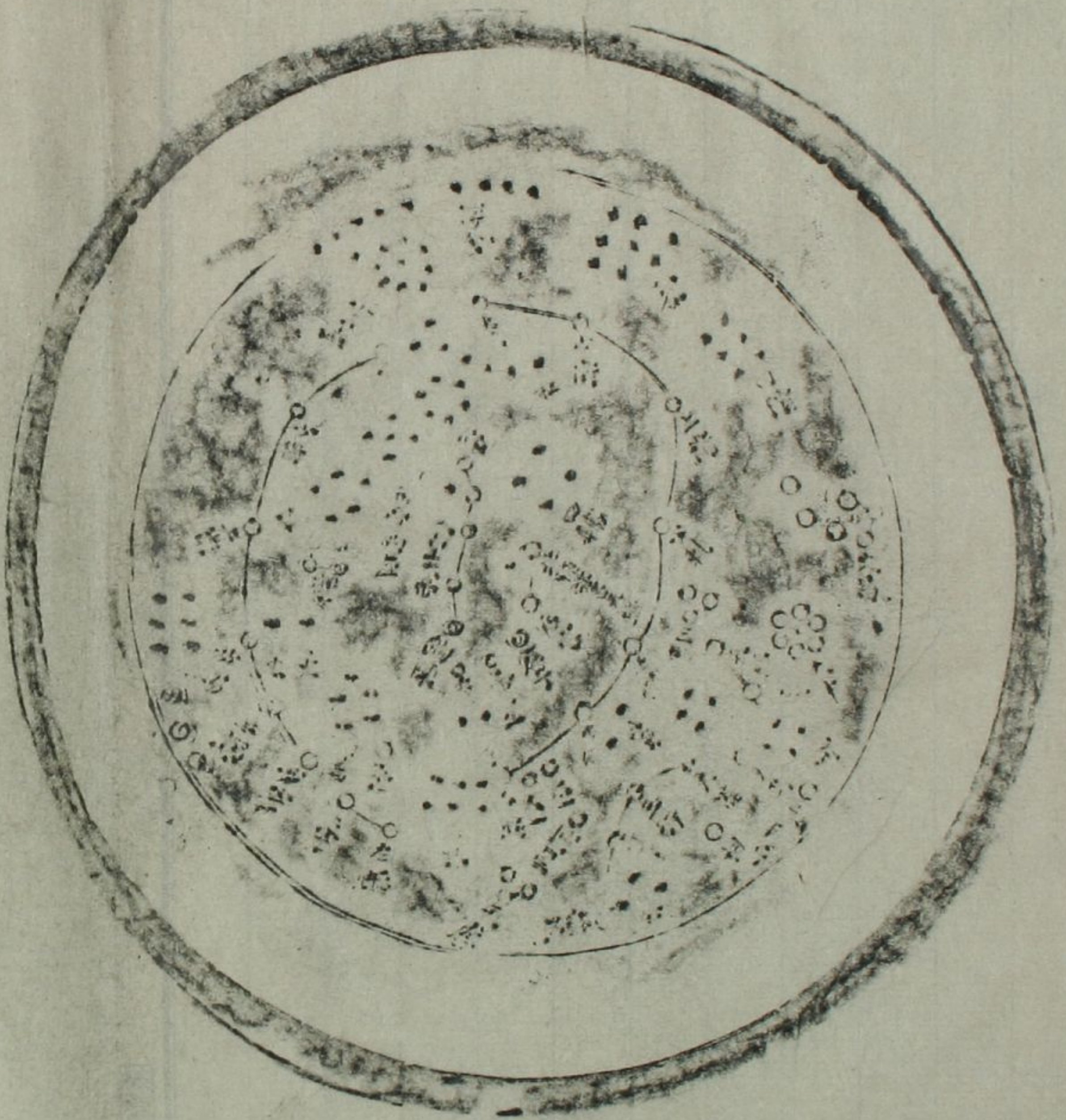
乾隆戊戌舊素切造

標原製



天啓元年程君房製

因に記す、家蔵古板図七子の内、百馬圖の四
 形の星は無款なり、恐らく唐星にありたる
 べし、依塗金の飲中仙圖の巨星三の古板圖の
 款あり、外に棋仙名の星大小二あり、維新以後
 の巨星は之れを最上とす、棋仙図の後亦得
 ること難し、程氏の星、乾隆帝名の星、也
 未画家多く之れを用ふ、若しのことと惜ま



天啓元年程君房製

因に記す、家蔵古板圓古星の内、百馬圓の圓
 形の星は無缺るもの多し、唐星とあつたる
 べし、依塗金の飲中仙圓の巨星の古板圓の
 款あり、外に棋仙の星大小二あり、維新以後
 の巨星の之れを最上とす、棋仙及び七後亦得
 ること難し、程氏の星、乾隆帝の星也、
 未画家多く之れを用ふ、若しのことと惜ま

さうい画家の手元都合もきき為めらん。此等の
墨いち味を合のよ泡へて味味るく、六ニカワ無
きき為め宿墨も一原の墨も、
と、支那の墨、ゆる長不安んも、出来土物、
日しくおち来り墨、体裁美るるものある、皆
五錦りおちて後主のものなり

程君房と方千世の時を同くし、
その枝七伯仲の間、
へこの方の名、
右左のふ考から、
いさる田千〇田、
行違あるとも、



かゝる。家系、方氏墨譜の在り、程氏の二、
〇の書林を過る左り如き、
今役子一時并

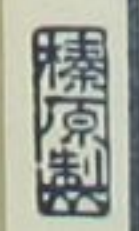
何より後、
解が下し、
ちること、
を、
行、
此書、
三江と、
か人の、
又、

七娘道成寺を過るると此の道善は其の淨瑠璃と
解説を乞ひ梓の上し此の道善は其の淨瑠璃と
まきあふ一い河の傳説を寓し、道善佛傳の道善を
こゝに好箇の説を材料に説教を禁書の上人とあ
こが、ゆづりも肉蓮の説き方なり、傳説の目此の在重
の解ありのおせりき、對眼なり、佛傳佛人の道善
の記りよふらん、一時道善を淋しんと多くい佛句や粗
歌をいと寄せ集める平凡の二條が多かつたが、こゝに
つれ道善がある。大江戸祇園の為拈圖あり丸の歌
があり、三江の辭世と子の涙歌が寄せて附してある。

辭世

市川三江

雨の春ハきのふうけり冬ハ梅



よきまゆりまこと死のうらうらよきうたせも
つとむ死よの身のおこるまむ

父上の道善とよめり 市川仙三

在る香ゆ木や冬ハ梅

○長安院ハ日太上天皇の祚難と有え此が事定美登極
の事かきうらむ。南北朝目合礼の時、嘗て、御見方の河
又非難かきう、御事蹟か甚に石合のひあるの、道善
史の界ひまの定ねと確究してのる人がある。自分ハ故人
谷本林善徳もその確究家の一人かあり、此の事と、其若
士其う院神歌もよめり、(此法三十二年見り)
：乳とぬりて知ることを得。谷本林ハまとい、此院の

御遺詠の芭蕉集につとめ、終に五十七首を得、是が此書
に収めたる。院に和歌の伝説ありて、種々の坊舎歌合
と名の御詠ありしが、あるの何故か傳はらざる。新葉集
と名の是れハ歌ありて、心き荒かあるの伝はらざるの之
と名の、實祚を述せんとする尊雅(太上天皇)を世に傳へ
んとする御詠ありて、谷森の解してあるが、此院の事蹟
の不明の爲め種々の臆説ありて、今爲解を得るの
ものか少くある。谷森が此歌集の末に附して巖岫
の宮に概略院の事蹟ありて、院の事蹟に疎謬
の誤傳を正し、此所もある。此院研究の資料たるべき
ものあり

三月七日記

○余前月朝山陽の奥國相鈴歌一幅を購ふ

相鈴歌

歎に未定稿とあり、而して未詩集と爲照と試
あるとある。未定稿とあり、而して未詩集と爲照と試
山陽詩集より新七爲照とあり、又寫り少く
末二句添加のありあり、余は獲りしもの未定
稿とあり、保ありとあり、さる也

古 眞 相 鈴 歌

相鈴歌 平世帯土花此亦字誤也 興國元年己金
粉雪之落 古香埋在南朝 先皇吞恨
不帰 武始之皇太子 行在寧 刻花樹雞金
王教部 高憶 固克復 向川都 此抄或較ふ禁抄
韋矢 集御鏡六龍歌 一敗鱗紛雜雪常樹

此二句後に添加

南轅寐寔終不回無何荒所室北注傷心父老
此卷和春風吹所苦山勢

終補を付し一頁の直を元山、尚木崎の集より此詩非
同の爲る心とあり、非同此の古詩を花也、也、等、
少く不ろ、亦二三の注あり、左に抄す

不帰秦、翻用雨淋吟詩中、語の南宗靈武之立
不待父命與國則去諸樞前以下言此意の南宗
在靈武其張良娣雙陸恐外少以乾柑雞刺
女子の南轅北注暗月魏唐勳帝西魯時語意

漢宮

古鈴銷帶土花紫帶認與國年辛巳皇
粉雲之宿留古香埋在南朝香中裡先皇在
恨不帰秦樞前始立皇太子行在何刻乾柑雞
皇都の折擊義甲年、河邊南武花、
語君王教即愛憶回支復向舊都此物或繫
紫袖韃箭集御器六就為敗解結雜雪霜
樹南轅寐寔終不回荒所室北注傷心父
老望交春風吹所苦山勢

華堂厚記製

○酒徒と種々の流義あり、門を杜ら客を淑し七飲したる
 者、人を受けて飲たむの者、前者の意を以て、後者の家を
 炊す、余以為る、匡客来り門を閉す、及ばず、是れ其の飲
 むる者、獨而為り、不可なり、或る者強て人を招く、炊い
 し、唯此人の酒を飲まざると云ふ、之れを以て、具を
 かす、この真の酒、年味、改を切ると、右は酒す、東坡云
 く、余飲酒、终日不遇、吾人、天下之不能飲、無予下者、然
 若人飲酒、見客、举杯徐引、則予胸中、為之流々焉、
 故、予焉、酒も、之味、乃過、於、未嘗、一日無、此、
 至未嘗、不置酒、天下之好飲、亦無、在、余上者、若、余
 が、云を得たり。

○鞍山湯、半紙大の小豆、四一杯、山形を盡し、七絶、漢、こ

云く、コシテ窮屈なる、男、此、何が書けり、その、大丈夫の
 世に、處り、て、甲しと、曰、此れと、東坡、此人を、得、る、其の
 境遇を、風日、吟く、と、云く

獨不見夫、羣、其之、實、禪中、乎、逃、乎、深、縫、道
 乎、敗、絮、自以為、去、宅也、行、不、敢、離、從、際、動、不
 敢、去、禪、襦、自以為、得、繩、墨也、然、夫、丘、火、流、魚、
 邑、滅、都、羣、其、實、禪中、不能、出、也、君子
 之、處、境、内、何、異、夫、其、之、實、禪中、乎

世間を觀し、來れ、半、風、を、其、の、蓋、鮮

○東東、人、品、内、家の、其、の、若し、品、内、の、茶、人
 が、専ら、其、の、こと、妙、妙、今、此、茶、の、別、り、と、内、其、の、み、を
 賞、讚、す、中、々、此、の、畑、天、狗、が、多、い、此、吹、是、が、正

蒙 盲 評 御 免

鹽原又敏策 大内正敏 石渡民輔 横河三清 小島一也 岡崎正一 岸清一 山田三 嶋田三 藤田三 川崎英克	江守名彦 栗邊多丸 田上七丸 井村耕花 山谷赴平 長谷川夫 武内金一 中條精一 佐藤功一 佐藤太一 吉野又長 宅策	瀬川昌世 黒田久盛 尾崎浄吉 藤谷榮尾 藤井三郎 由井三郎 小島三郎 棚橋三郎 岡上右衛門 小島植助 大河原之助	高橋喬松 内藤實 石川善五郎 山中勘吉 宗澤一信 松崎澄一郎 鳴瀬三郎 加藤辰三 伊藤響元 鈴木義夫	稻垣秀松 鈴木治 江守次郎 鈴木六造 鈴木喜三 西尾松治 小石川三治	福井三郎 武藤山治 倉橋藤治 上田恭一 奥田誠一 田邊孝次	星岡窯 差添	此番附は特に意を以て元老格とも云ふべき者大なる好者を除去す	梅原福三郎 松田良一 大隅一三郎 水谷長吉 青山二良 青山民吉 磯田久次郎 岡田八郎 井關源八郎 仲野省吾郎 西田總太郎	濱田庄司 堀進 小糸源太 佐藤春夫 石黒登丸 後藤傳六 大尾清丸 西木榮清 三井武 岩井三 森本武樹	入場恒氏 小畑義行 森邊素舟 渡邊一舟 眞田幸一 野田照茂 高村兵衛 大塚幸兵衛	あかね 晩翠 十千 求龍萬 平島清 陶香清 雅中 壺京 西京 青堂	世話人 軒や
---	--	--	---	--	--	-----------	-------------------------------	--	--	---	--	-----------

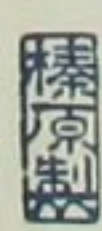
茶寮が割れしは於好えたるのみき奉付が出来てある、大抵天狗連の混同を恐るゝといふ。自分の好む人七、其人找めたる。奉付の難きを其の人か好肉家かを知つたの事ある。黒點を附したるは自分の知人だ。

○閑る乗して新古今の川柳を魏漢とて佳く、心のよめがある。低級の藝術と云ふものもある、さういふさうさげさうさげの内に、目前に見るととろろと多くの人か逃がして仕舞ふのを極むのが川柳子の技倆がある。誰んか、さういふことと川柳の材料は入。パリの如きものもある。一瞬の以て、笑もある。潮罵もある。数刻もある。描字もある。人間の實生活をこゝ



ふと真実しもの無らう。こんを着し詩と云ふこと得ん
くんが最も生活さびつた箱に入った詩の無らう。あて
見ると低級の藝術視するの謀りがある。

- 一 わんざを履くと二足踏んぢる
- 二 罽りもせぬ物の値をややく両方
- 三 緋の衣を着るに淫世が惜くさう
- 四 本降りるまうと出て折く両方
- 五 舟をみても因扇の動く観心
- 六 千の甲の餅を愛けける煤掃の
- 七 人を呼ぶ目には替りぬの行ぬ
- 八 まむといふ心の交りに不奉公
- 九 言ひにくいこと徳利の口を借り



十 先頭よの分別をさすり出し

十一 玉手箱のまふとさるる鞍のりけ

十二 ぶつまけと二足廻ける山彦

以上の詩は有る川柳があるが、その材料は誰かが視に
り懸りて卓上の事であるが心無く看過せんば、
ハバークの如く一閃と共に消滅し、擲りの詩を著す
事と趣味がまんが擲中の趣味が異なる。但し擲人が
此言の廻りの巧拙さう或は活かすまじし或は殺す
ことがある、まじか別な藝術である。近頃の川柳は裁
縫の如く毛の綴とある。何れも毛の倒の深刻さの
喜ぶる毛の綴とある。わざとらん毛のすす外四
心解の今枚婦人の裁縫の心得かき。綴を裁縫

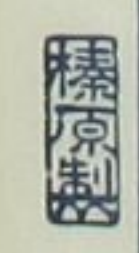
日用の代る類變を用へると、羽谷の論文と云ふ
証言も亦かたがたい。
三月八日録

○伊勢の西村徳大は石巻の山陽の遺書三十四紙
を徳家の買物の巻の二葉の裏の裏に代へて
その代りを書き、世説を頼まんに此の代りを書き平
山堂に托するところなり。平山堂に疑つてみる。
どうも時代は此の思ひぬと云ふが疑惑の一はあ
る。自今飽まむ鳩居を嘗て在つたことが、今の
西村の手づから物づく前記物の新書所の書家西
鷹次の本居の西の巻の巻の京都に出で、此を
から武田から買集めたと云ふことを事實とし
てある。自今が西村から貰つた木製衣つるべの花器

藤原

きぬの代り鳩居をの紙印がある。山陽の
遺物云々の代りがある。平山堂に云ふを
サカ此印まむ頼の代り。どうも云ふと、若者の
字が拙れと云ふ。今の鳩居を嘗て入る代りの字を
考へて、此の代りがある。先代の書は此の代り
か。自今が代り。時代おぼえの書は此の代り。若物
七打の時代がある。平山堂の代り。若物の代り。若
ふケヤキの堅木で、無骨の細工で京都の代り。若
いと云ふて此の代り。若物の代り。若物の代り。若
ふ出来てぬ。自今と云ふ。山陽好むと云ふ。若
考へてぬ。若物の代り。若物の代り。若物の代り。
ハッキリと証せん。平山堂の疑が此の代り。

である。此物の来歴に就いて曾て西村を人々京都へとし
鳩を聖に訓令せしむる事ありし時、時移るるに在りしこ
とを分りしむる事ありし日、^新此と改へしことある。此を考へ
るに、此とすんば分る事ありし中、^中此の
烙印のある者もあるから、係し亦考へし思ふ事、今の主人
が考へし荒れの時、全く知らざるの如し、思ふ事、全
体あり家より先者、歟か、何れか、任か、し、みれば、主人が
荒れ、此の頃、別して此者、歟か、考へし、思ふ事、^思やつれ、^思
あつたが、前年、此者、歟か、^思人、^思今の、^思尋ね、^思由、^思ある。今
の、^思考へ、^思主人、^思の、^思年、^思半、^思の、^思六十、^思位、^思なり、^思あつた、^思此、^思の、^思無
^思しが、^思最初、^思西、^思の、^思年、^思の、^思物、^思の、^思を、^思五、^思十年前、^思と、^思す、^思今、^思の、^思
主人、^思の、^思考へ、^思此、^思の、^思時代、^思の、^思あり、^思から、^思事、^思實、^思の、^思あり、^思の、^思子、^思の、^思



みんが、烙印や、^思考へ、^思を、^思見、^思せ、^思ら、^思其、^思の、^思真、^思の、^思原、^思の、^思利、^思し、^思得、^思
^思ら、^思ら、^思。又、^思前、^思の、^思物、^思を、^思主人、^思の、^思以、^思て、^思而、^思考へ、^思し、^思日、^思能、^思く、^思も、^思
^思要、^思が、^思ある。時、^思考へ、^思主人、^思の、^思思、^思み、^思代、^思の、^思自、^思分、^思と、^思交、^思り、^思せ、^思あ、^思
^思年、^思の、^思西、^思の、^思位、^思訪、^思れ、^思日、^思未、^思だ、^思和、^思の、^思関、^思係、^思と、^思あ、^思る、^思から、^思自
^思分、^思が、^思親、^思しく、^思お、^思候、^思し、^思ら、^思利、^思の、^思を、^思得、^思ら、^思あ、^思ら、^思と思、^思
^思因、^思り、^思西、^思の、^思應、^思召、^思と、^思その、^思人、^思の、^思こと、^思を、^思西、^思村、^思の、^思親、^思族、^思か、^思ら、^思せ、^思め、^思
^思此、^思の、^思お、^思合、^思う、^思他の、^思以、^思て、^思運、^思動、^思し、^思家、^思産、^思を、^思傾、^思け、^思し、^思今、^思の、^思強、^思弱、^思
^思し、^思此、^思の、^思お、^思家、^思の、^思數、^思代、^思前、^思の、^思主人、^思の、^思首、^思目、^思と、^思あ、^思ら、^思此、^思の、^思お、^思格、^思應、^思
^思を、^思業、^思と、^思し、^思蓄、^思財、^思を、^思し、^思多、^思分、^思利、^思を、^思得、^思ら、^思此、^思の、^思お、^思あ、^思ら、^思
^思應、^思召、^思と、^思その、^思親、^思族、^思の、^思考、^思歟、^思か、^思あ、^思ら、^思此、^思の、^思を、^思前、^思代、^思の、^思子
^思加、^思毎、^思の、^思此、^思の、^思お、^思引、^思上、^思げ、^思家、^思を、^思續、^思か、^思し、^思此、^思の、^思か、^思考、^思考、^思東、^思京、^思
^思時代、^思の、^思考、^思ん、^思此、^思の、^思物、^思を、^思業、^思の、^思中、^思に、^思も、^思山、^思陽、^思の、^思遺、^思事、^思あり、^思か、^思

珠をくるといふと傳くといふ。

○以上のことか思ひ出する、家老の流を華山の木
像のあり、由八十許の寸像に、流の頭を掌つて
膝をまき、筆をあまじくする像に刻ある花と華
山の年齢も刻してある、刻者いふにこれ人のま
かたもガングリと彫つてある、華山の面目躍
如くいふかある、華山の年齢の刻しを油く
て見ると美しが恰も田原藩の三宅氏の執事
とより此の年よりある。此像が三宅氏から出れ
といはれ、説くが、取次家入臣下の像のあり、珍らし
い例に、ある、美之の田原藩、華山を焼くといふこと
ハ一もいふところから、臣下といふく華山の首を

三宅氏

多しといふ像を削くといふある、まゝか、おの、一陽
ハ三宅氏と名し、附家があるの、取次家のもの
であつたといふ。自らの此像も、後、今よ
リ二十数年前、珠浪園が池に、瑞々あり、今よ
又此のいふ、後、田原藩の、此の上、や
催の志士(貴)畢、志士、今よ、
ありといふ、陳列し、美から、問も、ある人
か刺を通して、面を、ある、人、
思つて見ると、この田原の、私、
上の陳列、華山の像を見、あ、こ
ある、入つ、私、
の、代、三宅家の子弟の内、美術

校へ入るべし彫刻を尋ねぬ人があるかと問ふに
 是方のまゝな彫刻なるといふ、まゝもまゝも、根幹
 までここへ宿してあること、まゝもまゝも、まゝもまゝも
 とまゝも、自分のまゝも、自分のまゝも、人々もまゝも、まゝも
 リ、まゝも、まゝも、宿屋の宿家とまゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 が、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ひあつたこと、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 る、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ど、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 して、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 此像が三宅氏のまゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ひあつたこと、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 三宅の子、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも

三宅

とまゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ち、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ル、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 扱、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 の、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 の、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 る、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 が、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 ひあつたこと、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも
 三宅の子、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも、まゝも

三月十一日記

○今朝頼山陽と後藤清氏の尺牘を合仕置の巨

幅を齎し朱のちのち山陽の漢文人讀ハ此書也栗
山に書つるもの漆谷の四宮殿も亦栗山あるを栗山
の卷ハ朱書とて曰ハ方問の行百に在り。若し此後
岐とて出てもある也。

山陽の書問の野々荒考とて又書も幼穉也然も
此般の漢文書讀傳ハるものなり。乃右左に其の全

昨日書法部分同人十数名洋文庫に巻集し
る所卷の命良甫版書に轉せ他貴寺の
説書命良甫の支那の刻工としての相違を奉す
を好ます来報し等々のことあり。また刻し等柳文の
末に此人の妻姓の大畠あり。是に依んば蒲田好仁徳
早基疎坊の住人として日本の京城所止し武年公住

東京製

一旨とありし。歳次丁卯とありしが嘉慶元年の
丁卯に當りし。此仁の住歴も考へてもこの以上分
らぬ。日本在住の刻工の人の名に及ばぬ。或は自身
の意に刻し下が九行あり。其中の二行は柳文の
如きの署名と測りてみる。柳文とは刻かあるから
命枝と推定する。この七包を合して九行とする。是
を年代順と考へると

月江抄 東洋文庫

宗鏡録 同上

碧石山巻集 同上

白雲集 新嘉坡

傳法正宗記 久野文庫

韓文

東洋文庫

柳文

同上

般若心経疏

同上

無量壽縁の日用清規 又東文庫

命板と云ふことの今中世書法為者に於てのみならず、以上
上の思きぬ、こんどけを刻するは、廿六年を異し、
ることが、刻年を獲るを、略々あるなり。皆、
の、東洋文庫本を、久松静嘉の、見
た、唯、此、目録を、掲げ、
春秋行徳集解三十冊を命板と傳へて、
る、全然、刻るの、名、か、
追々、詮索、し、
標

韓文

この柳文と刻法が似通つてゐるから
命板と推定してゐる、よゝゝ見ると
版式が不統一である、柳文と共に書
通橋多版と云ふてゐる。命の京都
の、お、
く、
か、
す、
か、
を、

柳文

十行本

この柳文は命板の末尾に左の版

大あり

祖在唐山福州境界

福建省南興化路南田

縣仁德里基諫坊任人

命良甫久住

日本京城阜新(或年号)

鹿至今喜成矣

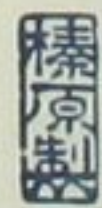
山嵐次下外仲秋題

或年号鹿とよの字方とよののあま

一月江語録

巻尾返の前、左刻の三行の誤修あり

良甫自刊月江語録下集通



計枚七片紙大小字該三十張數

有安三年六月初旬謹題一

此の左刻又字不辨ゆゑと漢文難きことありし東洋文
庫本最も鮮ゆゑと漢文ことをいふ唯此漢文
の下に「お」と漢文と「又」字ありてん命の強が、此の
誤修と伝へ八月江語録の三十紙が命刻とあることか
切ん

一宗鏡録

此書も命校と傳へるものなり欄心、良

甫の二字を刻し字を散見す尚法

他、陳孟榮の名をも見る、この支

那の刻より此書は工の命刻と

元ノ字

一 碧山書集

此方才一才二等と缺と補字あり

卷末に

應永二年八月初旬

中華大原命良南學士謹置

とあり刻工らしい文章也

一般苦心経疏

此書の終に

應永二年 春春日

龍納 釋梵書拜書



大明四命良南刊行

應永才七寶曆治洗上巳嘉辰

持行救贖戒権大僧都慈顯

東洋文庫所蔵の命板の以上数紙は其他に数紙示
てんてんてん

金澤文庫本

舞釘本文選才六十八卷

金澤文庫より今高北のつんり文選

も巻(四)巻(五)の二の逸(一)紙の

支那に判り、此紙度つる此文庫に

入りつるより支那装釘する巻首

濯振玉の題あり

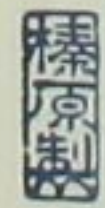
一 舊鈔本

卷子本左伝一卷

この清原家の家筋より深三郎の舊鈔をとりしりし文をここに記し
しるすのりし

卷首の末部より康富の二子あり
康富記の著者の舊鈔をとりし
と記し

此鈔本より後撰の書入あり是は
賴業の自筆に此人のちかか帝



の御中より信西等と名号の人あり
卷尾より左の誤りあり

保延五年五月十八日受定刊行
賴業

と見ゆ保延は出雲徳帝の年号に
此の誤りありしもの也

一 舊鈔本古文書より

卷末に

応安二年十一月十二日

於柳市感得畢

菅左母

この本は波家舊本より一前巻と共
四巻の籍に入る

此外の宋版を示さん中々

樂善集

八野の自版也善の院の印記有
欄外に田舎の自署あるに石七
路とすし此書支那の縁へて
有しとす

畫一元氣

細字十五行本この支那の作
り



文選

この七野の自版有し一復刻山版
此の大方の今井貫一宋版の實に山蔭一冊
を以て来りし示さるる京都杉浦立園の巻
本より山版山蔭中の自版也巻尾
山中嵐次補巻末奪若冬十月下
瀬尾宗洋捨心所以刊之

此の書法を今より善本影写中三集を配布す、収
了所、皆命板の標を以、安の善本中、坊と来り
此の字、家時教、悲んじ也といふ、此又へ安田の
らんといふ辭、と上巻の翠松子、飲ふ且つ論

其、法、道、の、山、房、に、出、版、せ、る、木、宮、泰、居、の、著、と、傳、
日本印刷文化史の著、著者か圖書に造詣有き
為の漢語多、斯の圖書ハ人とあやまること多し、寧
後を説く、馬田翰の筆室後、其、傳、に
年、由、本、親、芝、の、為、の、来、り、一、二、の、有、り、斯、の、使、意、の、人
こと、龍、會、に、在、り、と、公、を、元、と、人、に、招、え、ん、と、公、の、時、を、
す、を、以、つ、て、三、公、と、元、と、唯、此、時、々、湯、を、求、ち、る、を、
故、に、此、の、語、を、知、る、の、を、あ、る、人、此、儒、を、作、を、カ、ヒ、
又、飲、み、儒、者、其、の、勤、を、測、り、親、て、給、と、云、く、十七
四、一、十七、四、の、名、印、皇、清、任、解、一、部、の、價、と、云、来

標

此人を皇清任解は先生と呼ぶとか、三月十三日記
此、又、へ、版、序、の、つ、井、費、一、と、詠、次、大、政、に、宋、版、の、有、り
を、測、り、親、て、給、と、云、く、大、政、と、一、部、と、云、く、と、云、
他、の、版、序、の、由、り、故、事、と、云、く、大、政、と、云、く、と、云、
と、云、く、一、部、の、有、り、を、測、り、親、て、給、と、云、く、と、云、
故、事、の、由、り、を、測、り、親、て、給、と、云、く、と、云、
故、事、の、由、り、を、測、り、親、て、給、と、云、く、と、云、
前、東、美、徳、の、部、に、都、に、有、り、其、の、中、を、云、く、と、云、
不、思、義、義、海、七、出、り、今、之、海、に、在、り、故、の、海、
と、云、く、海、の、海、を、測、り、親、て、給、と、云、く、と、云、
海、を、云、く、と、云、く、今、之、を、云、く、と、云、
考、る、と、云、く、と、云、く、此、地、に、来、り、と、云、く、と、云、

の怪我をせざるをよし、平造に傷を及ぼすことを怪我
ハ毎日の事、此の世を全うするの事、口を
交けずと一笑柳捨すも、余は、情の末は思
ふに及ばず

○此の世に身を求むるもの、七の力が多く、静しければ多くの
情をもち、需める所にして、あつたが、字を拙く、需める人、
合ふに、あつたが、字を拙く、需める人、
日本美術協会、心考、の展覧会、出陣、又
中時の即物、創氣社、右、の、字を考へ、
偶々、奥の公、年、以、公、大、祭、柳、捨、
一冊を、定、を、来、比、を、を、展、心、
の、由、意、が、エ、ロ、タ、イ、
附、と、ん、じ、わ、る、
自、分、の、
心、考、



此の世に身を求むるもの、七の力が多く、静しければ多くの
情をもち、需める所にして、あつたが、字を拙く、需める人、
合ふに、あつたが、字を拙く、需める人、
日本美術協会、心考、の展覧会、出陣、又
中時の即物、創氣社、右、の、字を考へ、
偶々、奥の公、年、以、公、大、祭、柳、捨、
一冊を、定、を、来、比、を、を、展、心、
の、由、意、が、エ、ロ、タ、イ、
附、と、ん、じ、わ、る、
自、分、の、
心、考、

○那須四造碑、下咽、在、日我部系古の碑也。碑文の字、古く、且つ磨滅するものあり、古末法、其の字を誤るものあり、終に漢文難きもの二十四字あり、其府の字の考も、後を待たず、其井白石七本、充分の解を與て得たりし、此の塩竈初官に於て、其の考あり、其難解の文字、陰陽をとり、蓋し碑文中「合言、命字」の四字、も、二、三、を得、不、の、二十四字、ハ、忠烈、孝、義、の、五、字、の、陰、陽、を、と、り、仔細に考証するものあり、此説の是、ハ、且、く、揚、き、一、脈、の、支、り、を、通、し、て、説、と、す、處、し、八、年、石、志、多、く、此、説、を、引、け、と、未、だ、考、す、其、の、原、書、を、見、な、す、こ、と、を、し、余、偶、々、其、の、原、本、を、得、たり、卷、首、に、清、原、勝、大、冲、の、名

是、次、寛、政、辛、亥、二、月、甲、子、白、河、侍、臣、南、合、義、の、序、あり、天、明、五、年、嘉、春、若、者、鹽、竈、源、切、明、の、序、あり、碑、文、の、拓、本、を、ぬ、め、ま、ん、く、二、段、を、施、し、ま、り、其、の、依、り、宗、徳、の、刑、罰、と、若、井、(新、井、白、石、の、名)の、後、方、と、も、並、び、奉、ぐ、考、証、去、該、日、坊、頁、數、二、十、六、坊、間、卷、も、二、又、と、も、殊、也

三月十号

○此、碑、の、當時、氣、が、漲、り、る、が、先、次、の、鹽、竈、初、官、の、記、念、日、が、恰、も、上、海、中、件、と、満、蒙、初、官、家、創、設、を、い、は、す、を、同、し、此、の、鹽、竈、初、官、の、序、上、に、記、押、し、ら、う、じ、才、が、盛、元、の、霞、巖、を、忘、れ、て、ま、り、ぬ、こ、と、の、レ、ウ、日、工、の、評、漢、が、あ、り、り、日、夜、戦、後、中、の、軍、歌、が、故、送、さ、ん、た、り、し、た、各、兵、卒、の、名、也、レ、又、換、擬、歌

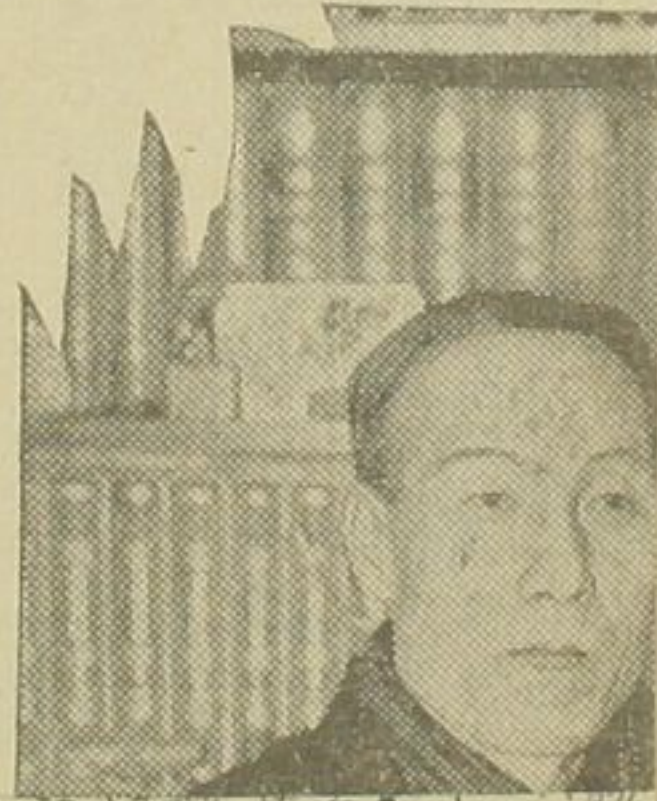
三勇士の歌

詞作 野野 實 陸軍少佐 陸軍少佐 陸軍少佐

Musical score for 'Three Brave Men's Song' with vocal line and piano accompaniment.

我々の友隊すてに攻む。折から凍る二月の二十二日の午前五時。命令下る、正面に開け、歩兵の突撃路。装置の間を、點火して、破壊筒をば抱き行け。

返り咲き



Lyrics and publication information for the song, including publisher details and pricing.

Handwritten Japanese text, likely a review or commentary on the song, discussing its historical context and emotional impact.

本社「爆彈三勇士の歌」發表

一等は詩壇の老大家

應募八萬四千余篇中から

選ばれた與謝野さん其他

本社が「爆彈三勇士の歌」を募集するや、各方面に多大の共鳴を喚起し、應募歌は郵便の到着毎に文字通り編輯局に山積、十日午後十二時、最後の切りまで、東日新聞社編輯部八萬四千七百七十七篇といふ多数に上つた。以てこの忠告を極めた三勇士の選期が、いかに擧國の熱心となつてゐるかを明らかに立證し得、本社もこの擧の益しくなつたことを喜ぶと共に、この應募者各位の熱心なる共鳴を多とするものである。なほ詩壇の老大家與謝野氏が自ら進んで應募され、しかも入選と決定したことは、本社の満足またこれに過ぐるものはない。與謝野氏の入選作は直ちに陸軍戸山學校軍隊の手によつて作曲せられ、且くもこゝにその歌詞と曲譜とを發表することを得たわけ、本社はあらためて選者藤田流澤氏と作曲者陸軍戸山學校軍隊の多大なる努力に對して深く感謝の意を表するものである。

三

答へて「はい」と、工兵の作江、北川、江下ら、深たる心、三人が思ふことこそ一つなれ。

四

われ等が上に戴くは天皇陛下の大御後威、後ろに負ふは國民の意志に代れる重き任。

五

いざ此時ぞ、堂々と、父祖の歴史に鍛へたる鐵より剛き「忠勇」の日本男子を顯はすは。

六

待ちかねたりと馳せ出づる顔に決死の微笑あり。他の戰友に遣せるも、かろく「さらば」と唯だ言語。

七

點火のまゝの破壊筒、抱き合ひたる破壊筒、鐵條網に迎り著き、我身もろとも前に投ぐ。

八
轟然おこる爆音に、開く三すぢの突撃路、今わが隊は荒海の潮の如くに躍り入る。

九

ああ江南の梅ならで、裂けて散る身を花と成し、仁義の軍に捧げたる國の精華の三勇士。

十

忠魂清き香を傳へ、永く天下を勵ましむ。壯烈無比の三勇士、光る名譽の三勇士。

感激も新に

今更乍ら當選の榮をになつて 與謝野寛氏の談

入れた點は天皇陛下の御後威をこまにこまに、國民の希望に代つて肉身を捧げたといふ點で、それからもう一つは從來あつた軍歌はどうか文學的になつたように思はれますので、私は自分の詩をつくるつもりでこの歌をつくらうと思つた。がしかしそれと今申しましたように甚だ不十分なまゝで應募しなければならなかつたといふことは、返すも返さずです。



十日の総切り、日までに到着、一爆彈三勇士の歌は遂に東日、大毎を合して八萬四千を突破した。



◇ 返り咲きの... 與謝野寛氏

當選作一篇

爆彈三勇士の歌

與謝野 寛

廟行鎮の敵の陣、
我れの友隊すてに攻む。
折から凍る二月の
二十二日の午前五時。
命令下る、正面に
開け、歩兵の突撃路。
装置の間なし、點火して、
破壊筒をば抱き行け。

爆彈三勇士の歌

與謝野 寛 作詞
陸軍戸山學校軍隊 作曲

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



夫婦圓滿の秘訣

結婚の秘訣は、持しつゝ一時は死を覚悟したるは、最も...

外國で變に思つたこと

たゞ一面裏切りの評判ばかりで、さういふ下敷...

實戦における日本刀

南洋、上海方面への出兵に際し、動員命令と共に、多くの軍人...

質疑應答

問(一)パイプス抵抗の値は何によつて決定するのであつたらうか...

雀家翫之助

はなれた敷たぐ、翫が突へば覺たに、山ぢや藤が角を出す...



津磐常 お津園三六

この曲は初が「國」の曲である。三六園お津園、津磐常の曲である。

三途の川の茶屋で 冥土の噂はなし 二世相錦織文章・十萬億土の段

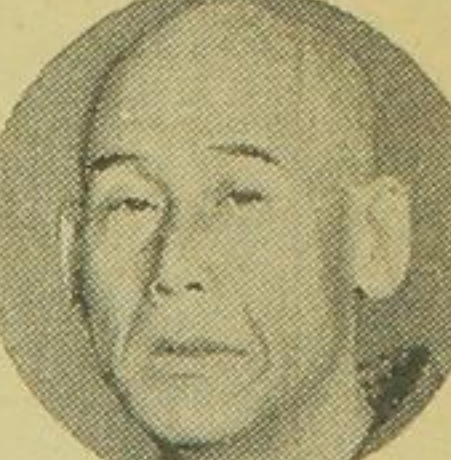
時々の風が、アレなやらの心をつかり持たがよい、人込の中より、この茶屋の裏へ...

哥

折から凍る一月の陣 我れ敵の陣を走りて 大地を踏みしめて行く...

吹きよせ

雀家翫之助



石川や

日本男子を懸はすは、父の祖の歴史に鑑みたる、意に代はる重き任、天皇陛下の大御後、後方に負はる重き任、仁義の軍に捧げたる、光る名譽の三勇士...

君に逢ふ夜、たれ白雲の、森越えて、待乳の山と、いほさきの、その鐘を、かねことも、笑いに、仲やないない...

行、その後で文筆は、愛を頼朝や、頼朝の口調に描かれる、愛を頼朝の口調に描かれる...

と母達に栄えりて、母達の栄えりて、母達の栄えりて、母達の栄えりて...

○今大隈侯蕃城内に建設せんとする義後十年の紀念碑の文中「隠然動天下」とある隱然の二字が弱いと云ふ説が垂文中有り出れが此の隱然ハ殷武も同じことと成るる形を考ふるに或るかゝる才と弱い意味に多し兎角漢文に過らざるにあり誤解がおこる。

○空田某次郎が山守獲比為流敗の世法行集の本五冊に云明見に於て閑するに云くの揮画かある人物も七巻七時代のものもいづれを存し解説の文も七巻美びや神楽中の白眉とするは違つたものと云くは。自合ハ某流敗とんをのよかあるといふ事も思ひたるなり。んハ先此稀也獲比を云ふ。

大隈侯

○被知事すしと云事者ハ勅めれ 三月十七日
○此と云流敗の事ハ傳る文考も親々大隈侯の序文が入力とありし全印のありを遺誤りハ御
○上余が執事すしと云事ハ流敗を心り初行
○左の如くハあるが推測を要する。

大隈重信侯の傳記ハ精粗種々のものが既に出版せられてある。その中が最も正しく且つ法漸るものハ侯の義後三年傳を考へて撰出の侯人に編纂せられた大隈侯八十五年史ハ三冊にありて侯の事蹟ハ遺域と云ふんを悉くしてあるがれも見ゆるが保し十分の望を云ふに
あつたの遺域ハさういふ事。んも其の事である。侯の事
記ハ幅ハ一丈五寸ハ長く、複雑な崎嶇の徑路

に満ちしもの無ハ。侯の事歴ハ維新史の流大正史
のありつゝ重大事件に交渉ありつゝ、何んとして切り
離すことか出来ず。侯ハ維新の際早く身を起し
て政治の要角に當り、當時を難とせん以外文と欺
政を要理すとして其の終始進歩主義を持して百般文
化の施設に努力し。此間の「^徳維新史の流史が複
雑のありつゝ、侯の行歴も^徳複雑に人々の心を
まどわす。其の書も^徳是るるの感ありある。其の傳記
の体ハ主人公に専らあるや、其の^徳然しハ其の
公と侯と周囲を略すこと其他を略すことと其の
恒例となりしあり。主人公を繞る周圍に就ては^徳其の
既^徳疎の著を用ゆることが^徳寧ろ恒例とせんてある。

侯の傳記ハ其の後神永甫何人の傳でも幾々公平
を缺くの非難を起す。其故ハ其の^徳名亮歴史と其
体を異にするからありて、一概に傳記を答ふるハ難
じある。

大隈侯ハ其の侯は藩長^徳の如き^徳侯侯をとりてある人が多く、
其の^徳侯の任の事業ハ外交と多く^徳財政と云々^徳維新
當時も其の^徳何の^徳至難の業が^徳ありつゝ、當時守舊派
の人が朝廷の^徳少から^徳ありつゝ、或人と^徳或の時、^徳満朝皆
敵が^徳ありつゝ、其の^徳之んと^徳戦ひつゝ^徳難局を^徳
いじつゝ、種々の誤解種々の徳構の起つたものも無理
なりある。侯の活躍時代の晩年と異つて
客戰の人^徳ありつゝ、其の^徳辨疏するところも^徳非

難攻堅を一笑に附して自ら侵する所を萬進せしむ。是れが者の今日を以て尚ほ毀譽の定まらざるにことはいくらもある。侯の傳記は自ら筆を把つて人のあふから自家の心事を考へたよりの一紙もなき。侯の過云を評つて好ましく^悪疵を云ひ^悪自分^悪を無遺する人はいさうなから、或る事柄に就てこの疑義のいうと疑義とも残つて居る、侯の晩年を指しては自家の經歷を語らん^悪此が常に自家の是非を避けて居る。隨つて侯の一生の功業の真相を發揚する人も傳記以外は何れも無んば^悪。是れが此一書が乃ち真打揚の試みである。

本書の標題は其内容と相合して居る。即ち文献に徴

して侯の事蹟を考証し、そのが此書である。侯に關する文書は侯自身の家にも数多く残つてゐる。そのうち松山理々丸の數百卷と云つてあるが、本書はこれから採つたものも少なく、侯の侯と文書のありは注家も存する書簡や日記で侯に關する^悪が主として考証の材料と採らん。此の斯く文献に徴して事實を考証することはいさうな行き方ではないが、侯の正確を得るに亦公平の名を擧げ得る。侯の侯本人に注家もいさうな書簡の文飾がある。見ぬ心も^悪筆も遠く^悪侯の侯が^悪見ぬ心も^悪他人同士は往復するものから、斯く文献に主におと^悪最も大切のものがあること、言わねば^悪此等文献の内は侯の敵手の手になるものもある。隨

炭を留例するものあり炭を添証するものあり亦炭を支持
する側の文献を見れば炭を賞賛し候に對する非難を
辨駁し候ものあり炭を添合し候に對する突き合ひ候ものあり
初め公平の断定が下し得らざる。著者の出来の限り
主観的議論を避けて客観的文献を以て候を語ら
しめしめり。そこは此書の特徴がある。

著者の帝大に史学を修めし人候に何ぞ恩怨の關
係が無い現にの身室終史の如く奉仕も偏見が宜か
あつた。評家の文書を熟読する便利がある。性未
候の事蹟研究に興味を持ち官暇考証の方を注ぐこ
と数年の久しき及代候の事蹟に就ては歎の遺蹟が
ある。此人より此書の成つた時の時を得れと思ふ。と云ふ

藤原

のいんまむの炭の傳り、諸家の文献目を検索して是を根
料とする便がある。この疑義のあることはいつかか
正解を得ず、臆測が臆測か先か、是れが傳り之端
能くせんもの。實に大隈家に在る文書中の炭の跋
後初め現はんは、他の元勳評家の文書も久しく
秘して、其の世に現はれ、極めに近いことにある。故
に従来炭の傳を主として客観的考証の出来ざるは
の事。理あり。此事は、是を得ることにあつた。今、
幸ひに評家の文献の秘蔵が解かんと評家の傳は、追
て刊行せしむる至つた。乃ち客観的考証の徹底、好
都合の時がある。著者が此の好機に乗じて、私か時
を得たと云ふ所以である。

今も同じく作新南時分件の時局を概観、概観、如何に
して居る外交の難局を案じ、如何にして亂麻に燃
務を理し、如何に山石倉米月日一行が政米派遺の留守居
か、如何に政務を料理し、如何に征韓論を論じ、如何に
退く、如何に守備派の大意に拘束され、如何に
抗し、如何に民間大衆を並べ、如何に大なる壓迫の起つ
時居る、如何に進退し、如何に強國の背景を有る、
如何に振つて又の地位を支持し、如何に、
保木戸の候に如何なる關係があつたか、明治十四年政變
の實情に如何なるあつたか、降つて條約改正の實情に
如何なるあつたか、等々、および此等重要な事件にまつた
其の真相、今日の事、如何に得たか、如何に種々あつたか、

明治十四年

常日清時局の如く、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、

本書の大体大事件中心候も考証し、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、
如何なるものか、如何なるものか、如何なるものか、

大隈侯ハ十九年史

ある暹 ありては也

三月十七日記

○余の誕辰を祝する日(春城会)二月十七日(開会)と
と都心より一月(暹)一(暹)夜柳指代地(暹)為(暹)開(暹)
此(暹)席(暹)有(暹)事(暹)の(暹)十八名(暹)を(暹)集(暹)ま(暹)す(暹)つ(暹)れ(暹)る(暹)也(暹)
柳指(暹)定(暹)め(暹)た(暹)る(暹)つ(暹)と(暹)幹(暹)事(暹)の(暹)説(暹)ゆ(暹)る(暹)に(暹)春(暹)城(暹)先(暹)生(暹)此(暹)
地(暹)に(暹)懐(暹)念(暹)が(暹)あ(暹)る(暹)か(暹)ら(暹)ぬ(暹)か(暹)い(暹)ふ(暹)に(暹)自(暹)分(暹)を(暹)笑(暹)は(暹)せ(暹)れ(暹)ぬ(暹)也(暹)
柳(暹)名(暹)の(暹)授(暹)書(暹)も(暹)亦(暹)き(暹)席(暹)の(暹)賑(暹)わ(暹)つ(暹)れ(暹)ぬ(暹)也(暹)
大(暹)段(暹)が(暹)と(暹)り(暹)選(暹)る(暹)に(暹)敗
れ(暹)此(暹)等(暹)あ(暹)る(暹)に(暹)柳(暹)指(暹)の(暹)選(暹)る(暹)に(暹)亦(暹)選(暹)り(暹)た(暹)村(暹)木(暹)山(暹)
七(暹)六(暹)席(暹)に(暹)村(暹)山(暹)島(暹)島(暹)十(暹)八(暹)人(暹)と(暹)し(暹)て(暹)外(暹)る(暹)つ(暹)れ(暹)ぬ(暹)也(暹)
例(暹)の(暹)こ
と(暹)く(暹)後(暹)天(暹)漢(暹)も(暹)余(暹)ハ(暹)此(暹)年(暹)の(暹)春(暹)城(暹)の(暹)以(暹)来(暹)滿(暹)二(暹)年(暹)間(暹)
何(暹)れ(暹)と(暹)日(暹)を(暹)選(暹)つ(暹)る(暹)日(暹)常(暹)生(暹)活(暹)を(暹)演(暹)つ(暹)れ(暹)ぬ(暹)也(暹)
其(暹)れ(暹)と(暹)是(暹)後(暹)日(暹)月(暹)を(暹)更(暹)て(暹)ぬ(暹)心(暹)得(暹)と(暹)ま(暹)る(暹)也(暹)
又(暹)の(暹)春(暹)考(暹)を(暹)供(暹)り(暹)ぬ

櫻園製

自(暹)然(暹)時(暹)勢(暹)法(暹)也(暹)也(暹)余(暹)ハ(暹)此(暹)五(暹)の(暹)人(暹)を(暹)ね(暹)き(暹)て(暹)政(暹)治(暹)政(暹)治(暹)を(暹)利
用(暹)回(暹)改(暹)と(暹)料(暹)理(暹)し(暹)得(暹)る(暹)事(暹)も(暹)論(暹)じ(暹)愛(暹)玉(暹)堂(暹)に(暹)支(暹)持(暹)さ(暹)る(暹)事(暹)
政(暹)事(暹)家(暹)を(暹)奉(暹)じ(暹)長(暹)期(暹)回(暹)格(暹)と(暹)す(暹)る(暹)事(暹)も(暹)あ(暹)る(暹)也(暹)
回(暹)利(暹)民(暹)福(暹)を(暹)回(暹)る(暹)能(暹)は(暹)ず(暹)と(暹)各(暹)回(暹)日(暹)現(暹)時(暹)の(暹)趨(暹)向(暹)を(暹)説(暹)き(暹)
或(暹)る(暹)折(暹)衷(暹)し(暹)て(暹)フ(暹)ア(暹)レ(暹)ズ(暹)ム(暹)を(暹)政(暹)堂(暹)改(暹)治(暹)に(暹)代(暹)わ(暹)る(暹)事(暹)も(暹)日
本(暹)特(暹)長(暹)の(暹)考(暹)め(暹)る(暹)大(暹)切(暹)な(暹)事(暹)と(暹)説(暹)き(暹)田(暹)人(暹)の(暹)共(暹)情(暹)を(暹)懐(暹)
く(暹)也(暹)
例(暹)も(暹)酒(暹)食(暹)に(暹)乗(暹)り(暹)て(暹)起(暹)つ(暹)種(暹)々の(暹)懐(暹)舊(暹)法(暹)
が(暹)湧(暹)いた(暹)也(暹)
美(暹)か(暹)多(暹)く(暹)自(暹)分(暹)の(暹)事(暹)も(暹)賞(暹)味(暹)が(暹)あ(暹)る(暹)事(暹)も(暹)自(暹)分(暹)の(暹)事(暹)
評(暹)論(暹)的(暹)に(暹)事(暹)実(暹)を(暹)數(暹)術(暹)し(暹)り(暹)た(暹)り(暹)て(暹)一(暹)層(暹)無(暹)を(暹)穿(暹)く(暹)
也(暹)
毎(暹)毎(暹)余(暹)も(暹)出(暹)席(暹)者(暹)と(暹)行(暹)つ(暹)始(暹)り(暹)た(暹)り(暹)て(暹)例(暹)が(暹)あ(暹)る(暹)事(暹)も(暹)此
日(暹)也(暹)
日(暹)也(暹)
中(暹)心(暹)平(暹)繁(暹)あ(暹)る(暹)事(暹)も(暹)村(暹)木(暹)山(暹)村(暹)山(暹)島(暹)一(暹)也(暹)

以上の花火に集る奥山守花 寺崎元重
大江の流の故口献有石原三郎 伊藤壯也
山田健作 昆田兄弟 高田 小林登三

市島翁を繞り 春城會の一夕

先生の思想縮圖的集まり
東京 風 柯生



市島翁を繞り先生を中心とする春城會は三月十七日東京柳橋松葉家

これにて能された、この日七十三才の春城翁益々旺にして、益々をあげて高談放論、或はフツツヨを論じ或は酒仙を説かる、しかして先生の周りに來り會するものは政友會の代表松木弘氏、あは一方には落選せる前松葉政務次官、安部九郎氏あり、大成せる實業家中野平氏があるかと思へば今年大衆出たての青野長田強平氏あり、ブルジョアあり

て大隈國民黨の委員長だつた際、係から直接その辭にあつたつて多忙を極めてゐる、なほこの間四方に旅し、且つ望遠は一日もかゝしたることなし、たゞ酒を飲みても、世間の如く雲の如く動き来る希望と自慰の力がない、唯ひそかに酒の味を樂しむのみであるのは如何にも寂寥である、故に諸君は仕事をやるなら壯年のうちである、壯年のうちに思存分仕事をせよ、と一同を鼓舞された

故紅葉山人と 樽ぎぬたの句

山田 穀 城

「過般紅葉山人と」といふやうな詩題で山人と親交の關係があつた江見水陸氏が新澤政達局から故送された詩句は、自分も多分の興味を動かして讀取した一人であるが、有名な「樽ぎぬたの句」も新澤の盆踊にたいく桶を掛懸として詠じた故人の俳句に言及して江見氏の詠つた所について、自分には稍解に落ちぬ點があるので、聊か茲にその大要を録して新澤に最も關係の深い此句を正確にして置きたいと思ふ。

この頃の故人の作には「観がゐても松はありても墨いぞや」の一句があり、翌四日夜には桶屋氏をも迎へて坂口、石井の兩氏主權で御茶屋に故人の招標會があつた、その席上にも自分は加はつてゐたのであるが、此の句は即ち當夜新澤美人の盆踊を見、且つ樽ぎぬたを聞いてしばらく沈んだ末に、紙片に走り書して自分等に示されたもので、其時自分は「樽ぎぬた」とは雅馴で實によく美化されたものだと思つて、故人も頗る得意らしい表情を見せた。

故人は七月八日に佐渡に遊んだが、一週間位で歸る予定であつたのが、薩摩約三十日に及んで八月六日に再び來歴、行形、御茶屋兩度の招標に答禮のため坂口、石井氏を西大塚の居宅に往訪した、其時の句は動盪して極を愛する胡麻故といふので「樽ぎぬた」をさへ、へたれば雲冷やかにして葉末の雪を疑ふ、そこに五峰仙留と呼ぶ家あり寄書の花を拂ひてむころに苦熱の旅人をもてなす、風狂三十日、酷く佐州の山水にあき、杖を擲じ

この夜坂口氏は三たび故人を御茶屋に招いた、其時の故人の作は御茶屋に美人の盆踊を見て觀れにと題し「あやめさく思物紫は原色かな」の一句であつた、斯くて八月十一日新澤に告別し途中直江津に泊して十二日歸京したのである、故作における故人の句は殆ど凡て手録して置いたが、これは故人が一日二三句に分けて一々詞書を附し全部を新澤新聞に寄稿して來たので、極めて容易に保存することが出来たのである、佐渡遊中のこと、直江津下馬の理由などについては自分は其間の消息を聊か知らぬでもないが長くなるから茲には略す。

要するに自分がこの句を起した目的は、樽ぎぬたの句が江見氏の故送した所と自分の知つてゐる所とが何れか正確なるやをたしかめたい一念で、北原白秋氏が新澤小

○昨、安田善次郎を訪ひて示さん学問者の内二三
と録す

一 和論語 三冊

大活字本 刊年を欠けとも慶長
と覚べきよ也

一 名方類証醫圖書大全 十冊

元版覆刻 五山版

一 談鏡

享禄本を永禄年間校正覆刻したる
ものよと巻末に



享禄戊子孟冬初一日

正三位行侍從左近衛朝日堂覺
とありて、其次に白字に左の文刻しあり

頃間永得宋慶元丁巳張氏所刊
之的本而重校正焉永禄才七年

金甲子三春壬子

此の白字の刊後ありて少有り或ハ削
つて享禄本と見えぬ外此より知るぬ

叡山活字本荒干と見え中々

一天台活字宗室生或間卷元書曰

此末云々

于時寛永三丙寅曆三月壬辰
比叡山延曆寺寶幢院於南名刊摺
之訖

願以此功德 普及於一切
我等共衆生 皆共成佛道

一止觀義例隨釋

永嘉沙門靈玄述

于時元和丙辰曆壬午二月下旬

於山門西塔南名摺之

近頃古改本の零本と出揃て一枚の、標本的に冊子に貼附



一古秤千束の面目と公認の一助とありとの、あるところを
り或ハ標本とコロタイ。附し二冊子とあるとの、
あり、自合也此の心づかあり、零を山崩しの標本を貼り
之をんを未比量、中々あり、とあるの、上祿香
集、今これに俗畫のありとの、コレタイ。附し、コレ
一トとして、領布して、めりとの、お法七あり、上
比出未比此程の、よを、見れ中

古秤殘葉 元氏社詳輯

峨眉分子 二冊一紙を集

以上古秤の貼り、こめり、未二の、カニ
ツと誤也

外ニタイ、ア、あり

江戸時 給入本百種 二冊

元氏社祥麟
杉田大雲書

江戸文字の回報 二冊

藤井博士親賀氏心：京都帝大
四文字の編り下也

以上二種の内前者の選擇より後者の多くは品下
と字の集まりなり

此の四冊を左の字を借りてゆく

古往題跋隨見録 二冊

高麗の二冊田中玄顯伯自身日記の
序を自ら記し書をまとめるに
於ての古往の題跋を記すものなり



予がその行の不在を便するに
しあり古往題跋隨見録の
也田中伯古往題跋隨見録の時
記を授けし且つ記し給ふもの
の古往題跋隨見録の序を
の終り此書を大目録と
左の初巻あり

大正八年八月二十五日 是出と

白橋会大人：贈ことり 芝野

いづくもなきあえまじと一つきの
こころをめてしと志のはるむ

或は閑際自から物寄しと家こころを 花見

此佛像白鳳時代の作として其名の七日寺唯此納あり
 所の厨子銘より以て其寺のありを知らざるは惜しむべきなり

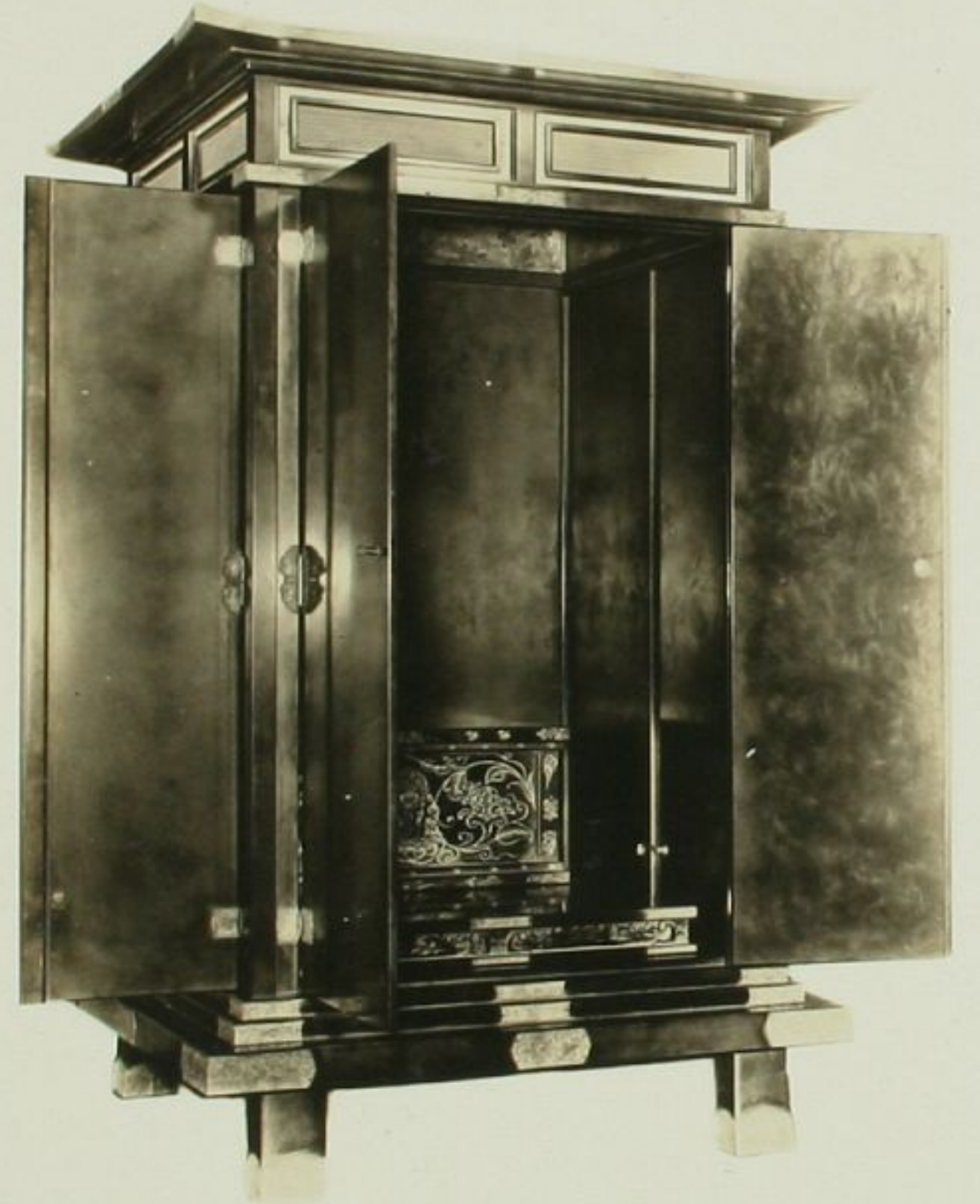


寺大深代時鳳白(寶國)像伽釋

鳴りて奉獻したるもの左の如くを始めてふさ



ハ厨子を清くせよ也田舎の事なり



子厨尊釋寺大深

よぬめおく

三月十九日記

アフリカ 旅行漫談

寺島・善八

母校専門學校政治經濟科に殖民政策を講じてをられる校友寺島君は、拓務省の命をうけ昨月八月渡航し、アフリカ全土に於ける各國の殖民状況を視察し、同十二月歸朝された。御多忙中の君を煩し左の御寄稿を得た。

興味本位に立脚した『アフリカ漫談』との御要求に對して、死を賭し、血肉を以つて購つた猛獸狩の記録は其興味の點から見れば將に百パーセントであらう、殊に自然を愛好する現代青年には、世界的大野獸國たるアフリカ旅行の異狀なる興味は恐らく、此野獸狩にあるのではあるまいか。

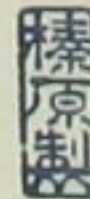
猛獸狩

扱、軍に猛獸狩と云つても、二人や三人で銃獵に出掛けるのは異り、極めて、大袈裟なものである。尤もアフリカ土人の狩獵法は極めて原始的のものであるが、歐米人の一大スポーツとしての所謂『猛獸狩』の多くは(野獸狩策の源地たる、英領ケニヤ

植民地の首府ナイロビーに在る) サファリランド狩獵會社に依頼して、少くも三十人以上の多數が、一ヶ月乃至三ヶ月間、猛獸の棲む人跡未踏とも言ふべき僻遠の奥地へ、サファリ隊(即ち旅行隊)を組織して食糧彈藥は勿論、キャンプ道具一切を携帶し、途の無い渺茫たる曠野を歩いて行くのである。雇入れたサファリ隊の内には、頭領一人、野營係一人、銃持一人、料理人一人、ボーター三十人、都合三十五六人の土人がある、それに何分にも澤山の食料品、寢具、天幕等を運搬せねばならず、且つ獲た野獸は、即座に其皮を剥ぎ、夫々腐敗止めなどの手段を行はぬと、百度以上の炎熱には、保存が困難であるので、かく多數のボーターが必要なのである。

從而、其費用も一ヶ月約二千圓は掛る、其他に政府の許可を得る際、外人は千圓、定住者は百圓を拂ひ、狩獲した野獸に對しても、種族絶滅を顧慮して、麒麟と象は、各一頭百五十圓、蛇鳥と犀は五十圓の料金を納めると言つた様な譯で、非常に大仕掛の狩獵であるから、拓務省から植民地視察を命ぜられて出掛けた小生には、とても思も及ばぬスポーツである。

併し、麗しい林のつゞく平原に、半ば家畜のやうに馴れた野獸の大群や、高原に咆哮するライオンなどが生れ乍らの處女地に在つて、生きの儘、思ひ存分、飛び廻り、駈け廻る、有様は、到る處に見る事が出来る。それは顔廢の目を動物園の檻の中に過ごしてゐる獅子や象などは、全く趣が違ふ、彼等は如何にも呑氣相に大自然を闊歩してゐるやうに、感ぜらるゝがしかし、事實はかく呑氣ではないのである。



縞馬の歩哨

之等の野獸中には、人間にも危害を興へる獅子、豹豺、狼等の猛獸、鬣、河馬等の水棲動物もあれば、鷲や鷹鳥などの猛禽巨鳥も住んでゐるので、縞馬、麒麟、狼、鹿等の比較的柔弱な獸類は勿論彼等猛獸間にさへも、常に、生か死かと言ふほどの、寸刻も油斷の許さぬ、緊張した而も真剣な、生活が送られてゐることは一つの驚異である。假へば、此アフリカの平野に大群を成し、集團生活を送つてゐる、野獸社會の大衆、縞馬は、其數の多いのと敵に抵抗する武器を有せぬ爲め、常に、豹、ライオン等の肉食動物の餌として狙はれつゝある、其恐怖が彼自身を護る爲めの、所謂同族意識とても稱すべきか、敵の來襲より逃れる爲めに、彼等相互の意志を傳達する本能を有してゐる、そして、其中の一、二正の歩哨に依つて危険が同族に知らされる、斯くして其肉を覗ふ強敵に備へる)のである。

又、ウキルダビーストと稱する、アフリカ特有の動物は、水を飲むにも草を喰ふにも、自ら護らむとする本能とても云ふか、其目的地への往復にも常に單縦列を造り整然たる隊伍で、進退してゐるなど、之等野獸の自然生活を仔細に觀察し來れば、實に興味津々たるものがあると、同時に、彼等の仲間にも、人間社會と同じく、生存競争の、いかに強烈なるかを窺ひ知ることが出来る。

一番危険な水牛

野獸の中でも獅子とか豹とか言ふと如何にもアフリカらしい野獸として卓越した威力と攻撃力を有してゐる様に考へられてゐるが、多くの探險家狩獵者の間に、最も危険な野獸と謂はれてゐるのは水牛である、アフリカの奥地、沼澤の附近に群居する水牛は、臺灣などで、双隼的に家畜同様に馴らされて、農事に従事してゐるものに比較的すると、到底想像も及ばぬほど猛猛なものである。

彼は、ライオンの如き肉食性は有せぬが、其執拗にして勇猛な本性は、ライオン、象、犀でも及ばぬ、其鋭敏なる嗅覺と、強い視覺に依り、敵の所在を感知した時は、極めて敏捷に襲撃する、而かも彼は彈丸に傷けられると、一度は逃げても、知らぬ間に不意打を遺る、そして若し、敵が樹上にでも避ければ、半日でも一日でも樹下に待ち伏せて居る。

彼は人間を恐れる獅子の様に、人間を見て決して避けることをせぬ、何故なれば、彼は人間を恐れざるのみか、憎むが故に人間と見ると、忽ち、奮迅の勢ひで襲撃して來る。犀や象ならば如何に嗅覺が發達してあても、視覺が不十分だから、風向を知つて機敏に彼の風下に廻ることに依つて安全を期することを得るが、獨り水牛に到つては其方法に出づることが出来ぬから猛獸狩中最も危険とされてゐる。

アフリカの猛象

そこで、アフリカ大陸に於ける所謂猛獸と稱するも、内に、人

間を食ふ猛獣は、獅子、狼であつて、人間を敵視し人間と見れば襲撃して来るのは象、犀、水牛等である。象は印度産と異り、極めて獷悪であり獅子が百獣の王とすれば、象は樵に百獣の巨である。従而、此偉大な象狩の危険は、獅子狩に数倍すると云ふ位であの強大なる鼻を、上に掲げ左右に振廻し、四斗樟大の足を踏み鳴らし、地響を立てながら猛然と突進する野象は、周りの強靱なる草木も薙ぎ倒し、電光石火の勢ひで、敵に襲ひ掛り、掛けた鼻で、腦天から敵を叩き下ろす、そして倒れた時は、あの太い足でドシン／＼と踏み附けたり、牙で突き廻したりする、死體となつても、鼻で嗅いだり、ころ／＼と轉がして戯れることである。斯く、恐ろしい象が濫獲の結果、今では、漸減して行く傾向があるので、保護を興へて居るが、それは、毎年貳百萬圓の多額に上る、象牙の輸出を顧慮するからである。

無敵の犀と紳士的な麒麟

象に次で、危険性の多いのは犀である、視覚に乏しい彼は鋭敏なる嗅覺の刺戟に依り勃然として、身を躍らし見えず敵に向つて嗅を當てにして、疾風迅雷的に、猛然と突進し来る状態は、象のそれと殆ど同一で、百獣の王たるライオンでも、犀に對しては襲撃を敢へてしない位である、犀の危害に對して、最も警戒を要するのは、風の方向を見る點にある、不器用なる彼は、鼻一つを頼りに敵の所在を嗅ぎ求めてある間に、射止るのであるが一度鼻を嗅ぎ附けた際は單純にも、イキナリ襲撃して来る所に寧ろ危険性が

アフリカ

植民地の首府ナイロビーに在る。サファリランド狩獵會社に依頼して、少くも三十人以上の多數が、一ヶ月乃至三ヶ月間、猛獸

ある。

斯うした、獸の惡徒や、不逞漢の棲むアフリカの叢林中に、これは又、極めて紳士的な動物が居る、それは麒麟である此野獸の世界に、敵を防禦する齒も無ければ、爪も持たぬ、また、聲帯がないから、敵を威嚇する爲めに咆へること、敵の襲來を味方に警告する爲に、聲を發する事さへも出来ぬ。唯、長い尾を激しく振り動かすのみである、それ故、背後に敵の影でも見れば、逃ぐるが一の手と許りに、瞞目をふらず一目散に逃げる、其状態は丁度スロー、モーションの活動寫眞の様な格好で駆け出す、けれ共體が大きいから、適當の時期に物の影に隠れることも出来ぬので、完く明けつばなしのアフリカ曠野には、好く目立つて見へ、其上に敵に無防禦だから、眠る時は高い樹木の枝股に頭を掛けて立つた儘、長い舌を出して眠つて居る、麒麟の肉はライオン始めどの肉食獸でも一番好むものだ。これは麒麟から見れば、とんだ迷惑であるが、彼は多分『不正を處理する最前の方法は之を無視するにあり』との最上の紳士道から、彼特有の温容を以つて厭やでも、甘受して居るのであるまいか。(呵々)

それに同類同伴で、三々五々徘徊しながら生活してある様は、悠々自適、眞に動物界に於ける貴族の趣がある。

自然の動物園

アフリカの東海岸モンバサ港より汽車で約一晝夜にして海拔三千尺以上の一大高原に達する、茫漠として見渡す限り遮る物の無のか、縊死した土人がある位で、彼は、夜畫なしに、人の手足の爪と肉の間に、喰ひ入り、驚くべき繁殖力を有してあるので、極めて、厄介な動物である、私は、アフリカ旅行中は、必ず、靴とベツドの中へ、蚤取粉を撒布して、彼よりの危険を逃れることが出来た。

蚤と同じく、蚊は到る所に居るが、殊に雨季と雨後には最も多い、普通の蚊の外に、マラリヤを媒介する蚊は、實に危険千萬であるので、旅行中は少量のキニーネを服用すること、船上でも陸上でも、夜は必ず蚊取線香を燻らすことに依つて、無事なるを得た位に、アフリカ旅行とマラリヤ蚊とは殆んど附物視されて居る。

それでも、今以てすこしも減少の傾向が見えぬのは此大陸に於ける、國植民地の財政が、極めて貧弱で徹底的に衛生設備を施し難いからである。

アフリカの汽車旅行

以上述べたる如く、大小の動物が、山も川も無い、只此處彼處に雜木の點々するのみの、渺茫たる荒野に、誇張かも知れぬが、無慮何十萬と云ふか、眞に、無数と云ふべきほどの大群が、生のまゝ、ありのままの、動物生活を營んである、殊に、鐵道沿線壹哩以内は危険を慮つて、何人にも銃獵を禁止されてあるので、彼等野獸群にとつては、所謂安全地帯である爲めか、汽車の兩側とちらを向いても、動物だらけで、車窓近くに、縞馬の大群が散兵

いだけに、極めて、單調なる感をも與へるけれども、汽車の進行と共に、窓外に出現する野獸群で無聊を感じる邊がない、見たことも聞いたことも無い。千種萬様な大小無数の野獸が、出没去來する光景は、眞に天然の動物園である。

兎に角、文明開化の此世の中に、斯うした驚異すべき動物の世界が今でもあるかと思ふと唯不思議に想はれる。之等の猛獸以外に少しく奇怪な動物の一二を擧ぐれば、先づ、大蟻喰がある、彼は六呎もある細長い體に、極めて短い脚と尾を持ち、穴の中を驅けつり廻りながら、長い鼻と舌と耳とを働かして、盛んに蟻を喰ひ廻るので、到る所、道路には此の蟻喰の作つた穴がある、其蟻も人間の手の親指大の體を持つてゐる、大蟻喰に次いで蛇喰鳥がある、土人は『人間が死ぬと魂は蛇になる蛇は祖先の化身なり』との傳説を信じてゐるから蛇は家族や小供を守護するものと考へてゐるので、蛇を非常に可愛がる反動か、蛇喰鳥は土人より餘り歡ばれない。

睡眠病とマラリヤの媒介物

蠅でもツエツエ蠅と稱する蠅は、灰色の體に折重つた翅と、前方と直角に形取つて二本に見ゆる、吻を持つてゐる、此吻で血を吸ひ、アフリカで最も恐れられてゐるトリパノゾムと稱する、一種の睡眠病を媒介する、吻で刺れる時は、痛く且豌豆大に膨れ上る、アフリカでは、此ツエツエ蠅よりも、砂蚤のジガーを危険視してゐる、此蚤に刺されて、恐怖心から精神に異狀を來たした

アフリカ

問を食ふ猛獣は、獅子、狼であつて、人間を敵視し人間と見れま

ある。

線を布いてゐるかと思へば、長い首を汽車の窓に覗き込まし許りに、差し延して列車の進行を見守つてゐる、麒麟もある、更にお愛嬌者の猿公共は、列車を目がけて騙け出して来て、如何にも物珍らし氣に、列車の通過を見守つてゐるかと思ふと、奇聲を發し乍ら列車と競争を始める、中には、小猿を背の上に乗せて、驅ける奴もあるかと思ふと、ヌーツと後足で立つて、ソロソロ逃げ行く、年寄染たのも居る。概して、汽車よりも自動車を怖れるのは麒麟と縞馬と角馬と鹿の類である、彼等は、自動車をみると直ぐに、走り出す、其格好は、實に滑稽だ、チョット走つては停つて、ぐるり後を見廻し、又騙け出す。比較的自動車を怖れる様子の無いのは、駝鳥や鶴の類である、殆ど、暫くの間、自動車を見守つてゐるかと思ふと、自動車と競争を始める、速度一時間約三十四、五哩出しても、悠然と並んで走つて来る、さうかと思ふと、突然スピードを出して、イキナリ自動車の前を横切つて、得意然として、林の中へ飛び込んでしまふ。

アフリカ土人ニケロー

世界第二の此大陸には斯うした野獸の外に中央アフリカの平和境たる叢林中には最も文明より遠かり而かも世界中最も倭小の體格を有してゐる彼のコピト族を始めとして、約數十種より成る、一億以上の土人が棲息してゐる、そして之等の種族は何れも頭髮の縮んだ黒ん坊即ちニグローであつて、其祖先は既に二萬年前アフリカ各地に繁殖したものとされてゐる。

彼等は其後アフリカへ侵入した異種族の爲に壓迫されて、北部地方より漸次南へ南へと退き、ナイル河の平原を経て、中部の湖水地方と、西方のエルゴン地方及南方のタンガニカ地方の三方面に、移住したもので、其内中央部より、南方一帯に蟠踞するものは、パンツの大種族である。

此人種は、其容貌、習慣を異にするから、人種的種族と稱すること能はざるも、共通の言語を有してゐる一種の語族で、概して恰愾且つ進歩的である(昨年日本へ、獅子二頭を獻じた、イチオビア即ち、アビシニア人も、此系統の人種だが、アビシニアと云ふ言葉はアラビア語の『外敵』の意味なので、彼等はアビシニアと呼ぶを嫌ひ、自ら、エチオビアと稱するのである。)

其他の種族は、アラビア人などの、種々雑多なる混血族である。土人の生活は、極めて、原始的で、家屋は草や、木の葉で雨覆をして、周圍を土で塗り、天井もなければ、床も無い掘立小屋に裸體生活をして居つたが、近來文明の感化に依り、男女共、殆んど同様に腰巻を纏ひ、半身裸體状態である。

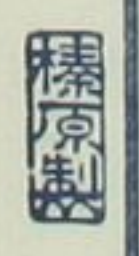
最近、村落には、大小莫のシャツを着ける程度迄、開化したものもある、殊に、沿岸の海港に於ては、外來者との接觸で、其影響を受け、次第に生活を改善し、殆んど、裸體姿を見ざるのみか稀には、粗末ながらも、洋服を着用し、帽子を被り、頸鬚を貯へて、ステッキを持つなど、仲々モダンな服装で、市内を得意然と、闊歩するものさもあるので、これを目撃した、自分は、啞然として暫く見取れて居たが、ふと見ると此黒ん坊紳士、足だけは

○支那の北方の料理は、ゲンギス汗料理と云ふが、
ゲンギス汗が戦時野外の大規模なやつは、時々の
獸一匹を丸煮するにせよ、今尚ほ是れを倣
ふ料理が大家の家庭に行はれてゐると云ふ。極
楽日年が此の料理を味ひ且つ割烹の方法を記
す所の話によると、坐すに料理を行ふに、先
づ平皿を自置きその上に織物の平鍋を置き、その
鍋の中、肉筒を焚き、その肉筒の上を銀鍋
をかける。肉筒の中はアンコウを入て煮火する。
五毛の火籠が揚がり熱の弱るまで、（肉筒）
銀鍋の中、その肉筒の肉と茸、其他の野菜を
入てグラウくと煮たが、（肉筒）を心る、是れ獸の七島で

七の肉を投じり赤グラウくと煮た。最後の火の漸や
く弱まるに候目を見計つて秋草の葉の老を堆
き、投す、是れが是れ、（肉筒）汁の考め、ペツヤリす
るのをや、生ずる、肉や野菜と共に食するの法は
うつくしく、まゝと云ふことである。自合の料理の名が
高板であるのを、（肉筒）ゲンギスカンは、（肉筒）人の熱心
の英雄であるから、此料理を、（肉筒）試みたいと思ふ
と思ふ。
三月十九日記
昨日備へ支那の、（肉筒）と云ふ、（肉筒）諸橋、（肉筒）ニ、（肉筒）合、（肉筒）ゲ
ンギスカン料理、（肉筒）就、（肉筒）別、（肉筒）所、（肉筒）が、（肉筒）あつた。諸橋の、（肉筒）後
る、（肉筒）支、（肉筒）那、（肉筒）の、（肉筒）今、（肉筒）あ、（肉筒）る、（肉筒）此、（肉筒）の、（肉筒）七、（肉筒）の、（肉筒）候、（肉筒）を、（肉筒）思、（肉筒）ふ、（肉筒）七
の、（肉筒）あ、（肉筒）る、（肉筒）。是、（肉筒）の、（肉筒）原、（肉筒）野、（肉筒）に、（肉筒）盛、（肉筒）ん、（肉筒）火、（肉筒）を、（肉筒）焚、（肉筒）き、（肉筒）、（肉筒）是、（肉筒）を

焼つたものを人間に大きき肉片一枚づつを分配す
ると、鉛が自から烈火に、まんをアブウテ食ふの
あると、如何なる原始的心あるか、恐らくこんがれ
料理の本体であらうと思ひん。

○大隈元侯没後十年であるが、追悼會の準備を始め
この年の四月に始りたが、七月の十日を廿日を
剃すも、富く、毎る事務は煩はせておき、侯が其
し、同時國民葬と云ふ人が総務を自分があつた、
このの國民葬事務も、自分が控係してあり、いんが
先妻に對し自分の没後の存在と思はせある儘、
一日の僅しであるが、成り大なりなり、若人をして
千人暮り、一人あり、十日の金をえつても、
費用は、先の大隈元侯に、利銀は、幾人いそがなる、
一、入金の、七、八月に、
達する、記念事業と、
侯の著書、
の、
である、
り、
念し、
後、
深、
削、



費用は、先の大隈元侯に、利銀は、幾人いそがなる、
一、入金の、七、八月に、
達する、記念事業と、
侯の著書、
の、
である、
り、
念し、
後、
深、
削、

まゝまゝうゝるにたゞあるのみ。夫人と曰し時を放ちて
る事。この字は煩い。尚ほ此の進輝を拂と。音別
落回寺内の侯々墓域を開拓して衆庶に施す。此
礼拝を許すこととある。以上が敬慕人の大要
である。

三月廿日記

○今日散策中、字本一冊を得たり

大聖親書天秘決

と書す。乃ち聖天の秘事也。囉嘛の如き女人
を踏むの回らきも男女抱擁の回上六あり。象頭
人体のよの多くは男。性精頭人体のよの女性也。日本
の秘佛として人の元を許さるるも支那の囉嘛寺
の公開書も探らば、我回るの異なるを得んとす。

藏書

この秘佛を供養す。一代の理を達す。よ次代
の亡ぶるもその秘佛を思ふことあり。此考原本
と無く稀に字本として傳ふ。

○近教を名の金銀回經の流布本が、今も初版
の甚と稀也。此の文のむに於てその初版を得た。初版の
紙質もよく刷りも鮮かに彩も美び一見心地のよい
本である。流布本は比較して元々も、字も増換がある。
初版と出るとか、追々知れぬが今の流布本はあ
る。彼北極星の考も亦初版のいつも精刷である。こと
元々も、此書を架中、字の美ありあると、
と贈り、惜しいこと。冬冊と書きたるがある。
○昨日関谷城方々と友人が或る師の、
谷介が来り

りつき近見した。此人井上頼國に就て和歌を著人此人は
往年人丸致を出政に比ぶる事あり十公斗尚勢
力し心望し何秘考を著し比として其の稿をを齋
くし来り一讀せよと置いとちつれのか聞三位せし後ん
と居るがまじい一卷にけきく後み後し

日本の世世の所を宣傳せんりてあるもの。その
美人のあつたと云ふ然と和歌に佳話があつたと云ふ然と
誰れも其名を切つておつが此の佳話の種々の佳話を産
み、昔しから種々の文書ある事、その佳話の産
やうな書かぬ、其の佳話の大伴の謎の如くするやてお日
から、まんと研究するの、確と研究の甲斐又かあ
る。自分もいふこと、その書名はけし、切つてある

藤原

が、その初めその其の内容を切つたもの、玉造小町杜原書
である。こんな小町の夜中を念とさうしてそのを掛ん
んが空海が唐参りし其の詩の歌一と傳くこと、その
て、唐参り程程も取らんとおつたもの、その佳話の
こと、今より切つておつたもの、古来主流の著述に此の
か引かんとおつたもの、此の事ある事をとんと留め、研究の
結果何人もえを正しといふもの、此の佳話、藤原が
空海比と云ふもの、空海が小町の佳話を著した事、
と云うもの。空海が小町と曰はれたる人、此の事あるか、小町の
少し後輩の、空海が藤原の後、高僧の時、此の
此から、坂原の小町を空海が見た筈、此の事ある。
今此方に就て小町研究の関心の書い比一節を抄す

ると左の如くである

小竹一生の著書：就て斯くいふく風の流り起つた
の白河鳥羽の吹：お竹の流りも猶末なるは
かかると思ひん夫の古く著る集に斯うある
七巻小竹が若くを名を好むし時云く（中略）と是
が抑も今傳りの流の起因と認めんが是は小
野小竹の事か入るの此文中より引てある杜表記
と云ふの玉造小竹日杜表記といふ漢文むかひ
れよか今日子傳りも培る作あり不的かある或
ハ弘法大帥とも云ふ又三善法師といふも
あはこんハ夫の由未天が「秦中吟」且つ「幸地魯
上吟」を云ふもより体し儼つれよか心より後也

漢文

あるさんと左程に：字方數をすもよ及ぬ唐
の初より女子の容貌も：清つは卷二榮枯の頃
まうし由を詩能く心つれよか夫の命も此の
如きいれすし七斬新なる文藻いはるの、その杜表
記の略ハ助をかい撮めよその初也

我ハ是れ傳家の子として良家の女とす（中略）其
母を失ひ云ことありて、その以下が前の著書に集の
十七より母を失ひの文なるをみる。是れハ飢り
る榮枯のまうかありて、十七集もも意く初めも
早や願ふ人の不遇の人と云うは女の心あるから
其は是れ二ハの十六集の事と云ふ元々此傳物の
主人公ハ傳托の人にあると云文書も亦大家の

玉成て成つたものといふべからず、あつた文を
焼き直して玉成せしむるものといふ史の上
實在にやうな所は、所の上は引直し斯くは、
集の如く、これと思ふ。

右の如く玉成不可、其表書ハ清純の徳を、
て先づ疑ひあるの無名物、も光東を、
そのと、若くは、十洲集、
於て、その、
と、此から後世題の持と、

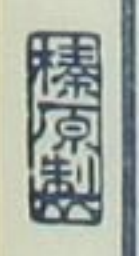
○か所の青像の、
ぬる三十六歌仙の、
所の像文、



から美成も、
の美人の、
て、
かす猶法、
た、
旅、
、
か、
伊、
買、
、
て、

のまか中より枕席に侍し比よのちあつたはあつた。是ハ
さとおき采女を貢献して其初めの既者に就て
北巡臨幸の考に頼り實におもひのことも思ひ
つ

北巡臨幸ハ文武天皇紀の令を引て北兵衛を
といせしむありまの女を心遣き四々を貢がしめ
給ひし事ハ心得かたきうろろ、故思ふに何ぞ
既そのの始の意候は久んて只その儀美式
のみ残ること多きおぼえ、北采女もたゞさる御
さだめとのみうけつらぬのむ、女姑も思へん本
所さくせしあつべのくか、ちそのむりの帰順し
をんる位をまこしめあつた、采女に献らるる候



いおほゆけもあんとも大御心をあくる給ひし
あらくは、女ハ大方遠き御出立のへき心ちもな
きものよし、その親けはらからうかちも遠くはちて
ハ遣つへきともある事トきこよるんか、その四人の
位を見給ひたゆ為るハ實にあらあつた、そのあつ
たふしといひり、

采女ハ天皇の御を得る皇子を生ぬる例ハ決して少き
まの舒の天皇の皇子にハ天智文武両帝の皇弟
皇子の母ハ吉伯田媛、采女ハ妹子娘のあり、又天智天
皇の皇子ハ持統元のあゆの皇弟大友皇子
の母ハ伊賀采女宅子娘のあり、又桓武天皇の皇子平
城造磯原和三帝の皇弟良岑あ世一傳正遍昭の文

の母、女孀百濟永徳也、斯く采女や女孀の御胎、皇子の生れを胎すること、尚時、珍しくいこと、わらうとわらふことある。

華の序、永祿七年、長浜、蘇の儒、和智、棟、御の、若の、一、此、宮、延の、秘、史、の、一、事、を、左、に、抄、す。

天子の御子を懐妊する。女御更衣、御匣、殿十二侍の、尚侍、典侍、女侍の、お、り、采、女、を、事、さ、す、女、孀、命、婦、類、の、懐、妊、し、り、の、所、を、さ、す、也、然、る、ん、に、西、徳、年、中、仙、洞、の、命、婦、(杉、尾、社、人、の、娘、也)懐、妊、古、例、に、任、せ、流、す、心、き、ん、決、す、法、司、代、~~母~~松、平、紀、伊、守、殿、伺、御、差、回、に、り、こ、と、ぬ、や、う、ん、と、也、子、細、い、

御匣

今、智、恩、院、の、御、門、主、女、外、子、川、路、の、關、多、し、何、の、胎、を、し、も、王、子、御、降、誕、せ、し、く、被、成、候、得、心、可、也、と、い、初、て、命、婦、を、こ、平、産、ま、し、娘、宮、誕、生、と、云、古、例、に、依、り、女、御、更、衣、御、匣、殿、十二、侍、の、公、卿、地、下、の、娘、を、以、て、命、婦、以、下、に、其、論、す、也。

この事、女孀、松、七、墮、胎、の、事、を、知、る、へ、キ、也。

○日本、む、今、ニ、采、女、の、賞、格、を、夢、中、に、さ、う、り、と、あ、る、と、い、と、お、照、と、ら、す、こ、の、品、の、変、り、は、米、國、の、リン、デー、大、作、の、孩、兒、抄、云、一、件、也、也、若、い、愛、つ、て、も、夢、中、に、一、日、と、あ、る、日、本、の、三、方、士、の、お、す、感、取、も、似、り、有、取、天、を、さ、う、り、と、い、困、り、の、係、し、ま、い、ま、義、が、あ、る、リン、デー、事、件、の、有、取、天、の、感、取、か、出、来、子、を、お、す、こ、の、事、い、か、リン、デー、は、室、の、英、雄、が、人、氣、

ものねまひさし。愛児を盗らんと米田人が同族を宥
するの無礼過ぎいふも、回家から見れば一せし事であ
る。然るに之れを捜査する為めの大検使の特命令をも
つてもあること、空手滑靴と云ふ狐心なきぬ、リニテ
一は愛児と交換の返すとき五重丸の金を用意
しとおの係し犯人の捕縛を恐るゝ現はんと未だ
そこでおの検事局から捕縛をせよといふと叩頭して
といふき入つたことである。一孩児の為めは法を枉げ
こい何事があるか。孩児が盗らんと既二十数あるもの
が當りと消息が多い。リニテは炊湖の極がング
の叩頭して捜査を頼んがみる。獄中である例の文は
かボネはえとすへも俺も出る物と許せば直ち

扱ふこといふ事あるときあつてあるをうだ。米田の
愛此の一件は今大糾起である。警察の極力力を
盡しとみる。一向その効が多いといふ、不思議な
ことである。米田の警察の見る無力のまじりあつた
かボネ一輩のガングが古くは改竄しとあつたを不問の附
してある所を見ると、米田は無罪の察の状態である
とあつた。此件の犯人を捕、得ぬの日不思議なるのか、
ぬ。米田利がハ文のを以つて済む四、不思議な文の
である。ふん式の事、相野が震駭し、法を枉げる
ことを敢て見ると、カングに對しては無罪の察であ
つたりすること、如何なるも奇観である。考へ、此事件は
因り或るものしつリンを得た。米田利がハ其の感受性

の圖が、センセーションが激発すると、其事の理宛に拘らる
夢中となり、リ盲目となる。國民であることを覺つた。
國際上の糾紛を孰れも性々盲目的の行動のあり、
此の國民性の然るべき所を、軌道を外れることを
敢て憚らぬ。真に危殆に四つある。軌道を外れ七共四
自身怪我をすること、勝平比が、是か他四つ及ぶこ
とい真平神免ひある。

三月廿二日記

の関谷織下中の小野小町秘考三冊を大暇讀み畢
つたのも、愛の概要を書きついで見る、才一ハ小町の
素性である。ハ所ハ古今目録に出羽國郡司の女比古姫
とあるのも、從來さんがいづれにせよ、隨つて郡
司の女ハ采女とあり進せんる例であるから、小町も

採女

采女であるといふんが、愛の信實の筆比と云ふのは
三十六歌仙畫卷の河書と小野小町お常河女と
あるのも、郡司の女説が破れた。河書と古今目録を
七引き出羽郡司女比古姫と書きさす、其上
に小野小町お常河女とあるは、家から去ると古今
目録の、斯くせんといふ、小野小町お常河女と云ふは
書き振りのこと。此の河書の、良行の筆かどうか、
あるのか、傷つて、良行の書いれよ、援つたとすんば
根柢あるものと見て、その得る。所々、冬減り常
詞といふ人の、最も似合りの人の、常詞であるから、
詞ハ詞の誤りか、七つある。冬減り常の常詞ハ、
和七年四月廿三日、四十五日、表してあるから、逆

算すと弘仁六年即ち常嗣二十算のめいふ町は
先んじことなる。常嗣は町の里に住したるに
常おと呼んたのびあう。若し此説正しとせば
野ハ原野ハ町の原氏とあう。此の由。常
おの説の起つたの今も此の給お世に現んた
のことである。

小町が来せりてのうとま疑ハ此の女性ハ氣高く高貴出
身の僧正通昭や在原の業平をあしう。ふ。若きの態
を以てしあうことである。通昭ハ大納言良岑^{良岑}世ハ男
初人頭左近衛少将宗貞のことである。多んか^源えき寺
の座主とすつたのびあう。在原業平ハ平城天皇の孫
深心子阿保親王の五男也。その母ハ伊豆内親王桓武天

皇弟ハ女である。斯く高貴の出身者ハ小町がなる。暇
近であつても、若し来せりては、對等の態ハ歌
の元ハいせの出来方の花である。小町の和歌を兄と
ヤも地歩を譲つて居らぬ所から見て、小町が在原
出身也とあう。故ハ此のことはある。

小町の宮廷生活ハどんなにあり、とんも唯ハ歌ハ傳つて
推測するのみである。が、あつても時の天子深心ハ天白仁
の天皇の(子)ハ在原に在りて、原ハ氏を傳つて、
思ハ、歌ハ悉歌の由はいくつとある。深心天皇
ハ皇太子時代、多くの皇子を挙げ、後ハ三田の宮嬪
あつ、小町の切角と得る。後、障りハ障りハ障陽
せんやう漱るき術と和歌ハ世つとあう。思ハ、

悉歌の四五ある中二やんことなき御方の思ハセ給ふ
と。あらはに詞者しほ悉歌をいひしく皇太子をせし
すふと思はる。皇太子御年二十二三の時何所ハ十七
ハの盛城時代びあつたのむある。今左二一歌を抽出
す。

やあふことなき人の志のむ伝ふ

うつらふをせもあふ見替ふとせ

人目をむと見るかこびりせ

此歌と親し本書ハ云く是は古今集五三二載りたる
歌也やあふことなき御方が後宮のヤサのむお思ひの
まうの時やあふとあふ君にお目入無つれ夢をえこ
へも人入見然のくんせぬと人目を替ふるも世を

深宮

から注目せんと難儀と思つて垢ののびあふも物を沈
しとあふ目のありお思ふなるも世の良悪く思ふ
垢の身もあふと垢しせか思ふあふ物もあふ証のあ
すすが荒しと誰にも元々あふたといかふる百憂目を
えることか世をも替ふる氣あふ苦なるを及べし
せもあふとあふ物かあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

あにきあふのうつらふ

是は續古今集悉三二載の此歌は今あるもか替ひ
あつたあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと
あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

らむいゝんそらうい身むいあるとかこらう歌む或い前
のやあいにとるき御方の志のひ給ひてまの後報と別を惜
んむの和歌むあつまのか

此やうや切るる恋の和歌いまい或くのちあふ、法と對
等の人の容せれ志とい思ひんまの。給書物い小町の
股装が齊宮い御は比とぬもかまのいあつてい伊
加が更衣に比と初傳りまやうま見わらむ或い御
若くは御は等しき侍馬をまけしめ比のひあつま
いか。小町が来せむらうまえい其の階及のいひあつ
ことが股装のいひつてもいひらう。唯は彼んかことき大
色をみし、中中らなうらうら。其志の境遇があつれ
のいお中らなうらうら。嬌娘らむとて教遠せんれのいひ

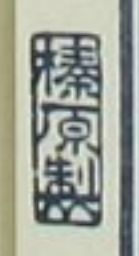
漢京製

あらうか、

常嗣の長子い興邦と云ふ小町のまの姉まきう、興邦
の母い尊卑今脈、左大臣緒嗣の女とあつ。又一本、冬
嗣の女とあつ、其の存んらうとあつせんとも緒嗣の左大
臣位にあつ、常嗣の妻が緒嗣の女とあつ、小町の
興邦と曰母の姉とせんか小町の緒嗣の孫む、桓武
平城の皇后の共い母の叔母と當り、小町の北の里の
實に主流なういひあつ。斯う系譜關係を述べ得
た系口は、給書物の緒嗣者がヒントを共つたよめ、
既往の説い之んか考ある前んた。即ち小町の親を
小町の皇とせん、説七、時代むいひの衣通姫の後裔とせん
説、出羽の郡司小町い皇の娘とせん、説七皆破んたの

いふふ小可を高貴の出とせよん、解く難いこと公甚に多
くあるの云

○心人汗流成流、東山陽の書の鑑定を乞ひん、その
中の懐り紙に、●製卒る者いれ、七の二紙ありて、温
柔の強縁とあるが、碎後のをとりて、山陽の巻とし
ての巻り、括かある。去かし山陽の集るもの、決りて存
しと居しぬ、よのわあるから、免二角寄し、九つと重
く一二読み、子世翁比字もある。
三月廿三日記



能多祥成脩禊辰、流棚人勝可憐人、何か今日爪
の注、一盃為斯好合春

羅長函花信、水轉山、毫杜月冷杜、詩吟洗、兜他日
依出戒、今晚身、誰何行生

畫旌凡吼、焦于腮、奪取三郎笛、一枝、真個後
門、遂進市、便將腥血、澀白半比

片紙裁成、比翼、次女、不從秋扇、委篋、道司、為天
稔市、期偕天、好伴、鴛鴦、付水洞

紗燈、旋轉、似車輪、天地、錯行、煙裏、裏人、世上、尋
常、空思、影、誰能、者影、戒、艾、莫

桂花、凝露、月圓、玉兔、合香、夜、搗、杵、任、境
偷、言、嗟、逝、死、不、似、長、命、手、為、丸

滿映秋空引雨澹依禪作怪立招林栗兒墜地
開何様亦見危又極佛心

溫柔心裏別乾坤玄牝曾開衆妙門一々以天
祿者元九年面壁亦消魂

雪裏芭蕉認 辰、右丞心近至今新、由佛誰

無情佛、極教他家行人

咲語和軒的聲、一番春信各為情好風持入

玄門裏無限陽和自是生

溫柔心四時雜取唐宮喜音

三十六峰外史併後歌卷

○又ハハの言ハ度之聊ハ志ヲ言古者ハハハハを流○

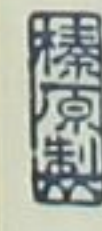


此の如くしてある免角美顔の如くを此の語利か(キ)
ものである。亦安和の風流なる女も多く貞節を守ら
ず故籠りありしかる、小所も久鶴持人を心つれこ
かひ多し、このひきり小所を女を答むべきに、いつ
も六歌仙の圖を見るとき、際まで美な男あり多く、この
業平と珠と漁色家と云ふんにか、小所ハ業平
と許し比と著るも、考へて見ると、志か、この七歌仙
を愛するもの、小所ハ業平と云ふも、十四歌仙の年表か
ある。業平の三十七年位多時、小所ハ四十歌仙の娘は前
の年ハあるから、業平が言ひ客を、姉氣を、お
手とりさうつれと解釋さす、佛正庵、眠かま
と法体と云ふもの、前ハ小所も情と交かあつれと多く

の人が推測するの、無理な事(海)詔は美顔の人のあ
つた、そしてヤ町の僧正を仰ぐを喜いかうとてむを
かへくと云ふと、傍正の「つてくさの衣を貸す海
へ行まゝい」を一所に寝んと云ふ比應禱が情交
のあつた証と云ふとあるが、こんの何んとも云くば
詠禱の意と云ふと見らるべきとある、古今集の志の
部：こんが無く詠か入んえとあるの、志歌と云
ふのからと云ふ説もある。ヤ町の歌まゝ志を詠
さうして其の意を詠を弄してあるのがいくつ
あるから、注意せねばならぬ。文屋の家原はヤ町の
巻末したと云ふんせあるが、ヤ町のいつもまゝに
つれづれと、まゝらしい歌もある。家原が三河板の

家原

まうと所任する時年来春巻のうを原巻とて
まうとて、ヤ町は、わびぬんが身と浮草の
根と云ふと詠ふもあつたと思ふ」といふ
此のまゝなり、ヤ町が許したと解釋するものもあるが、
こんも畢竟詠禱である。此時春巻はヤ町も二十歳
で、まゝの事と云ふのは、志は、まゝの事、春巻の
年来のまゝの事なり、若い時のことを詠く別な
つける評もあつた、釣く、まゝの事、まゝの事、又
あ信清行と情交関係を説くも和歌の意、禱に
てある人の追長の法、清行もヤ町も詠んば、清行
が詠まはるゝを裏巻の事、まゝの事、まゝの事、ヤ町
の志を言ひたつた、まゝの事、まゝの事、神んれまゝの事

玉の人も見ぬ目の涙をうけりしとをよまや所のかつーハハ
ろつろつ涙を袖に玉の涙す我の世をさあつくず流津瀬
るん心とありしもか可ハ一層大きく出てみる。こゝも悲し
曲も即ちの涙流とあり。此道長り既ハ流の三十
ハ九早もか可ハ九早りのゆゑか可ハ流の三十早
年長のありから。喜の妻の契があつたのむらさき
流のまゝ供扱うしてあるやうも見える。か可ハ流の
大氣があつて志願ハ流流を流してみるのか少くも
いかく。えんつりこまぬやうに注意し流のうらぬ志
を流すやうも見えしりやう流流の流けてあるのが彼の
の猶平ありある。か可ハ喜の情人の誰れであつたか
あつせんごとうい節方ハ別として今確とハ合


歌集のいふ喜の歌のいくつもあるから。情人ハ振葉
とえんれこもあつた相違なき。深草少将の九十九夜
通(通)のいふやうとんるこもあつたうか。路う人を振
つた天四洲の女の末路をいふと、果ては、南時
常枯葉を流を流くことか可ハ喜のあつた時、あり
内の物語があるが、か可ハの身分を考へると、えんれこ
か可ハ喜のあつたとき思ふに、ちか可ハの流平ハ決し
て喜のうらむ喜の内の口をえんつたうらむ詠歌
の上から推測する。

○小島骨董の千點をきいたから此の歌の流もいふが
平生山入りの骨董商が持来ると、ホツと購ふれ中を
所ハ味味のよかある。おの時代のあつた木彫の鬼の真

念佛のまじり架中、二款ある。此種のものは形が大きいけん
が採らるゝが、章を三寸五分、色を白のり、架中のよとし
は、龍宮城の二基、花一基、城の根を白のり、海中の、珊瑚がある
こと七地、のよと取り合せの、花、架中のよとし、ため
紀、既、い、く、の、も、ある、が、交、趾、リ、ス、リ、か、か、と、婦、人、犬、を、抱
き、着、る、の、が、一、寸、お、せ、し、り、く、出、来、も、ある、。嵯、峨、人、形、の、画、此、後
大、黒、兼、三、少、女、の、時、代、の、廿、二、が、ある、。採、つ、た、。交、趾、の、縁、を
の、く、ス、リ、が、の、く、し、の、り、犬、の、小、置、物、を、一、双、揃、つ、て、ある、の、で、
こ、ん、七、架、中、の、の、よ、と、し、た、。デン、マ、ー、ク、巻、の、約、若、び、女、人、の、三
條、ハ、程、り、の、色、に、彩、ら、ん、て、身、の、の、取、味、が、ある、。外、四、物、を、採、ら、
い、る、く、が、お、守、り、を、あ、ん、ど、デン、マ、ー、ク、巻、の、約、若、び、女、人、の、三
七、採、ら、こ、し、し、た、。キ、メ、コ、ミ、人、形、少、年、少、女、二、基、の、時、代、ハ、七、

標原製

くまのが古歌、心、ら、ん、て、ある、の、が、架、中、に、入、ん、た、。此、氏、ハ、ス、キ、
流行、で、白、樺、を、い、は、し、の、ル、カ、の、が、出、来、て、ある、。外、四、物、を、若、民、養
術、に、依、つ、た、ル、カ、の、比、が、造、り、上、手、な、う、つ、て、来、る、。二、基、の、内、一、基、ハ、
①、坂、を、飛、ぶ、の、所、を、い、は、し、て、ある、。加、納、城、の、小、品、能、面、二、個、ハ、
共、に、お、び、精、進、也、ある、。日、姓、捷、進、速、心、の、内、ハ、小、品、架、中、に、入
る、べ、き、よ、い、奈、良、の、回、響、を、採、り、し、軍、神、の、型、面、二、基、と、木、形
の、猫、二、基、お、お、の、猫、が、ある、。樂、の、香、合、一、個、ハ、駝、馬、一、個、ハ、
書、冊、を、形、取、つ、た、よ、う、で、共、に、三、音、実、び、ある、所、に、ある、の、真
か、あ、る、。小、品、陣、列、は、ま、あ、の、色、彩、を、添、く、る、の、で、採、用、し、た、。
此、前、採、り、た、後、手、に、入、つ、た、よ、い、お、り、を、衣、の、如、く、な、し、き、き、を
い、
三月廿二日記
尚、案、之、の、エ、ブ、を、あ、ん、と、思、い、つ、。自、然、の、断、層、の、現、れ、ある、

筆と材料として自題のさまを承し香具をせり等か一程の
風味あり同じ材を以てせり等其七附屬あり、如工の形痕
跡をえざつが何字有也

○青山田中光欽伯収録の古徑題跋随見録二冊安田某次
郎より借り来り毎日自寫消閑の業とす、毎日三紙乃
至五紙を写す、萬葉本より二百枚に無人とす、が全部を
寫すも二月餘を要せん、安田本日青山伯自筆を
影写し、そのうを伯の筆致儼然存す、伯の古言性
の愛玩家也、けありて謹嚴の楷体を此に就す
所任、亦も恰南の筆也、余前年伯を訪ふてその
後卷の所任の跋文を写して懐へ、其載せざる時
の難保又在る、吾も今尋ぬ、自山、こと煩し

標原製

この題跋中常の字あり、その傍在り、伯目跡の
皆題跋を写し、可くも例として、又屋張紀伊
横政等の注、名所圖會不稱のものを採り、等も
採る、其與而古図解度量権衡考、おと採り、
るも、其の傍採り、等痕をえり、伯も前、徹定
の古徑題跋、跋、野史の同じ標題の、ある、
其作採り、等もの、大体重複、七も別也、亦採
并、同古、察、在るもの、は、ま、て、
青山伯不稱の、福り、等、の、七、少、か、
の、福り、替り、も、採り、ある、此、點、七、
字、を、三、つ、つ、あ、る、際、の、心、地、を、
この如く、身、の、天、而、平、時、代、の、天、地、

閑るいぬ市業也

三月廿七日記

○江塚園の巨幅を齎し来りてのあり居て視ん心猶本に
懸産充溢を因し紙簡を副ふ筆勢云雄也落款を
見れば嘉慶乙丑春二月宮札日本長崎山中華江塚
園とあり。稼園●長崎在寓の心算こと知るべし試必
又壁に掲げし見る整々の考を聴くかと終るん元沫四
邊を歴するの思を考す但に春淡く尚寒し今壁
に掲ぐ可く或三伏の候と待つて之を掲げし日着を消
す一助らん。余往年稼園の二字額を贈ひ今為
家に存す、こゝも亦留寓し節相毫す所
て本園の年號をお皇園の年號を併せ録す稼
園の揮毫程と見ん、此の元澤園の如く壯快

東京製

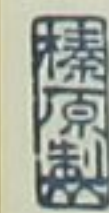
の七の元が、合指動き終る燥か。

○古徑題跋兼寫中偶と由中光顯伯来訪このを
迎へて寒暖を叙し、先づ古徑題跋隨見録を出
し伯に示すし、毎日日課自ら勝字してあることを
告ぐ伯見て驚て云く、何んが此寫本の拙筆と同じ
きやと余為め語る此本貴筆を影寫し以て力の
まう、宮内省に今奉仕の官吏に影寫を能くするもの
あり安田のりんと嘸も○影寫や一の半途分
を就ふて辭免と一語を安田の潤谷宮内次官に依頼
して筆寫を繕續せしめたるこ、貴筆と寸毫異
と云へたるハ影寫の妙を依りて、伯怡然圖らせ
りき之を貴家に見んとんと伯に語る、明治廿三年

近ハ志きう古任を逸り題跋七見るは從ひ極し然るハ
其後の癡しきと古任の固き處をなほするものハ
多く治の四花なるが如く凡ゆるが如くとの詞に對し自
分より敵したるもの若干ありと語らる。伯ハ今年九十有年
尚豐饒壯者の如し先般肺炎に罹り耳聴へず又不自由
を訴へらる。時勢の疾く移つてハ伯存命の長きハ甚だ不
快すと憤慨あり余ハ政黨政治の非を論ず。春城漫
淡二冊を呈して別る

三月廿七日記

○郷人布施秀治田終史のことゝ當り年あり終て左
文書記録辭典を編纂ありつてありと云きしか此程ア
の辭を試用して示さる。近年各社の新書出版漸やく轉
を如くと雖も未だ此種もの辭書を企つることあるが



如斯ハ古文書に通ずることありて初め企て得べきもの
あり故ら、およそ古文書故記録の讀うべく解し難き
ハハ其の字体の書くも因んば、その時々の習俗語
や今語の變りや俗語や或る範圍を限るゝ成語
や略語や、有職之詞や佛語や、名乗や、當
り字、日本に作りたる種々の字や、官名職名も、
又或る字ハ讀むが難し難いものあり、又ハ少くも、徳
川期流行語や、今語、既ニ解し難いものあり、況ん
は百年前年の前の文書や記録、修がズンク分らう道
理あり。此種もの辭書出版の望みあり。ことある
ハ、志きう斯く書の新書、度々行く行ハ、或ハ
全部十冊と雖も出版することハ困難なりと思ふが、自分

ハ若者ヲ挽ます事勿とも切望してあり

三月廿五日

大隈老侯敬慕の歌

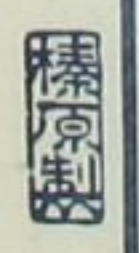
西條八十

不知火燃ゆる有明の
海のはりの故郷に、
鳳雛殻を破るとき、
新日本の夜は明けぬ。

ああ、君ありて輝けり、
大日本の憲政史
ああ、君ありて十萬の
早稻田の学徒意気高し。

藩閥打破の雄叫は
廟堂を揺る暁の鐘
英断築く十年の
我が國交の大方針

蒼穹に日は輝けど
蓋世の偉人今や矣し、
学園の氣、郁々と
尊き慈父の香を傳ふ。



○満蒙の新國家に先づ角成を先け、これだけの先づ角成今四の
 日支事件の收獲と云ふべきに、此國家に先づ日本を背く事、
 日本の懐ろに這入つて来れば、その存立と今後の発展の
 日本に回策と日本の援助を待つては、論ずるべきに、
 日本に満洲に於ける權益を渡すことなしに警備を要する
 日本に警備を取り直さず、満蒙新國家の警備である。
 日本が其の警備を担ふべきに、満蒙新國家の兵備
 の免責が多し、これと軍隊が自家権勢の爲の何十萬の
 兵を養ひ、それが民衆を塗炭に困め、多きがこれ
 らに橋治せん、民衆に始めて搾取を免れ、のびある。満蒙
 の天地は春の来りのこの頃からある。但し満蒙の将来
 は簡單に論じ難いものがある。俾て新國家が成立し、これと云

櫻原製

先づその唯一形式のみがあるに、此の新國家の落着くと云
 儀と二十年、花く二十年の後を待たねば、日本は
 満蒙に對し如何なる措置と考さんとするか、又重要な
 の問題である。満蒙は種々の民族が混入してゐる。民衆
 の多くの特徴もある。習俗もある。恐らく彼等をして
 其の習俗に従つて自ら治めしめるが尤も回策の得れよか
 ある。これが複雑の行政を簡單にする法がある。政費
 省くの方法もある。日本に此の新天地に移民を為すこととし、
 勿論のことであるが、其の方法に就ては研究を要する。或は策
 するものあり、日本に各所に屯田式の移民を為すし、これ満
 蒙を領するの秘訣である。然るも日蒙の衆を化する能はず
 俾ては、屯田移民の彼等と化せんことをせん。彼等を

化す故にやうに既往の事實歴々の之を徴して約り日本明瞭
ひある。或は云く日本の移民の彼等と競争して利権限の
見込ありしと或は然ん然るも日本農民の彼等と競争し
ずるに之の移るが自から働き自から生活する為め永
住するよりん日本國に居ると大差あるべきやあるや、宜し
く日本國をの畫し、相當の地を興つて開墾せしめ自給
の策を立、或はあへし内地の農村の多く疲弊しと此の新
天地に就んとするもの甚れ多く、然るも自から活き得
る土地を供するに陸続きとして赴かん、而して何の方面と
日本國とをききやと就して支那に過るものあるや、吉林
の海を隔て日本と直面する所を、韓國も旅路相
通し、山海美し富み、農産を過する地味湿度を有

標原製

了、日本移民の過するもの以上のもあるや、
日本國の天地を開かん、持来の者、長の期しを待たずし、滿蒙
經營の四策は、支那の南端より以上、其の必要のよき
とを信ず。

○支那の便衣隊するもの如くも也支那の南端に過せざ
るものから見んや、此の一族は、其の爲め一時の糊口を
凌ぐ羊賊の如く見ゆ、故に荒し、滿蒙の新國家たり
軍國亡びし、正親兵の解散する、曉の職を失ふもの
皆便衣隊とす、其の騒擾を遣ふす、しと思ふもの無現
からざる如くも、元來便衣隊の正親兵の使族する下
職の如きもの、正親兵ありての機械も、思ふ
故に多數の正親兵あり下る、多數の便衣隊あり、便衣

隊の正親兵の消去と共に酒日長するものなり、軍制作んじ
正親兵を要する時、便衣隊中人を其の力を送出す
るを得ん。事火に就て見ても、初め正親兵の大いなる動き此
の時より大部隊の便衣隊出沒し、今八百に満する
もの出沒を以て思ひ、式の便衣隊の定むる
二〇二等と、警察の力をも容易に掃蕩すること
得べきなり、尚ほ産業五圓の方針下に、除隊の兵を以て
産業に従事せしむること、多くの失業者を生
づ可らざる也

三月廿九日記

○今も十年前大隈元侯の回民葬を告げし時大衆或
十萬の名刺を受けし日比公園の各所の入口に大なる
名刺受出を置き、是に技画せしめ、此より武後早大の

標原刺

回書館に保存し、今年十年祭を告げし方り當時
葬儀の事務を執りし館員中、三紀念の具とな
さんと先頃より整理す思ひ立ちアルハ、各刺を特
入して漸やく成るも報す、其名刺の數七八萬に達す
と云ふ中、東郷元帥の如き巨人の名刺もあらず、書生や商
人の名刺もあらず、名刺は侯との関係因故を記し、或は
手帳の紙を外して鉛筆の名をも認めしものあり、一人數
枚の名刺も投じたるものあり、當時混雑の際、各刺を
てし入場し、此の或は多きものあり、これ勿論、
入場せしものも亦紀念の爲に保存するの要あり、
小林余と謂ふに、識語を以てんことを以て、余流して
未だ筆す、至る、未月十年祭より或る、南し方

を以つて紀念式場を備へ衆庶の悦び供養と擬す三

月廿日記

○左の一書は有用の書なるも稀覈得難きもの也今日
散策の中文行巻を以て得て架中に列す

陸奥郡郷考

此書一関文字元龍関の著すものも卷首に提山
徴典の序文あり天保五年 陸奥江戸の書肆須
原屋花吉所外四巻の書也之傳う秘心版也

○西洋笛吹玩具の蒐集家として玩具を撰り書家と
しと知る。是般若木十畝と暹羅に赴く。余此人と
共に四輪社中なるものもえんも當りて而得を得ざり
しか。執海に於て初め此人に會ひ、所歎暹羅

地帯の玩具を會ひ、斯る。其金の巻のことも是也
中の裏アヤメを撰りて贈る。シヤに就いていふく
と流す。空えう。佛教圖とを流し、多く佛あり、流す。
アンゴールの大奴賣のうの勿論、今も於て是も力あり
ハ佛徒も、俄然戒を持し、僧徒のいふ心と女戒を守り
ぬき、其の不淨を相端、其の淺を懐り、
と流す。其のつらさをを、其のから教ふこととを、其の
鐵鉢の不淨を忌むこと、其の古く、施物を是れ
入る、其の人の手か、此の事も、鐵鉢に、觸る、其の大
夏の弊も、其の、施の注意が、其の、や、其の、
僧徒の施物、其の生活、其の、其の、其の、
を施す、其の、其の、其の、其の、其の、

盛つて幾千人分を供すと云ふ生殖教が盛んじある尼
寺といふ女子が木彫の大男根を捧げるとも禮と云ふ
不があるところある、衛生帖を示さるゝこんらんを
男根が描かんとある。女人の氣が生殖の上から導か
せん任文の裝飾も氣の描かんとあるのを一部採
て切つたを流るゝ男子の娘んじ女人の氣の縮んじ
流すも女人容易に止んじを之んを肯んじ
ハ即ち交媾と流すも之んを此路口をうねる
り敢て果とするも是れと云ふ、憧憬の的とり
度又此れをきこおもあるが如し、西洋風の文化も
移入さんといふが、まんがの習慣もあるが折衷して
のうらうらう用いするものが多い、自今が曲歌の復活



がおりろく感したの、銀座あやうのエローハウスな
かの多く軒を並べた街衢がある、まんがの自動車
を馳せると、その店舗の前へ達すると、運転手は表
裏のどこともろくもつては舞ふ、まんがの店舗か
らボリーが出て来て、注文を聴く何んかおれま
のよをとまあと、ボリーは各店舗を回つて其の
物を調く来り車中へ入る客へ茶をさそふ茶も
酒も菓子も其の飲食をさし得るやうにして
ふ、まんがの事の結果としてボリーの吹く音もさ
き運転手の吐き吐きも来るといふ、おせうも改向
也、此回の宮廷に仕へる女子の絶好のお出を許さ
るゝ為り退官屋のきこぶを以て人形を危し

んじ程中七をかくる中二のちりく巧みさのちある下る日
本の奥^{和音の}中^ハハエセエも此つれやうなこゝろに美作
を^残残^りに^易易く^と購^ひの^高高^店店^があ^らう^第の^歌歌^ハ美人と買
と^しし^てある^に七^持持^ち留^つれ^と言^ふが^余余^は好^むん^れの^也也
かの^いいと^なな^あら^う。

八生田七郎の漢書

の道にの着い養術家が一國と云うて日離懸社と云ふ
を組織してあるものがある。坪内逍遙の漢朝諸侯に
に及んぬるを云うてその後指して縁部とあるものも、此亦
の或る部分の人をわつてあるか、こん等には由道と云ふ中
心として年一二回赴海に合するものと例と云うての
この心道と云ふは、君も入合して自分を扱はせんとし、社
中より其海のものか多く且つ合心と云ふことや、時
利唐自合の又いひやりおぬと云ふのは、自分も流
して四月一日初めて合心と臨んじられ、此方の合心
と差支のものは多く、僅うな七人の人が出席し、
遊きころころつれ。全体合心は二十数名ある内、此

漢書

の人七少くさのりある。則ち左の人々がまんびあつて、僅
かにの印を附して、此文が出席し

- 由山 深谷 天島 龍瀬 杉天 寛方
- 栄心 富浦 (二作) 朗風 (首元) 五歌 (吉原) 玄
- 月 (六作) 北山 (金子 都立 多作) 田澤 良天
- (中) 南 葉 江 石川 年三 (中) 美の 田之 幸 (細)
- 島 吉 兵 衛 (世 治 後)

一日の夜、夜木の端に在るといふ所として、為の深更に及
んば、数々とも元氣ある中、無邪氣に、飲み且、後
つらつらと、其を免ぐれ、西洋蒲葎の、
口から物つれ、其、野中、土、毒、
免、伊、山、杉、横、谷、渡、田、余、
余、道、遠、の

舊唐書の跋に款面の紙刺が出来たとその紙刺に
から離脱連を世帯回しと出さけ一日に全書と舊唐書
に就て語る事ありて昔西うらの海を仰ぐ花枝
塵を塵まほ梅と堂一つ古遺の意あり代を
徳ぶの事無むあつて漢田を余女前田車に時いろく
注意にありて道造に因みある事をお中集の書留
も漸やく世帯回しとみれば愉快を覚え此の一日
を聞きけり一日往りの事を書き散らし一日松
かんて道造方に執りて道造に午の客の客名を
あつたか何ありの事ありて道造の客名を
の新化鬼子母神の詞後と聴きしことあり
たえんか松の書と執つて書き散らし一

松の書

松の書は満る約五時ありて漸やく終るなり
四月三日松の書

○前掲早大図者録に於てアウエオ列に貼付したる四氏
養叔刺の巨冊に四氏表紙痕の標題を書き巻首
に左の序ヲ録す

大正一年一月十日 日比谷公園に於て大隈叔侯の四氏
養叔の書あり時官民諸階級の場に入る事の無慮
三十萬人を果し一々名族の皇は特に入口に設
けたる各個名刺受の大函に皆満つ式後早大図者
館に移し収められ保存して一紙も欠ることあり今
茲故侯の薨後十年日比谷公會堂に四氏敬慕
式を奉るに當り早大図者録より各刺の趣を釋

を企て十数日を費してアイの工才別にアルハムと杜撰
し畢り式十の巨冊成ると告ぐ收ある所の各刺
ハ萬一達しあらざる階級の人衆を包羅す感入
多しと謂ふべし然れども當時混雜の際若刺を授
せりしもの實に少しとせし是れ實に或る部
分を以てきざらんと、國民表誠の一端ハ之れを以つ
て窺ふを得べし、今本冊に國民表誠痕と云ふ
し其れ永久保存を庶幾すと云ふ、昭和七年
四月十一日國民敬慕會追悼の式を奉るの日謹
んて謹す

○國民敬慕會追悼文松平原國撰文左ノ如シ



維レ昭和七年四月十一日大隈侯國民敬慕會恭シク
幣帛ヲ奉シ酒饌ヲ奠シ敬ミテ侯爵大隈重信公ノ靈
ヲ祭ル、嗚呼公ノ薨ジ給ヒシヨリ荏苒トシテ茲ニ十
年、哭泣ノ淚未ダ乾カザルニ、何ゾ星霜ノ速ナルヤ公
昔シ一介ノ書生ヨリ起リテ維新ノ朝ニ立テ一躍シ
テ參與トナリ、又一年ヲ出デズシテ參議ニ列シ、遂ニ
其首席ヲ占ム、絶倫ノ才略アルニ非ズンバ、安ンゾ能
ク此ニ至ラン、公ハ常ニ難局ニ處シテ擾レズ大事ニ
臨ンテ善ク斷ジ登庸ノ初ヨリ一たび改革ノ擧ニ出
ツルヤ、邁往直前シテ群議ヲ顧ミズ、疾風迅雷ノ勢ヲ
以テ之ヲ遂行シ、財政ノ整理外交ノ刷新宛モ快刀ノ

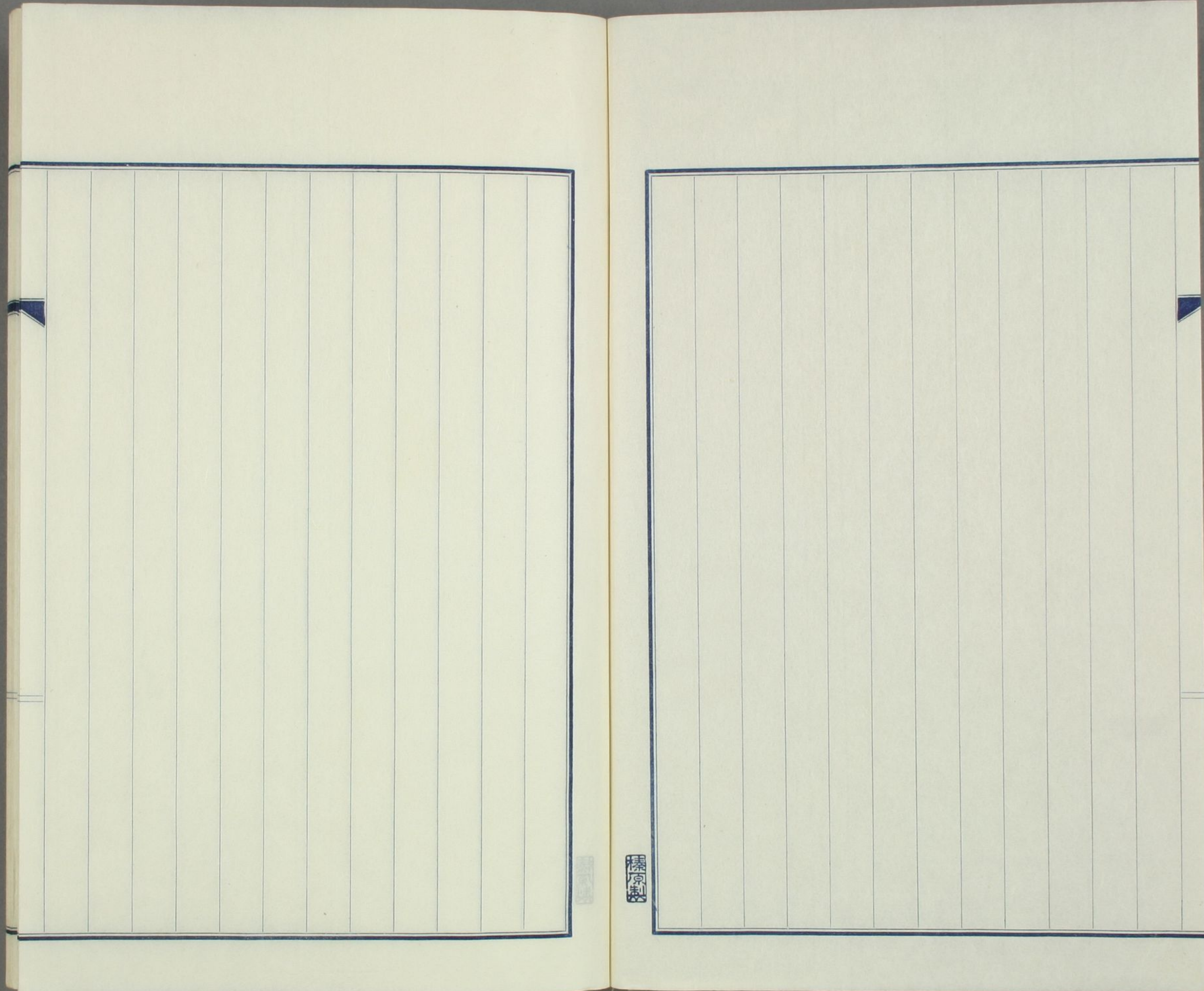
亂麻ヲ断ツガ如ク、其手腕早ク已ニ此ニ見ハル而シテ要路ニ立ツニ及ビ、世界ノ大勢ニ鑿ミテ以テ國家ノ進運ヲ導キ制度典章歐米ノ長ヲ採リテ以テ維新ノ治績ヲ濟ス、夙ソ當時ニ於ケル文明的施設ハ一トシテ公ノ與ラザルモノナシ、其退官ニ至ルマテ數年ノ間參議ノ首席トシテ大ニ其抱負ヲ展ベ、執位薰灼翹然トシテ天下ノ望ヲ負ヘリ、而シテ晚年復ビ起テテ内閣ヲ組織セシ時代ニ於テハ蓋德茲ニ高ク、兩朝ノ元老トシテ社稷ニ重キヲナシ、大正天皇陛下ノ御信任極メテ厚ク攝政殿下モ亦待ツニ師保ノ禮ヲ以テシ給ヘリ、其在朝ノ豐功偉績今尚ホ赫々トシテ人ノ耳目ニ存ス

然レトモ公ノ偉大ヲ見ルベシモノハ順境ニ在ラズシテ逆境ニ在リ、廟堂ニ在ラズシテ民間ニ在リ、公ノ言ニ曰ク、政治ハ吾輩ノ生命ナリト、乃チ窮達ニ因リテ其志ヲ變ヘズ、一旦廢黜セラレテ野ニ下ルヤ、閥族ノ壓迫ヲ被ルモ屈撓スル所ナク、堂々民極ヲ提ゲテ起テ改進黨ヲ組織シテ之ガ總理トナリ、立憲制度ノ機関トシテ早く國會ノ開設ニ備ヘ以テ憲政ヲ扶植シ今日ノ發達ヲ促シタルコトハ豈ニ日本憲法史上ニ特筆スベキモノニ非ズヤ、古來功臣ノ隱退スル者汲々トシテ子孫ノ計ヲナスニ非ザレハ則チ聲色ニ溺レ風流ニ耽ラサル者少シ、公ハ則チ此レニ異ナリ、其教育ヲ尊重スルヤ是ヲ以テ慰樂トシ此レヲ以テ事業トナシ、夙ニ學問ノ獨立

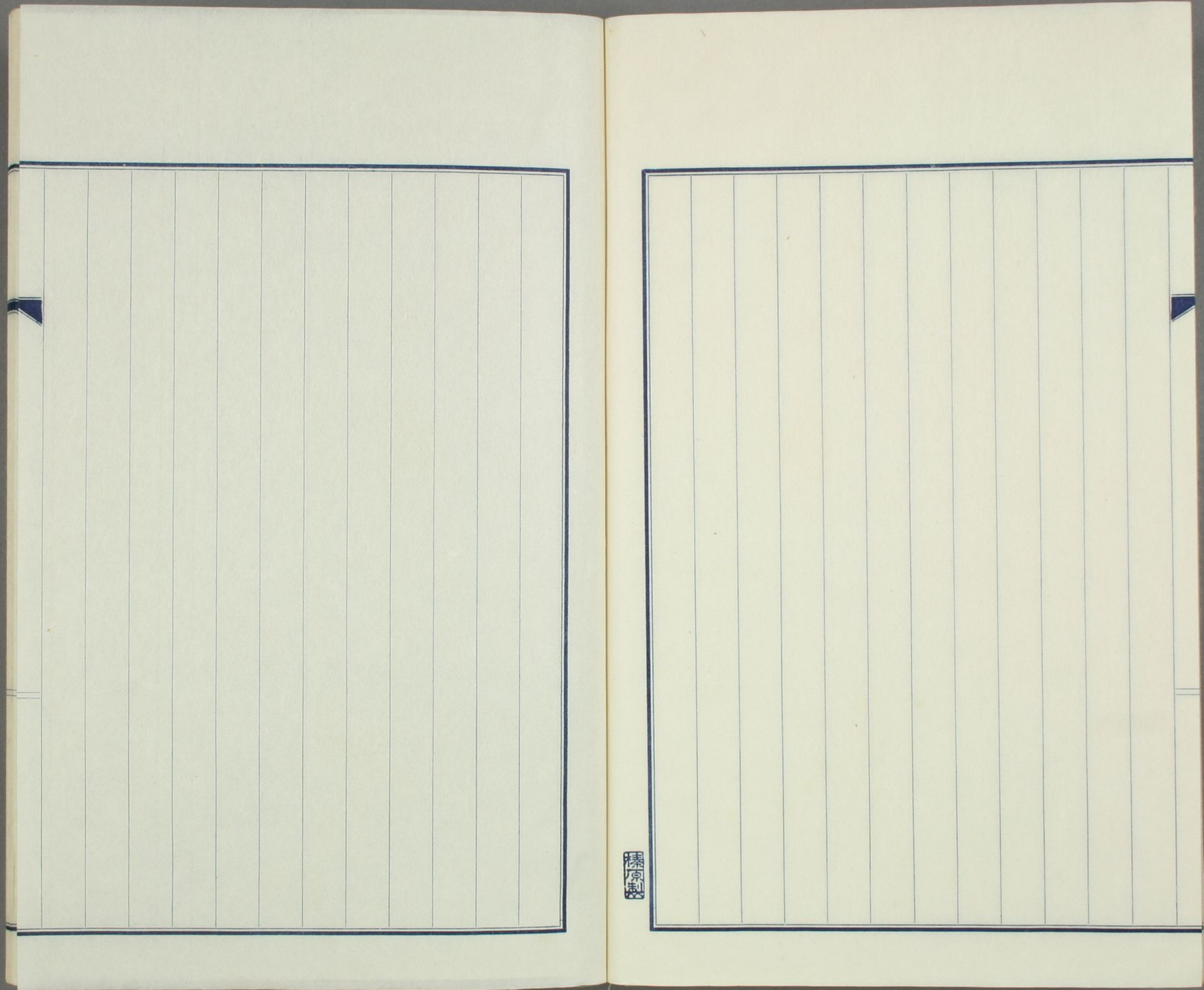
ヲ唱へ私財ヲ捐テ、早稲田大學ノ前身タル東京專門
學校ヲ興シ人材ヲ養成シテ國家社會無窮ノ用ニ供シ
其造就セシ所ノ俊髦今已ニ二万ニ下ラス餘惠ノ及ブ
所此レヨリ大ニシテ且ツ久シキモノナカラシ、此レ豈
ニ教育史上ニ大書スベキモノニ非ズ、然レドモ政黨
ノ樹立、私學ノ建設ノ如キハ尚ホ類例ナキニ非ズ、若シ
夫レ公ノ檀場トスベキモノハ、則ケ國民外交ノアルア
リ、公ハ常ニ言論文章ニヨリテ日本ノ真相ヲ世界ニ紹
介シ、我國際的地位ノ向上ニ努ムルト共ニ列強ノ誤解
ヲ正シ、テ猜疑ヲ釋キ、平和ノ大精神ヲ以テ彼我ノ情意
ヲ感孚セシメ、日本國民ノ代表者トシテ世界的名譽
員ニ大問題ノ起ル毎ニ公ノ片言隻語モ歐米諸國ニ傳

ハリテ轟然タル反響ヲ生ズルニ至リテハ開國以來獨リ公
アルノミ、今世ニ獨歩スルノミナラス、將來ニ於テモ恐ラク
ハ其匹少カルベシ、豈ニ曠世ノ偉人ニ非ズヤ、蓋シ其氣局ノ
濶大ナル度量ノ寛裕ナル、理想ノ高遠ナル、知識ノ該博ナル、
意志ノ剛毅ナル、精力ノ旺盛ナル、卓然トシテ群ヲ拔キ、之ニ
加フルニ強記ヲ以テシ、之ニ重ヌルニ雄辯ヲ以テス、是レ其
大人格タル所以ニシテ、朝ニ在リテハ國家ノ柱石トナリ、野
ニ在リテハ民人ノ師表トナリ、舉國追慕ノ情、久シキヲ經テ
愈ニ切ナルモノ、豈ニ偶然ナランヤ、今敬慕會ガ特ニ此ノ日
比谷公園ニ於テ祭典ヲ行フ所以ハ、曩ノ國民葬ノ例ニ循ヒ
廣ク國民ト之ヲ共ニスルニアリ、公ノ靈ソレ必ズ之ヲ悦バ

公ガ己ニ世ヲ去ラレシヨリ國民ハ其指道者ヲ喪ヒ、俛ニ
トシテ往ク所ヲ知ラス、況ヤ今日ノ如キ國歩艱難ノ際ニ
於テヲヤ、若シ公ヲレテ在ラシメバ、吾人ハ其必ズ大局
ヨリ觀察シテ善後ノ道ヲ緝ズベキコトヲ知ル、其必ズ
大聲疾呼シテ聯盟ノ蒙ヲ啓キ、之ヲシテ國際ノ公義
ニ由ラシムベキコトヲ知ル、嗚呼己ミヌルカ、
タタル天壤焉、クニカ公ヲ求メン、然リト雖モ公ノ英魂
毅魄、ハビズシテ長ヘニ存ス、冥ニノ中、將ニ必ズ皇基
ヲ護リ、國家ヲ綏ンジ、國民ノ誠懇ニ對スルア、
シトス、庶幾クハ未格シ給ハンコトヲ、



標原製



張原製

IMPERIAL THEATRE

A Week Commencing March 31st
 (1) PARAMOUNT SOUND NEWS
 No. 3-56
 (2) —A Columbia All Talking Picture—
 "THE CRIMINAL CODE"
 From the play by Martin Flavin
 Adapted by Fred Niblo, Jr.
 Directed by Howard Hawkes
 Photographed by James Howe

CAST
 Warden Brady WALTER HUSTON
 Robert Graham PHILLIPS HOLMES
 Mary Brady Constance Cummings

INTERVAL
 (3) —A Paramount All Talking Picture—
 "DR. JEKYLL AND MR. HYDE"
 Based on the novel by Robert Louis Stevenson
 Screen Play by Samuel Hoffenstein
 and Percy Heath
 Directed by ROUBEN MAMOULIAN
 Photographed by Karl Struss

CAST
 Dr. Jekyll (Mr. Hyde) FREDRIC MARCH
 Ivy Parson MIRIAM HOPKINS
 Muriel Carew Rose Hobert
 (4) —A Paramount Talkartoons—
 Betty in "BOOP-OOP-DOOP"
 Hogakuzo—This Week
 "24 HOURS" A Paramount All Talking Picture with Clive
 Brook, Miriam Hopkins and Kay Francis. Gloria Swanson
 in "INDISCREET" A United Artists All Talking Picture.

上映順序
 (三月三十一日)
 一、パラマウント発聲
 ニュース (三ノ五六)
 コロムビア日本版発聲
 二、光に叛く者
 休 憩
 パラマウント日本版全発聲
 三、ジキル博士とハイド
 曲馬團のベティ
 帝國劇場
 (日曜午前十時開館) 正午開館
 (柳入場料二圓 一圓 五十銭)
 ○電話 九の内 三七三〇 三七三
 三七三三 三七三三 三七三三

ジキル博士とハイド氏

南 部 圭 之 助

□ロバート・ルイス・ステイヴンスの「ジキル博士とハイド」が映畫化されたのはこれで四度目である。シエルドン・ルイス主演の「バイオニア映畫暗黒の恐怖」(キネマ倶楽部封切)・ジオン・バリモア主演の「狂へる悪魔」(ライオン・フィルム封切)・フランク・クラフト主演の「狂へる悪魔」(ライオン・フィルム封切)・ジョージ・ブーゲン主演の「狂へる悪魔」(ライオン・フィルム封切)の四作がある。このうち、ジオン・バリモアの「狂へる悪魔」が最も名高い。監督はジョアン・エス・ロバアツソン、助演はマサ・マンズフィールドとニタ・ナルジ。一九二〇年度のバラマウント代表作の一つとして「ミラクルマン」真夏の狂氣」などと並び稱された。

□「前作「狂へる悪魔」に於ては、ランヤン博士は、親友ジキルの身を憂ひて己れの死期を早めてしまふのに、この新作品ではジキル博士がハイド氏であることを警官の面前で暴いてしまふ。また前作品は、最後にハイド氏に變るべき薬物が一滴もなくつてそのまゝ自殺してしまつた。

□「陽氣な中尉さん」とこの「ジキル博士とハイド」は、目下邦楽座で封切中の「廿四時間」ミリアム・ホプキンスはシルヴァリア・シドネイを今年追ひ抜くだらうと期待されてゐる。

藤原

士博ルキジ ドイハと



原名 (Dr. Jekyll and Mr. Hyde)
 パラマウント西部撮影所製作。ロバート・ルイス・ステヴ
 インソン原作。サミュエル・ホフエンシュタイン並にバ
 ーシー・ヒース脚色。ルウベン・マムリアン監督。カア
 ル・シエトルツス撮影。田村幸彦譯。一九三二年一月二
 日發賣。

配役
 ジキル博士(ハイド氏)……………フレドリック・アマチ
 アイヴィ・ピアアスン……………ミリアム・ホフキンス
 ミユリエル・ケリユウ……………ロオズ・ホバート
 ランヤン博士……………ホームズ・ハーバート
 ケリユウ將軍……………ホリウエル・ホツプス
 ジキル博士の忠僕……………エドガア・ノートン

梗概

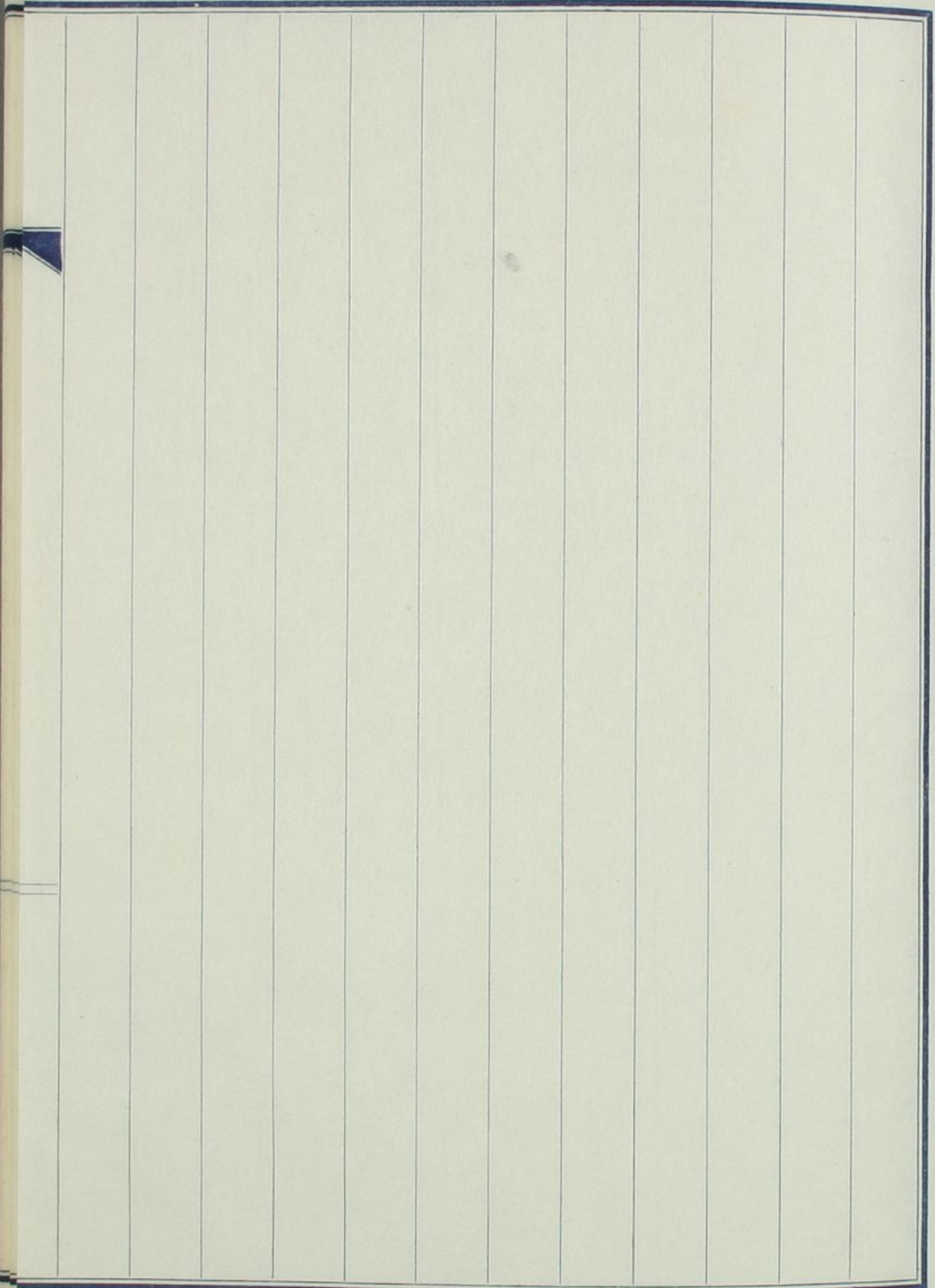
百年前のロンドン。
 ジキル博士は、人間の善と悪の性質を薬分によつて二分し、悪を
 解放すれば、悪はその人の体内から出てしまふと云ふ學説を発表し
 ますが、不道徳なものとして笑殺されてしまひます。
 ジキル博士は慈悲深き醫師としてロンドンの貧民窟では神の如く
 慕はれておりました。施療病院の貧しい患者の面倒を見つゝ、つひ許嫁
 者ミユリエルとの約束に遅れること多くそのために彼女の父ケリユウ將軍は
 むしろ彼を嫌つてゐるかの様でありました。
 まもなくジキル博士は己れの學説の最後の實驗に移ります。燃えたつ薬物を一
 氣に飲み干した博士は、怖しいうめき聲をあげながら研究室をのたうちまわつて
 りましたが、次第に彼の面貌、手、足、悉くそれらは兇惡なものに化してゆきま
 す。解放された「悪」は體から出す、かへつて止つて「善」を押しつけてしまつた
 のでした。「悪」は自由！を叫んで狂喜しました。人の覺音に、他の薬物は再び
 彼をジキル博士に還し、今ハイドと云ふ友人が來たのだと云つてゐました。
 ケリユウ將軍は娘の結婚を己れの結婚した日にさせ様と望んでおり、二人の一
 切の希望をしりぞけます。ジキル博士は己れの本能のたまえを押しきれず、ハイ
 ド氏に變つて夜の街に出て、アイヴィと云ふ巷の女を鑑禁して己れの欲望を遂げ
 てゐました。アイヴィは怖しさに逃れることも出來ず、日夜泣いて暮しておりま
 した。
 かくて何度か薬物によつてハイドなる「悪」に變つてゐたジキル博士は、まも
 なく薬物を通じずとも、一寸した怒り、悲しみ、そう云つた衝動によつてハイド
 氏に變つてしまひました。泣いても、もがいても「悪」は次第に「善」を壓倒し始
 め、まもなくハイド氏はアイヴィを殺し、ケリユウ將軍をさへ殺してしまひます。
 人間としてふるるべからざる神域に手を出した者は、つひに「我れ魂を
 失へり」と叫んで業火の中に墜ちてゆきました。

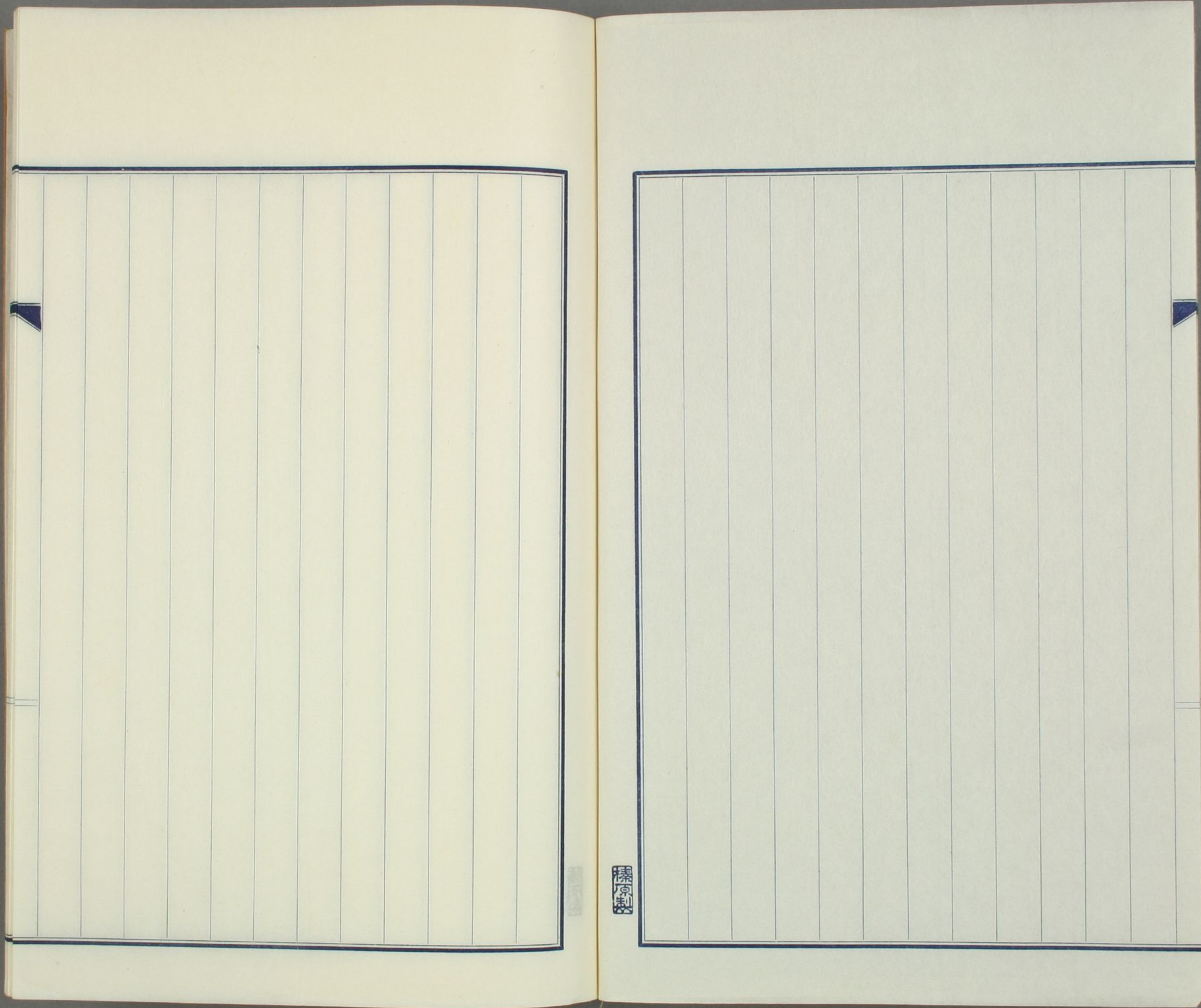




S.P.
SOUVENIR

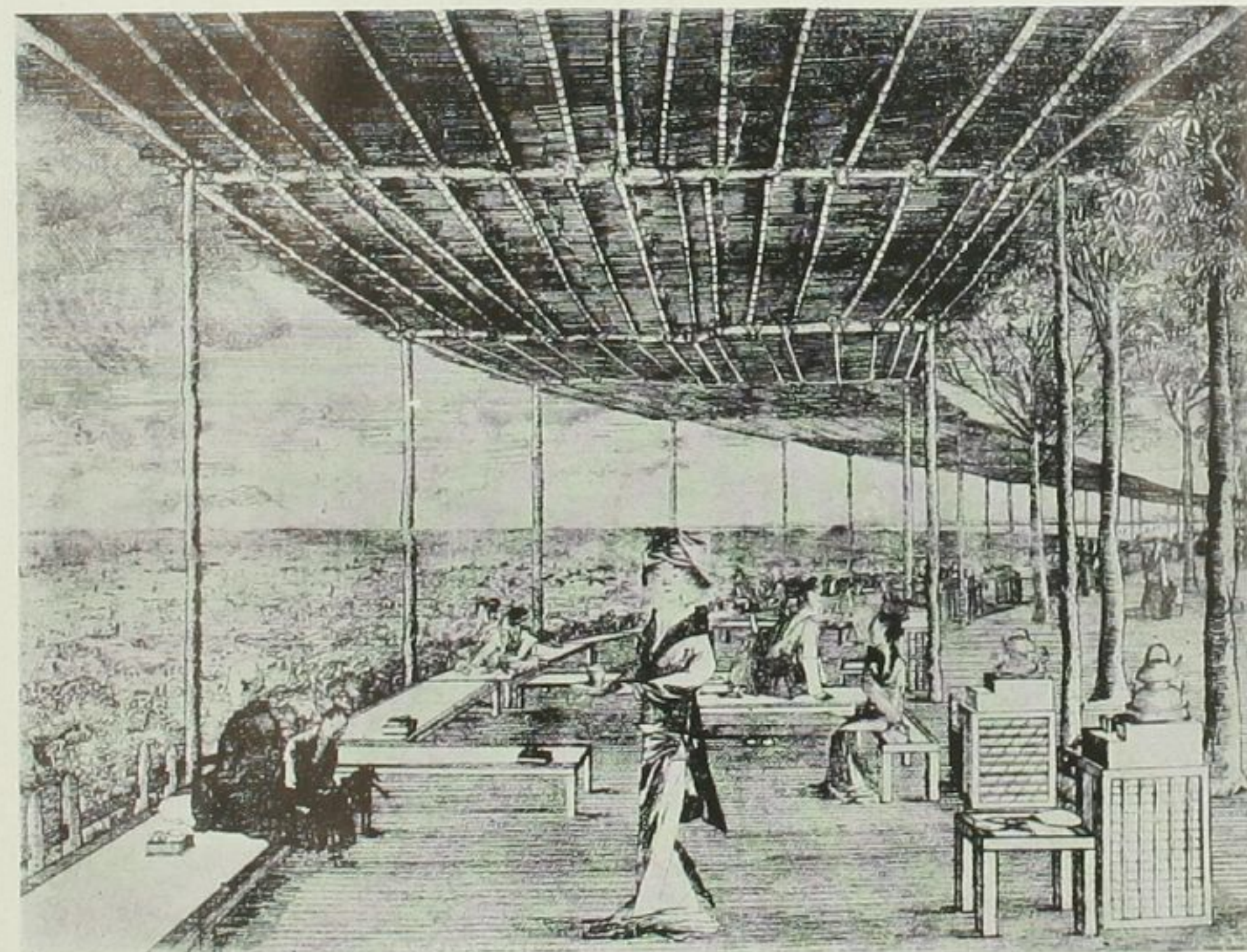
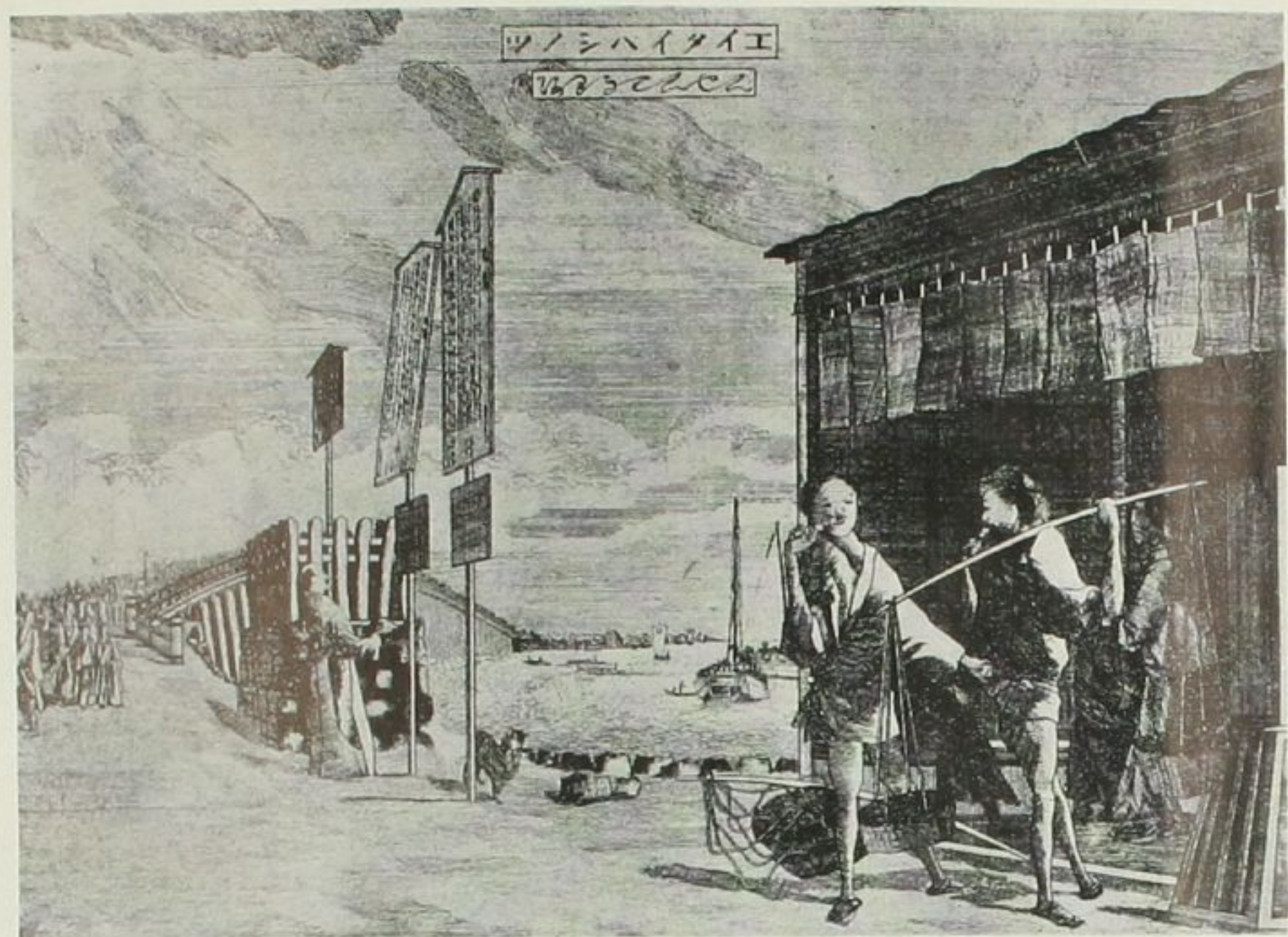
HERB
1983





雙河湖

以下
6 丁
白紙



山定貴と代永殿銅美田全次亞

標原製

